



少年
★が
序盤の街で暮らす
ような
物語

サトウとシオ
イラスト和狸ナオ

たとえば

コトワリの街で暮らす
ような物語

前の村の

プロローグ

お前には無理だと村の人々は日々に言いました。

ロイド・ベラドンナのことです。

彼は柔軟な笑みが印象的な好青年で、その見た目通り荒事よりも炊事や掃除、洗濯が得意で自他ともに認める「村一番のか弱い男」です。村の娘たちに「いいお嫁さんになれるね」なんて言われるのはもはや日課の域でした。

川に潜つても魚を捕れたことは一度もなく、薪まき

を集めのも日が暮れるまで時間をかけては人並み以下、戯たわむれに村の男たちと組手なんぞしたら次の日は丸一日寝込んでしまつた——などなどその逸話を上げれば枚拳まいきょに暇いとまがあります。

そんな彼が突然、村を出て王都の軍人になりたいと言ふものですから……加えてとても素直でお人よしな上驕だまされやすい性格なので村の中には軍人志望は疎か村から出て行くことすら反対の人間も少なくありませんでした。

ただいつもだつたら日和見ひよりみで周りに流されやすい口イドですが今回ばかりは違いました。その素朴な

顔立ちの奥から、ある種の気迫をにじませて下唇したくちびるを噛み締めながら己おのが決意を語るのであります。

初めて見せる彼の一面上に村の人間も困り果て、遂ついには村長に説得してもらおうと会合が行われるまでとなりました。村の行事や政まつりごとを決める以外では滅多にないことです。彼が村のみんなに大事にされている証拠でしそう。

ロイドが軍人になりたいと言つた数日後、屋下がりに一仕事終えた村の顔役たちに彼は村長の屋敷へと連れて行かれました。

村の北側にある小麦畑が一望できる風通しのよい広間の上に、まるで悪いことをした子犬のよう

にロイドは縮こまつて座ります。傍らに育ての親のお爺さん、そしてそれを囮むように村の顔役たちが鎮座し心配やら苛立ちやら、思い思いの顔を向けています。

緊張し汗が浮いたロイドの額を、まだ青い小麦畠の香りとともに春風が撫でていきます。

その風に揺れる麻の暖簾の奥から玉のようなかわいい声が響いてきました。

「すまぬみなの衆、待たせたの」

そしてほどなくして、ひよっこりと木綿のローブを羽織つた黒髪ツインテールの女の子——ぱつと見齡十二歳前後——が姿を現しました。

彼女がこの村の村長アルカです。ちんちくりんではありますが年齢はとうの昔に百歳を超えていて正確な年齢は本人も含めて誰も知りません。

本人曰く「世界を救うため不老不死になつた云々今では完全にネタ扱いです。まあ所謂口リババア……ただそのことを口にすると小麦畠に首から下を埋められて三日三晩放置させられるそ�ですが。そんな実年齢以外は言動が女子中等生の村長アルカはローブの余つた裾を摑みながらトテトテと上座に歩み腰をかけました。

竹で編んだ座椅子のギシとしなつた音が静かな

広間に響きました。間をおいて彼女はロイドに子
か孫に尋ねるような聲音こわねで話しかけます。

「ロイドや……王都の軍人になりたいのかえ？」

その瞬間、ロイドが返事をする間もなく、お爺
さんが反応しました。

「村長からも説得してください！
お前には無理
だと！　こいつ昔から変なところで頑固がんこなんです
わ」

たまらずロイドが反論します。

「無理つて……やつてみなきや……わからないよ

⋮⋮

「つて何言つてんだこのバカモン！　薪もろくに

集められない、川の魚なんて捕つたことすらないお前に軍人なんて勤まるわけないだろう！」

「た、確かに魚を捕れたことは一度もないよ。でも王都じや魚以外の食料だつてきっとあるはずだし大丈夫だよ……それと潜るのが苦手なだけだから……都會で水に潜る機会なんてそうそうないはずだよ」

その言葉に口を開いたのはふくよかなおばさんです。彼女は我が子をたしなめるようにロイドを説得します。

「ロイド、お爺さんが言つているのはそういうことじやないの。あなたの体力のなさを心配してい

るのよ」

ごもつともと、お爺さんは大げさに首を振つてはうんうんと唸る^{うな}のでした。

「なんだんだ。そんなこともできねえで軍人なんてなれっこねえべ。それにな、苦手つて言つても限度があるじやろ」

今度は腰に古めかしい剣を携えた精悍^{たゞさ}^{せいかん}な顔つきの青年がぶつきらぼうに言い放ちます。

「屁理屈こねて言い訳してんじゃねーつての。いつまでも苦手なのを克服できぬいお前が悪いんだぜ」

「うう」

落ち込むロイドに青年は露骨に顔をしかめながらいやらしそうに付け足します。

「——だいたいよ、水中に一時間しか潜れないなんて話にならないぜ」

「そうね最低でも三時間は潜れない」と、お爺さんの若い頃なんか三日は潜つてたわよ」

「四日じや」

自慢げにお爺さんは四本指を立てるのでした。

——ちなみに素潜りのプロとも呼べる海あま女さんは平均約五分ほど、世界記録は二十二分超だそうです。参考までに。

お爺さんはと「おーすげー」「さっすが爺

さん」と他の村人からの賞賛を浴び若干ニヤケ顔になりますが、すぐに取り繕い元の威厳たっぷりの顔つきに戻し、ロイドのほうへ向き直るのでした。

「ええかロイドや、それにたかだか牙^{きば}や角^{くづ}が生えた魚程度で苦戦してどうする。きっと海なんかもつとやばい魚がいるに決まつてるぞい」

「でも小説とかじや牙とか角のない魚もいて都会じやそれを食べているつて」

「馬^ば鹿^かこくでねえ！ 牙も角もない魚がどうやつて生き残つていけるんだ！ そんなんおつたら根こそぎ捕られて全滅待つたなしじゃ」

「う、たしかに……」

ちなみに彼らの言う魚とは『キラー・ピラニア』
というれつきとしたモンスターです。がんきょう頑強な角と、
牛すら三口みくちで食べきってしまうほどの大きな口と
牙を持ち手練てだてれの戦士です。水中では手も足も出
ない代物しろものです。

ぐうの音も出ないロイドに追い打ちをかけるよ
うに、次は作業着に身を包んだ木こりが声をかけ
ます。

「泳ぎが苦手だとしてもだ、木を切つたりだとか
薪を集めくるくらいはもう少しできるようになつた
ほうがいいと思うが……」

静かに、ゆっくりと悟さとす木こりに続いてお爺さ

んが斧おのを振る仕草を見せました。

「そうだ、『トレント』に気付かれねえようには近づいて一発で仕留められねーと一人前とは呼べねえよ」

ブンブンと振り下ろす仕草のお爺さんに異議ありと言わんばかりに身を前に出しロイドは反論するのでした。

「でもさじいちゃん、本とか小説じゃ王都は『トルント』じゃなくて普通のブナとか杉の木を薪にしているつて書いてあるよ」

「はあ……お前小説のこと信じておるのか」額の汗を手ぬぐいで拭ふきながら呆あきれるお爺さん。

横から木こりがそれは聞き捨てならんと口をはさみます。

「ロイド、そんな普通の木を薪にしたつてせいぜい三時間くらいしか燃えない。トレントは丸三日間は燃え続ける。言いたいことはわかるな？」

「んだ、どっちがいいかは馬鹿でもわかるで、普通の木なんて使つたら冬こせねーだよ」

「確かにトレントのほうが断然いいけど……」

——ちなみにトレントとは木の姿をしたモンスターのことで近づいた人間に木の根を突き立て養分を吸ってしまう恐ろしい魔物です。大体は倒したら消えてしまますが気が付かれずに倒したり運

がよかつたりすると形が残りそれは貴重品として
大金で取引される代物です。普通は薪の代わりに
しません。そんな様子を見たら商人だつたら声を
からして喚くでしょう。

木こりは部屋の柱に背を預け腕を組むと自分の
仕事について話します。

「木こりってのは村の家屋や冬の暖の為、汗水た
らして働く大変な職業なんだ。それに薪だけじゃ
ない、魚だって『買えばいい』のひと言で済ませ
てはだめだ。そんな気構えでは軍人なんてとても
なれないぞ」

強い口調で忠告する木こりに、ロイドの顔が陰げ

りました。そして思つた以上に落ち込む彼を見て慌ててフオローします。

「あ、いや、何もロイドに木こりの技術を身につけてから都会に行けど言つているわけじゃないんだ。音を立てずに忍び寄る歩行も、森に完全に溶け込む迷彩技術も、都会では必要ないかも知れない」

木こりでも必要ないと思います。

「……すまない、強く言いすぎた」

謝る木こり、そして叱咤しつたされたロイドは下を向きながら安直な考えを猛省していました。

そこに先ほどの青年がトゲのある言い方で声を

投げかけます。

「そんな魚がいるとか気構えとか問題じゃねーんだよ。ロイドが弱いくせに軍人様になろうつてのが一番問題だろ」

「それはあんちやんが強いから」

「こないだの剣の手合わせん時もかなり手加減しだんだぜ。それでも次の日、丸一日寝込みやがつて……いじめでもしたんじやないかつて、すげー悪者扱いだつたんだぞ」

「うう……」

嘆息を一つはさんでから青年は苦笑交じりで続けます。

「ハア……だいたいな、骨折ぐらい一時間で治せよ」

「全身だつたんだよあの時！ 全身複雑骨折じや丸一日くらいかかつちやうよ！」

「何言つてんだ！ 骨折なんてせいぜい長くて三時間だろ！ 爺さんなんか『やー』のかけ声一つで治したぞ」

「ちなみに骨折は一般的に重症の部類です。一か月はギプスと付き合う羽目に……つて言わなくともわかりますよね。

そして青年は腰元の柄に二匹の蛇^{ヘビ}が彫られた古めかしい剣を抜き放ちながら、ロイドに説教を続

けます。

「そもそもだ！ こんな古ぼけた剣が当たつたら
らいで骨折なんてしてんじゃねー！ 何だつけこ
のなまくらの名前？」 ガールズバーだつけか？
「何じやつたかな？」 カレーバーとかエクスカリ
バード…いやガリガリバーじやつたかな」

「ちなみにこの古めかしい剣の名前は『エクス
カリバー』かの有名なアーサー王の伝承における
神秘の剣で実に九百六十人の敵を切り倒したと
言われ、またカリバーンやコールブランドなど様々
な異称があることで有名です。」

「そうそう、ガリガリバーだ。なんか氷菓子みた

いな名前だつたなコレ」

神秘の剣が身も蓋もありませんでした。一回正

解はさんだのにスルーです。

「つたく、俺おれもオヤジから譲ゆられなかつたらこん
ななまくら使つてねーつての⋮⋮とにかくこんな
んでイチイチ怪け我がしていたら埒らちがあかねーつてこ
とだよ」

その流れに乗つてお爺さんが今度は別のことでの
ロイドを説得します。

「それにロイドや、おめえさんが体力もそうだが魔
法だつてろくなもん唱うたえられねえだろ」

「あーそういうやお前なんか唱うたえられたつけ」

魔法と聞き、少しばつの悪そうな顔をしてロイドは答えました。

「んつと術式は色々知っているけど……使えるのは雨を降らせる魔法とか……」

ロイドの搾^{しづ}り出すような声を聞いた青年は大げさに首を振りました。

「雨なんざほつときや勝手に降るだろう……せめて村長みたいに空から岩を降らせるとかよお……何だつけ、隕石^{いんせき}だつたつけ」

「隕石^{いんせき}じゃな。懐かしいのぉ、昔裏手の山に出たモンスターを追つ払^{おぱら}つた時のことを思い出すわい」

「あん時の魔物は傑作だつたぜ『世界を滅ぼす』

とか『人間は増えすぎた』とかわけのわからんことをグチグチと言つてたな、ハハハ

おや、徐々に思い出話に花が咲き始めてしまつたようですね。

「聞いてくれよ！ ついこの間なんか人間の姿してくつちやべつて来てさ、いざ追い詰められたら『この姿になるのも久しぶりだ』なんていつてトカゲに変わつてさ。いやー笑つた笑つた」

「だつたら最初からその姿で来いつてな、結局村長呼んでる間おばちゃんがのしたんだつけ？」

「そうなのよ。二、三発ホウキではたいたら動かなくなつちやつて、後片付けが大変でー」

話が脱線し、酒の席のような雰囲になつてしまつたこの場をアルカが手をパンパンと鳴らし空気を戻します。

打ち水を打つた後のような静けさがまた広間に漂いました。

「思い出話はこのくらじにして……のおロイドや」

「は、はい」

「みんなの意見を聞いてもまだ決心は変わらないのじやな？」

「ハイ

静かに燃える眼を向けロイドは彼女を見つめます。対してアルカはどうと、

(ついにこの時が来たんじゃな……ロイドが軍人
に興味を持つようにならぬか、わい)

ま読ませたかいがあつたわい)
なにやら意味ありげなことを考へていました。
そして思惑通り事が運んだことを氣けど取られぬよう
優しい笑みを携えロイドに言いました。

「よからう。この村を出て王都で軍人を目指す
ことを許可する」

「村長！」

周りの大合唱にやおら立ち上がりアルカは「静
まれ」と手を掲げます。

「外を知る、ということは成長にも繋つながること

じゃ。見聞を広げることがロイドに必要だと思うぞい」

「しかし村長」

「それに男が一度決めたことよ。口出しするのも野暮つてものじやよ」

そう言つとアルカはくるつとロイドのほうに顔を向けます。母親が子に向けるような顔でした。

「でも、辛くなつたらすぐ戻つてくるんじやよ
……ここはお主の村なんだからのお」

「は、ハイ！」

みんなはその顔を見て「一番辛いのは村長なんだな」と察してなにも言えなくなつてしまふので

した。

さて、そんなアルカはといふと、
(ロイドと毎日会えなくなるのは辛いのじやが
⋮⋮ま、瞬間移動でこつそり会いに行けば万事オ
ッケージやしな⋮⋮むしろ村人の制止がなくなり
イチヤイチヤチャンス!)

⋮⋮この脳内を村の人間にさらしたら別の意味
でなにも言えなくなつてしまふでしようね。

かくしてロイドの上京は晴れて許可されたので
した。

ロイドの上京の件が決まつてからというもの、

月日が経つのは早く、それはロイドがこの村を好きで村の人たちもロイドのこと大事に思つていたことを確かめるような、愛おしくほんのり切ない日々でした。

そして遂に出発の日。空はロイドの門出を祝うかのように端から端まで青々と澄んでいます。

その青天の下、厚いテント地の丈夫なズボンと動きやすい麻のシャツ、そして小ぶりのナップザックといつた！ 正直「え？ 日帰り旅行？」と勘

ぐつてしまふかのような格好のロイドがそこにいました。なんとも申し訳なさそうな表情です。

それもそろでしよう、村の人間全員が各々の仕

おの

事を後回しにしてロイドを見送りに来たのですから。立派なアーチのかかつた木造（トレント）の門が村人たちで埋め尽くされていました。

その中心にいる村長のアルカは一步前に出ると。しげしげとロイドの顔を見つめます。

「本当は途中まで一緒に行きたいのじゃが……これも一つの勉強じゃ、一人で行くがよい」

実際は村長と一緒にするとそのままついて行つて帰らなくなることを村の人々が危惧したためです。「ロリババアの溺愛できあいここに極まり」は村の共通認識なのでした。そんな思惑など知らずロイドはさわやかに、そしてどこか寂しげに「はい」と

返事をします。

そして親代わりのお爺さんが近づきロイドの肩をバンバンと叩きます。

「王都はこの大陸の南端じゃつたろ？　走つて二日かの、トレーニング感覚で行つてこい」

「あはは、じいちゃんの若い頃と比べないでよ——大体一週間かな」

「そんなんのんきなこと言つておると都會の流れについていけんぞ。都會の人間はみな忙せわしないと聞くからの」

「う、ん。頑張るよ！」

少し上ずつた声のロイドに「泣くなよ！」なん

て野次が飛んできます。場が小さな笑いに包み込まれました。

「おおそうじやロイド。王都についたら『イーストサイドの魔女まじょ』つて奴に世話になりなさい。この水晶を見せたらきっと協力してくれるはずじゃ」アルカが手渡したこぶし大の水晶をナップザックに詰め込むとロイドは柔和な笑みを浮かべ、「ありがとうございますと村長。ありがとうございます。」行つてきます！

何度も振り返りながら山道を降りていいくのでした。その姿を見届けたお爺さんはついつい不安をつぶやきます。

「ふう……しかし大丈夫かのロイドの奴は」

その言葉にアルカはぽろつと本音をこぼしてしまいました。

「全然余裕じやろーってゲフン！ なんでもないぞい！ さあみんな仕事に戻るんじゃ！」

アルカはちょっと「やつちやつた」という顔を咳払いをしてごまかすとみんなを村の中へと誘導するのでした。

（ほんとは弱くもなんともないのに周りが輪をかけて強いせいで自分を卑下しているからのお。この旅で自信を付けてほしい次第じゃ……そして――）
アルカはもういなくなつたロイドのほうを向き

ました。暖かい春風が頬ほおに触れ、遠くの山脈を見
る目が細くなります。

（ワシの悲願のために……頑張つて軍人になるん
じやよ、愛しいロイド）

ここは最果ての村『コンロン』
古いにしえの英雄たちが世界を救つた後、世俗を離れ安
らぎを求めた集落。

この村の人間はみな、英雄の子孫にあたります。
そんな人外の集う村の中でも最も弱く最も素直な
少年『ロイド・ベラドンナ』

この物語は彼と、その周囲の織りなす『勘違い』

で綴づられていく、そんなお話です。

— そうですね、今風に例えるならラストダンジョン前の村の少年が都会にあこがれ序盤の街で暮らすような物語……といつたところでしょうか。

第一章 たとえば新しい部下が社長の息子だと発覚した時のよくな手のひらの返しよう

さて、ではこの物語の舞台『アザミ王国』についてお話ししよう。

この国は大陸の南端に位置し暖かい気候に恵まれた過ごしやすい地域です。加えて海産物豊かでやかな海に面し、大陸を縦断する大河が国へと繋がっているため物流に関しては近隣諸国と比べ頭一つ抜けていました。

そんな交易の盛んなアザミ王国は大きく五つの区にわかれています。王家や貴族が住まい軍部が駐屯する中央区、国の玄関とも言える様々な商店が集うノースサイド、整理されたベッドタウンとも呼ばれるウェストサイド、交易の要である港に一番近くノースサイドとはまた違った活気を見せるサウスサイド。

そしてロイドが向かうイーストサイドはどうと、身も蓋もない言い方をすれば王国の吹き溜まりというような場所です。

王国内にあつて王国とは言い難い治安で、まるで急な来客の際のとりあえず見栄えだけでもなん

とかする為にあれやこれや無理やり押し込んだ感のあるタンスの中身のようには猥雜とした区、それがイーストサイドです。

中流から下流の家庭が大半ですが、ちよつと奥まつた所に行くと多種多様な人間による独自の法が存在する別世界が広がっています。

ビビの走った何年も手入れされてない石畳、ゴミのか商品のかわからない何かに木切れの値札が無造作に引っ付いている家屋の軒下、無駄に露出の多い妙齡——いや、高齢に片足突っ込んだ女性たちが気だるげに談笑してしたり……と、寂れた光景が来るものを迎え入れます。

そんなイーストサイドの裏通りを夜半、小さなナ

ツプザツクを肩にかけ田舎者丸出しだでロイドはギヨロキヨロしながら目的地へ向かつていつたのです。

無論そのような出で立ちで裏通りを歩くなど「力ツアゲおなしやす」と言わんばかりですな。早速勤勉なチンピラたちが足早にロイドのそばへと寄つてきました。

チンピラは威嚇しながら歩いてきますがロイドは意に介さず素通りしようとします。

「無視つてか……へえ、じゃあこの手で絡んでやるか」

先頭を歩くチンピラは肩を思い切りぶつけてき

ました。俗に言う『当たり屋』という手口です。

どういう手口かというと……

「あああ痛ええええ！」

このように自らぶつかり痛がる素振りを見せ、「あ、兄貴！ てめえどう落とし前つけてくれるんだ小僧！」

と、因縁をつけて小銭をせしめるといつたやり方です。みなさんも繁華街などでは十分お気を付けてくださいね。そして不運にも当たり屋に絡まれたロイドは呆けるばかりです。

「へ？」

「へ？」

じやねえよコラ！ 兄貴の肩イカレちま

つてんじやねえかコレ！」

「痛え！ マジ痛てえ！」 医者！

骨いつてる！」

「でも軽くぶつかつただけですよ？」

「医者！ 医者！」

脂汗をにじませ身をよじり、兄貴と呼ばれる男は迫真の演技？を続けます。「今日の兄貴はノッてるなあ」と思つた弟分も熱演にあてられ気合が入ります。

「なわけあるか！」

慰謝料いしやりょうだ慰謝料！

有り金！

身ぐるみ！

全部おいてけ！

もちろんパンツ

も脱いでいきやがれ「ラフ！」

「いしゃあ……」

弟分が金銭とパンツを要求している最中も兄貴分は悶え苦しんでいました。そして次第に弟分も彼が演技ではなく素であることに気が付きます。

「え？ 兄貴？」

「ガチじやあ！」

腫れてるだろうが、こんダボス

ケがあ！

い、医者じやこらあ！

マジでダメなやつッ」

その悲痛の叫びを見て、弟分はしばし呆然としました。その後、先ほど以上に血走った眼まなこで口イド睨むの

でした。

「あ、兄貴いい！ てんめえええ！ どう落とし前付けてくれるんだ小僧おおお！」

「あの、さつきも同じこと言われましたけど」「うっせえ！ 今度はマジじゃあ！ こつちは早く兄貴を医者に診せなきゃなんねえんだ！ グダグダ言つてねえでバシッと誠意を見せたらんから！」

そう言いながらサツと手を差し出し金品を要求するチンピラを見て未だロイドは小首をかしげたままです。

(えっと……バシッと？)

誠意？ うーんタツチ

でもすればいいのかな？

そう思いチンピラの手のひらを「バシッと」軽く叩きました。彼にとつての『軽く』、みなさんお

察しの通りです。

バツシイイイイイン！ と耳をつんざくような音が裏通りに響きます。軽く叩かれたチンピラの手のひらは三回転ほど肩の周りをぐるぐる回り地面に不時着……墜落ついらくしました。

「ほんぎやあああああ！」

今度は肩と手のひらがイカれた弟分がのたうち回る形と相成りました。チンピラは二人仲良く泥まみれです。

「え？ 何ですか？ 軽く叩いただけなのに？」

その大げさを超えたチンピラのリアクションにロイドは戸惑いを隠せません。心配し近寄ると彼

らはゴキブリのように這つて彼から距離を取ります。

「お、覚えてやが……いやつ！　忘れてください！」

テンプレートな捨て台詞すら卑屈になるほど心の折れた二人はお互いを支えあいながらよろよろとこの場を去つて行くのでした。

「ああ⋮⋮大道芸の人か何かかな？」　都會だし

呆氣にとられたロイドは『都會』という魔法の言葉で無理やり解釈するに至つたのでした。

そんなこんなで彼はただらかな坂道の途中にある雑貨屋にたどり着きました。店の軒下には古くさい薬ヅボが数点、

そして小さな看板には申し訳程度に「薬ありマス」と書かれていました。

明らかに胡散臭うさんくさそうな雰囲気が逆に魔女っぽさを演出……そんな店構えです。

「ここがイーストサイドの魔女さんの所か」

ノックをするのもためらわれるくらい古びた扉の隙間すきまから明かりがこぼれています。中に人がいることを確認したロイドは控えめに「ごめんください」とひと言添えて中へと入りました。

鋸びた蝶番ちよつづがいのせいでやたら重々しい扉の先には全身黒のローブにつばの広いとんがり帽子、ふちなしメガネでばつちり決めた『いかにも魔女』な

亞麻色の髪の女性がコーヒーを片手に本を読んでいました。年齢はロイドと同じくらいに見えますが、それを感じさせない空気を纏っています。

店内もまた『いかにも魔女』で作りかけの薬と乳鉢、見たこともない毒々しい色合いの植物の鉢、古めかしい書物が床に積まれており「らしさ」を強調しているのでした。

「……」

彼女は手に持っている分厚い本に落とした視線をかつたるそうにこちらに向けるとしばしロイドを眺めた後、また視線を本へと戻しました。本をめくる音だけが部屋に響いています。

あまりの対応にどうしたらいいのかわからなくなつたロイドはただ立ち尽くすだけです。それにしびれを切らせたのか黒づくめの女性はセミロングの髪を耳にかけ、「何かしら？」

とぶつきらぼうな言葉を浴びせました。ゆつたりとしたローブの上からもはつきりわかる豊満な胸が発した声で震えます。

「あ、の……イーストサイドの魔女を訪ねろと言われてここに来ました」

「ふうん、誰かの言伝かしら少年？」

「あ、いえ。使いの者ではなくて……」

「へえ、じゃあ私を『魔女』と知つてのお客様ね」
コーヒーをすすり、本を閉じると魔女は向き直りメガネの奥の妖艶な視線で睨め付けます。

「君みたいな若い子が魔女にものを頼むといふこと、それがどんなどとかわかつているのかしら?」

あまりにも仰々しいことを言われロイドは気後れしながら答えます。

「いえ、僕はそのただ訪ねろと言われただけで」呆れた顔で魔女はため息をつくと諭すように返しました。

「一古來より魔女とは対価を求め望みに応えるもので、相応の贊^{にえ}を出す覚悟が必要よ。それを知つ

てもなお求めの望みは何のかしら？　どのよう
な無理難題でもこの魔女マリーが導いてあげるわ
ー後悔のないようにな」

半ば脅おどしにも似たセリフ、ロイドはゴクリと唾つばを飲み込むと意を決し伝えます。

「ぐ、軍人になりたくて田舎いなかから上京してきました！

ちよつとの間お世話になります！」

しばし間があつた後、魔女は咳払せきぱらい一づ。

「コホン……古来より魔女とはー」

「あ、それさつきも聞きましたけど」

「とつと宿探して広場の募集要項でも見てこい
こんちくしようめ！」

先ほどまでのエキゾチックな雰囲気たっぷりの魔女は、一転して弟を叱る姉のように椅子から立ち上がりつて怒りました。シュンとするロイド、続けざまに魔女は悪態をつきます。

「まったく……魔女を便利屋か慈善事業か宿屋とでも勘違いしているのかしら！ そんな風に伝わっているの？ どこの田舎出身よもう！」

「えつとコンロンって村です……」

「あつそう。じゃあ村に帰つたらちゃんと伝えてちようだい、古来より魔女は……ん？ こんろん？ コンロン？」

椅子に座り直した魔女は顎^{あご}に手を当てなにやら

思い出す仕草を見せます。そして次の瞬間大事な忘れ物を思い出したかのような血の気の引いた顔になりました。

「えっと……少年、ちなみに、ですが、村長様のお名前は？」

「え？ アルカですけど？」

その名前を聞いた瞬間魔女の背筋がビシツとなり顔面は蒼白そうはくのまま汗だくになりました。手なんか軽く握つて膝上に乗せまるで面接を受ける就活生のようです。

そしてそのまま「いやしかし同名という線も捨てがたく今更いつたい何の用だろ……」と呪文の

ようにはつぶつ言い始めた始末です。そんな魔女を眺めていたロイドは何かを思い出し、小ぶりのナップザックの紐をほどき、中をあさりました。

「そうだ思い出しました。これ見せたらいいと言われたんですが……」

おずおずとロイドがこぶし大の水晶をテーブルの上に置いた瞬間、

「望みが潰えた！　あので間違いない！」

魔女はシユートを外したフットボール選手のごとく天を仰ぎます。

一方ロイドはその様子をつぶさに見つめ「ゴミカルな人だな」と感心しきりです。

その視線に気が付いたのか、魔女はとうと急いで帽子を脱ぎ、先ほどまでの余裕などなかつたかのような俊敏^{しゅんびん}な動きで亞麻色の髪を振り乱しながらコーギーを淹^いれ始めました。

「すいまっせん気が利かなくて！」で、本当に伝とかないんですか？　もしかして今、村長様が一緒に来ているとかそんな恐ろしいことは

「いえ、言伝はありませんし自分一人で来ました」

一人という言葉に魔女は「しゃオラア！」と雄叫びを上げ豪快にガツツポーズを決めます。大

人びた雰囲気はどこへやら。そしてその姿勢のままロイドに尋ねます。

「え」ではマジで宿代わりに私の家を……」

「と、とりあえず水晶を見せればわかるつて言わ
れたので」

二人の視線が件くだんの水晶へと向けられた次の瞬間
でした。オーロラのような粒子を纏まとうった光が水晶
の奥から広がつていき人の形を作り出していきま
す。

徐々に輪郭を現すその人物はロイドのよく知る
コンロン村の村長、アルカでした。そしてそのツ
インテールのよく似合う幼い容姿を目の当たりに
した魔女はどうと、「フヘー」

よどみのない動きで土下座どげざをしていました。そして額ひたいを惜しげもなく床に擦り付けながら「勘弁かんべんしてくださいー」と繰り返し繰り返し口から発しています。

そろそろ床から煙でも出るんじゃないかと思つたタイミングで水晶から映し出されたアルカが喋しゃべり出しました。

「久しぶりじゃのマリー、お主の師匠ししょうのアルカ
じや。覚えているかい？」

「フヘー」

古来より魔女云々と言つていた彼女の威嚴いげんはすでにどこぞへと消えていました。

「何年かぶりでこんなお願ひするのもあれなんじやが、私の大事な大事な村の子供のロイドが王国の軍人になりたいなんて言い出してな……ま、普通に合格すると思うんじやがそれまで王都での面倒を見てほしいんじやよ」

魔女は土下座を維持したまま質問を始めます。

胸が窮屈きゅうくつそうです。

つか……

「フへー……失礼ながらお聞きしたいことがいく

「あ、そうそううちなみにこの水晶の映像は録画だから、そつちの質問には答えられないのじや、すまんな」

その言葉を聞いた魔女は次の瞬間、

「なーによ脅かしちゃつてこのちんちくりん！
おど

相変わらず成長してないわねーへつへー」

豪快に立ち上ると、ころりと表情を変え水晶
をぺちぺち叩きながら笑い出すのでした。

で、その録画であるはずの映像はひと通り魔女
の手のひら返しを見た後、口の端をにんまりと歪
ゆがめながら彼女に視線を向け直します。

「なーんて言つたらすぐぼろを出すのは相変わ
らずじやなマリーちゃん」

「フヘー」

黒のケープを翻しながら魔女は瞬時に床に突つ
ひるがえ

伏しました。土下寝どげねです。その様子を氷の微笑びしょうで見届けた後、アルカは興味をなくしたようで呆れ口調で言いました。

「まあよい、久しぶりにお主の無様ぶざまな姿も見られだしの……とにかくよろしく頼むぞ。仮に試験に落ちてしまつても主ならなんとかしてくれるはずよな、マリーちゃん。んじやヨロシク……ロイドや！寂しかつたらいつでもワシが添い寝してやるぞい！」

そしてその言葉と同時に映像は光の粒子となり消えていきました。残されたのは棒立ちのロイドと胸が潰れるほど突っ伏す幼き魔女、なんともシ

ユーリルな光景でした。

ロイドは添い寝と言われ恥ずかしい顔を浮かべています。その足元ではもぞもぞと魔女が起き上がります。ロイド以上の「やつちまつた」感溢れる恥ずかしい表情でした。

黒ずくめの服装を整え、灰色のホコリをアクリセントに添えた髪の毛を手櫛で整え、メガネを直すと、堰を切つたかのようになに大聲で叫び出します。

「——ちくしょうめえええ！」やつと解放されたと思つたのに！ 急に変なこと頼みやがつてあん口リババア！ ロリバツバア！」

そして憎しみを込めクローゼットの中に水晶を

放り投げると乱暴に扉を閉めます。家具は大事に扱いましょう。

肩で息をする魔女はその様子を気まぐ見つめるロイドに気が付き、落ち着きを取り戻したのか椅子へと座り直します。

「はあ……はあ……ま、まあ頼まれた以上は仕方がないわ。試験までの間ちゃんと面倒見てあげるから……えつと」

「あ、ロイドです。ロイド・ベラドンナです」

「オッケー、ロイド。あたしはマリーヨ『イーストサイドの魔女』なんて言われているわ」

「あ、あのなんかすみません。急にこんなことに

なつてしまつて、自分にできることならなんでも
しますから」

その眉根^{まゆね}の寄つた困り顔に毒気が抜かれたマリ
ーは優しい口調になります。

「ま、別にそんなに畏^{かしこ}まらなくてもいいわよ。と
りあえず奥の部屋貸してあげるから荷物置いてき
なさいな。泊まり客が来ると思つてなかつたから
汚いし、もう遅いから今から片付けないと寝る時
間ないわよ。テキトーに隅^{すみ}っこに寄せただけでも
いいから」

そう言つてマリーは奥の部屋を指さしました。

「あ、ハイ！」

ナップザックを抱えるとロイドはそそくさと部屋に向かいます。途中くるりとマリーのほうを向いて柔和な笑みを浮かべながら「これからよろしくお願ひします」と律儀に一礼して部屋へと向かいました。

一方、急に同年代の同居人が増えたマリーはその後姿を見て、

「コンロンの村の……あの口リババアの関係者だけど素直でいい奴ね……意外だわ」

そう漏らすとすっかり冷たくなったコーヒーベードをすすり直します。

「ま、あのバカ師匠が頭のネジ二つか三つぶつ飛んでいるんでしょうけど」

そして「どこまで読んだつけかなー」としおりを挟まず閉じた本をめくつていると。

「ああそうそう、いくらかわいくていい子でも手なんかしたらお主を一生力エルにでもするからそのつもりでの」

クローゼットから映像ではない本物のアルカがひょっこり現れたのです。

「フンブ！」

盛大に噴出された褐色かつしよくの液体で本はどこまで読んだどころか何が書いてあるのかすらわかりにく

くなつてしましました。

「どーしてクローゼットからあんたが出てくる！」

鼻から黒い液をだだ漏れさせたマリーはアル力に詰め寄ります。彼女は悪びれもしません。

「ん？ 決まつとるじゃろ。瞬間移動じゃよ、この水晶をゲートにして……」

「さも当然のように人外じんがいの技使わないでください

い！ ほんと相変わらずですね師匠、あといくらなんでも会つて数時間の男の子に手は出しません

て

「ん？ そ、うかえ？」

「当たり前です！ 私をなんだと思つているんで

すか！」

アルカはせせら笑います。

「どの口が抜かすか。この前なんか繁華街のホストクラブの前で入ろうかどうかうろうろして結局断念してたではないか。動きが童貞どうていそのものじやつたぞ」

「どーーちゃうわ！　しょ……つてあんたドコまで知つてんの？　つてか何？　監視されてたの？　ここバレてたの？」

「ま、踏みとどまつたのは褒めほめてやろう……自分の立場を忘れていなかつたようじゃの、だから預けるのさね。改めてよろしくの、マリーチゃん」

「……ハイヨロコンデー」

マリーは苦虫を噛んだかのような表情で返事をしました。いえ、苦虫を噛んだどころか噛み砕き歯茎にすり込んだくらいの苦渋の表情です。

言いたいことを言った後、モソモソとクローゼットの中に入ろうとするアルカは思い出したように背中で喋り出しました。

「あ、そうそう。お主、今日かなり口リババア連呼していくから罰として古代ルーン文字で小さな不幸が降りかかる呪い掛けといたぞ」

「何してんの！ 古代人の叡智を駆使してメチャクチヤくだらないことしないでください！」

そんなアルカに猛抗議しようと詰め寄った瞬間です。

ガツン！

「ふぐ！」

ティーブルの脚に足の小指をぶつけ、マリーは悶絶するのでした。アルカはその様を見て目の端に涙を浮かべるほどケタケタ笑うとクローゼットの中に消えていきました。

さて、心の折れたマリーはと、ティーブルに突っ伏してチクシヨウメチクシヨウメと恨み節を繰り返しそのまま寝てしまつたのでした。

豪快にテーブルの木目を顔半分に付けたマリーはトントンという規則正しい音に反応して目を覚まします。

古めかしい木枠の窓から注ぐ朝の日差しを鬱陶しく感じながら根気よく見つめたその先には、

「ルールルルルルルルルリラー」

昨夜、急に現れた軍人志願の少年ロイドが鼻歌を歌いながら台所に立っていました。慣れた手つきで青菜を刻んでは火にくべた鍋の中に放つてていきます。

「あー……あのまま寝ちゃったのか」

ミシミシと音を鳴らしながらゆっくりと起こし

た体からするつと毛布もうふがずり落ちます。マリーがあの少年ロイドがかけてくれたのだろうと察した時、その音に気がついたのか彼は柔和な笑みで声をかけてきました。

「あ、おはようございます……すいません。お台所お借りしていきます」

「はよざーす……あーいいのよいのよ、それよりも毛布ありがとね」

「本当はお部屋に運びたかつたんですけど女性の部屋に勝手に入るのはちょっと気が引けたので……」

マリーはその言葉を聞いて自分の女性らしから

ぬイーストサイドめいた寝室の惨状を思い出し、ホツと胸をなでおろします。

彼女は「紳士ね」とごまかすように口に出しながら亜麻色の髪を手櫛で直し、ロイドの手元を覗き込みます。彼はつまみ食いをしようとする子供をたしなめるよう声をかけました。

「ちよつと待つてくださいね、今パンケーキ焼きますから」

今度は平鍋を火にかけて油をひくと溶いた小麦で手際よくパンケーキを焼き上げます。小麦の香ばしい香りに食欲をそそられたマリーは寝起きとは思えないくらい機敏に皿とはちみつをテーブル

に並べました。

パンケーキともう一品、青菜のコンソメスープを添えた朝食にマリーは言葉を失いました。

「簡単なものしかできなくてすいません」

「……いえ」

朝起きたら朝食ができるといふ状況は独り身にとつて至高の喜びです。加えて昨夜、あの角と金棒がないだけで本質は地獄じごくの鬼おにと大差ない元師匠の横暴を受けた後です。さりげない気遣いとコンソメスープの香りが心に染み入りました。

「——これならずつといてくれてもいいくらいね」

「はい？」

「ああなんでもないわ……んじやゴチになりまーす」

そう言つてマリ一は豪快にパンケーキにかじりつきます。香ばしい香りのパンケーキにはちみつを浸すほどぶっかけでは口に頬張りリスのように頬を膨らませて、コンソメスープで流し込みました。

「最近缶詰しか食べてなかつ

たからこういうのサイコーね」

「え？ 缶詰ばつかですか」

「ええ。魔女だからね」

古来から伝わる魔女のイメージに喧嘩けんかを売るイーストサイドの魔女はパンケーキを三枚ペロリと

平らげた後優雅にコロヒーを淹れすすり始めました。

その満足げな顔を見て柔和な笑顔でロイドは後片付けを始めます。一方マリーアはその軍人志望らしからぬ自然ないいお嫁よめさんつぱりに思わず素直な疑問を口にしてしまったくらいでした。

「え？ ロイド君、本当に軍人志望なの？」

「あ、はい……すいません」

皿を洗いながら律儀にこちらを振り向くと、ロイドは小さく頭を下げます。

「あ、いやいや謝らなくていいいんだけれど」

そこでマリーアはこの少年がコンロンの村の人間

だということを思い出しました。「愚問ね」と彼女は失念していたことを自責した後、皿洗いをした。少年の背中に向けて試験について話し始めるのでした。

「アザミ王都士官学校一般募集試験は今月の中旬だからまだ先ね、試験内容は知つてる?」

「えつと武術試験と魔法に関する筆記試験、あと面接つてくらいしか」

「ええ、毎回ちよつとずつ変わるけど大体はそうね。一番大事なのは武術試験だから」

「あ、やつぱそうですか」

「そようそ、魔法は得手不得手あるしある程度知

識があればいいくらい。軍人の仕事は基本警備とか力仕事。結局は体力がなきゃね」

「うう」

「加えて最近は責任者のメルトファン大佐がかなり気合入つているらしく、色んな場所に募集をかけているそうね……明確な定員はないけど倍率は高いわよ」

そしてマリーは「今回は武勲ぶくんで名を馳せたりドカイン家の長男、噂うわさのベルト姫、悪名高い女傭兵あくみょうようへい……」と次々に口にしますが大陸最果ての村から来たロイドにはいざれもピシときません。

「はあ……詳しいんですね」

「魔女だから、つてわけでもないけど雑貨屋だからなんでも扱っているって感じよ。特にここイーストサイドじゃお金持つていない人間が多いから薬の対価として情報をもらつているわけ」

得意げになりコーエーをするマリーヌは対照的にロイドの顔は曇りっぱなしです。

「やっぱ体力とかメインですか……うう……自信ないなあ」

その言葉にマリーヌはコーエーカップに口を付けたままピクリと眉を動かします。そして怪訝な顔をロイドに向けるのでした。

「何言つてんの、あのアルカ師匠の村の人間でしょ。

むしろ面接とか一般常識が心配よ」

「いえ……あの僕、本当に体力に自信がなくて」
そう言いながらロイドは頬をポリポリかきなが
らうつむき加減になり続けます。

「ここ来るのに六日もかかりましたし」

マリーは何言つているんだこの子はと即座に思
いました。あの最果ての村から馬車や汽車を乗り
繋いで六日で王都に来た……そのことと体力に一
体何の関連性があるのだろうと。

（ハハハ、まさか徒步で六日とかそんなバカな話
）

笑いながらコーヒーをすするうとした瞬間、

「ありうるつつ!!」

褐色のコーヒーが容赦なく飛び散りました。それを拭ふきもせず、まさかとじう顔で念のためにマリーはロイドに問いただします。

「……汽車の話よね?」

「え? 走つてですけど? そうですよね……六日じゃ遅いほうですよね……うちのじいちゃんなら二日で十分って言つていましたし」

沈黙が部屋を支配します。

「いやいやいや! ロイド君! あなた強いわよ!

「あ……励ましてくれてありがとうございます

はげ

……根性だけはあるって言われていますけど、自分の体力のなさは自分が知っていますから……」

マリーは冗談言つてんじやないわよといつた顔で口イドを覗き込みますが、当の本人は変わらぬ純粹無垢な困り顔のままでした。情報も扱つている手前、マリーにはそれがウソかホントかを見抜く自信がありました。

（ウソはついていないみたい……つてことはマジ

か……）

人外魔境……コンロンの村から出てきた村一番の優男……かの村を基準にしたとあつては常識など雲散霧消してしまいます。

優男

やさおどこ

人外魔境

じんがいまきよう

の雲散霧消

うんさんむしょう

してしまいます。

確かめるように……いえ、悟^{さと}すようにマリーは質問を続けました。

「でもここに来る道中、モンスターとかに会わなかつたかしら？　あそこから来たら結構ヤバイモンスターもいるはずだけど？　あれ倒せたら相当な力の持ち主よ」

「いえ、運がよかつたのかモンスターには一度も出会いませんでした」

「……そう」

「でも動物には沢山出会いました。大きなイナゴとか火を噴^ふくトカゲとか」

「それモンスター！　しかもヤバイ奴！」

その言葉を聞いてロイドは冗談ですよねと笑いながら返します。

「アハハ。いくら僕でもモンスターと動物の区別くらいは付きますよ。モンスターつてアレですよね。『世界を我が物に』なんて言いながら第二第三形態とか色々変形する……」

なんかとんでもない背筋が凍こおる話を聞いてマリ一は脱力しその場にへタリ込むのでした。

（ちよつと！ なんでこんな奴を王都に送り込んできた口リババア！ とんでもない代物送つてきて！）

常識について、モンスターについて、説教でも

かましてやりたいところですがロイドは純粹無垢な好青年です。本当に弱いと思い込んでいたのかと思うと、責めるに責められずどうしたもんかとマリーは頭を抱えました。

「僕の特技と言つたら家事くらいです……あ、掃除は村一番つて言われていますね」

「ああ掃除ね……何？ 敵の始末とか？ 侵入者の死体の処理とか？」

「敵？ 処理？ いえ、普通の掃除ですけど」

その反応に「そう言われてみれば」とマリーは台所のほうに視線を向けます。思い起こせばそこもプチイーストサイドと名乗れるほど空き缶と空

き瓶^{びん}と調合薬のカスやらで埋め尽くされていたはずでした。

しかしながらといふことでしょ、ロイドの手によつて台所は陽の光をまばゆく反射させるほどの輝きを取り戻していました。

(気弱で家庭的な優しい少年……あの師匠が気にかけるのも無理ないわ、モロタイプじゃない)

タイプの件はひとまず置いて、マリーは素直に「すごいわね」と口にします。その言葉を聞きロイドは「そんなことないですよ」と謙遜^{けんそん}はしますが満更^{まんざら}でもない御様子です。自信に満ちた表情全開でした。

「えへへ。実はこれ、コツがあるんですよ」

「なになに？ 家庭の知恵つてやつ？」

「多分そんな感じですよ」

マリィは是非ともご教授願いたいとロイドのそばに立ち彼の手元を眺めます。そしてロイドは実演販売のように颯爽^{さつそう}と雑巾^{ぞうきん}を取り出しました。

「この雑巾でですね」

「うんうん」

「古代ルーン文字で一筆したためてから拭くとさつと汚れが落ちるんです」

「そんな家庭の知恵あるか！」

まさか古代の叡智を家庭の知恵扱いするとはと

思い、「マリーは盛大に声を荒げました。それに驚いたロイドはいつもの自信なさげな顔に逆戻りです。

「だ、ダメですか」

「ダメじやないけどダメでしょ！」

言い放った後、マリーは壁に頭を打ち据え始めたのでした。

（しかもさーそれさー『解呪』のルーン文字じやない……あたしはそれを習得するためには何年もあのアルカ師匠の下で頑張^{がんば}つて使えるようになつたつていうのに！）

大工仕事をしているかのように壁にゴンゴン頭

を打ち据えているマリーにロイドは無意識に迫り打ちをかけます。

「なんか知らないんですけど、なんかの副作用でなんか汚れもホコリも一緒に落ちるみたいで」

「なんかつて！　あたしの努力をなんかつて！」

混乱しきりのマリーは涙を浮かべ壁にもたれかかりました。もしこの時ロイドが約三か月でこの古代ルーン文字を習得したと聞かされていたら、きっと頭を打ち据えまくつて壁には人間大の穴ができるあがつていたでしょう。

で、ロイドはその様子をどうしたらいいのかと眺め、謝るばかりです。

「ごめんなさい……大したことないですよね……あとは雨を降らせる魔法ぐらいしか……」

壁に人間大の穴が空きました。

「やつぱあの村の人間ね……常識つてなんだつ
け……」

ロイドが魔女の雑貨屋に居候いそごうすることになつてから早数日が経ちました。

雑貨屋……とは言つても商品が並んでいるわけでもなく、お客様は近所の顔なじみがお喋りしたりするついでに薬をもらつていく、なんて場合がほとんどです。

というわけでお店は基本的に開店休業です。マリー一人でまわるのでロイドは専ら掃除や洗濯といた家事や買い物などに従事していました。王都でもいいお嫁さんつぶりですね。

さて、ロイドが買い物に出かけたある日のことです。マリーの店に近所の大工の棟梁とうりょうが来ていました。

「うつし終わつたぞマリーちゃん」

彼はシワだらけの細腕から繰り出される熟練の槌捌つちさばきで、壁に空いた穴の修理をあつという間に終え、道具を片付け始めているところでした。マリーは笑顔で労います。

「ありがとね棟梁」

「いいつてことよ、マリーちゃんにや女房の薬を
何度かタダでもらつてつからな。こんぐらいサ一
ビスだ。しかし一体なんでこんな穴空いたんだ?
何かぶつけたか?」

「アハハ⋮⋮そんなことよりお茶淹れたから少し
休んでいつてよ。もう年なんだから」

棟梁は「すまねえな」と椅子に腰かけると、一
氣にお茶を飲み干しました。

「うめえ! 久しぶりだなお茶。最近は茶ちゃつ葉ばも高くな
つちまつたからな白湯さゆばつかりでよ」

「そうよね、値上がりする前にたくさん買い置き

しててラツキーだつたわ。でも一体どうしちゃつたのかしら？」

嗜好品や食品などの物価が最近じわじわ上がりつてきていることにマリーは小首をかしげます。

その傍らでお茶を飲み干した棟梁は口の滑りがよくなつたのか色々と話しました。

「いやー聞いた話によるとな、商人がよく通る西の街道が落盤事故とかあつて封鎖されちまつたようなんだ」

棟梁が言うには何日か前に商業用の街道が崖崩れで通るのが困難になつていてるそです。

「あの道封鎖されたら馬車は遠回りすることにな

るわね」

「それだけじやねーんだ。中央の街道に迂回して
もよ、そつちじや最近はイナゴみてーなモンスター
ーが活発で、商売になんねーみたいだ。だから今
は街じやジオウ帝国の産物が多く出回つてるそう
だ」

「だからか……そりゃ割高にもなるわね」

近年、仲のよろしくないこの国の北に位置する
ジオウ帝国からの輸入品です。足元を見られて高
く売りつけられても仕方のないことでしょう。

「なんだからよ、街の人間はジオウ帝国が街道を爆
破したんじゃないかと噂してゐるな。もしかしたら

モンスターも連中が仕向けてるんじゃないかつて
……この前なんか町中にもでつけえイナゴが出た
んだ。数年前じや考えられねえ、お国の警備は何
やつてんだつて話だ」「

「……ホントお国考えることはわからないわね」
まるで実感のこもったかのようマリーは相槌あいづちを打つとお茶に口をつけます。

「つてなわけでアザミの商人の間じや戦争を望ん
でいる奴が増えてきているそうだ……戦争したが
つてる王様の後押しになりそうだな……いやだね
え戦争なんざ」

弁士のように喋り倒す棟梁の前で、マリーはこ

しゃべ

の偶然にしてはできすぎている一連の流れに疑問を抱いている御様子です。

（落盤事故とモンスターに戦争……本当にジオウ帝国の仕業なのかしら？）

王家への不満は止まりません。

「つたく王家は口クなことしやがらねー、イーストサイドの治安ほつぽつてるしよ。中央区の王様の銅像知つてつか？　あの実物の小太りとは別人みてーなモデル体型の奴、あんなの作る暇あつたら警備に金回せつてんだ」

「それは同意ね、まるで別人のもの」

「加えて王女様は数年前から行方不明。どうなるんだかこの国は……つてマリーちゃんに愚痴言つてもしようがねえな、ハハハ」

そして棟梁が「また何かあつたら呼べよ」と手を振つて店を出ていこうとしたその時です。古めかしい扉が軽快に開くと純朴そうな少年——ロイドが荷物を抱えて帰つてきました。

「ただいま戻りました！　あれ？　大工さんじやないですか？　どうしたんですか？」

大きめのズタ袋を床に下ろすと、これまた律儀に手を前にしてお辞儀します。

「お、少年。いや何、マリーちゃんに頼まれて壁

を修理してたんだよ、タダでな」

「た、タダですか？　いいんですか？」

驚くロイドに対し棟梁が得意げに手のひらで鼻を擦り上げます。

「へつ、こんな修理、朝飯前のこんこんちきよ！
あとなんつつてもマリーちゃんにや世話になつてつからよ。俺らみてえな貧乏人に薬分けてくれるんだ。まさに救いの神！」イーストサイドの救世主よ！　マリーちゃんの英雄譚はいつか大陸中を駆け抜けるぜ！」

「救世主……やっぱマリーさんはいい人なんですね」

壯大なスケールで褒めちぎられたマリーは顔を真っ赤にして声を荒らげます。

「ちよ！ 棟梁！ 私は大したことしてないっての！ 代わりに情報とかもらっているしギブアンドテイクじゃない！ 救世主でもなければ大陸中を駆け抜けません！」

その反応を見て陽気に笑いながら棟梁は店を後にします。なんとも小こつ恥はずかしい状況を誤魔化すようにマリーは咳払いをします。

「コホン！ もう……で、ロイド君、ちゃんとお買い物できたのかしら？」

まるで姉のような口ぶりでマリーは尋ねます。

それもそのはずです。彼女はコシロン村という異端中の異端な所からやつてきたロイドに少しづつ常識に慣れてもうために買い出しをさせていたのです。

(ま、物損事故くらいうら許容範囲ね。人身事故が起こつたら口リババア呼びつけて回復魔法でもさせようかしら……たしか死人以外なら完全に回復できるとか言つていたものね……今思い出してもドン引きだわ死人以外つて)

彼女をよそに、ロイドは実に爽やかな笑顔で買
い物の成果を見せます。

「あ、はい。えつとスリコギに乳鉢と小麦粉……あ、

あと、えへへ、お土産です！」

「お土産？」

彼が床に置いた先程からやたら目を引くズタ袋の口を広げると、そこには大量の茶葉が詰め込まれていました……。色艶のいいひと目で高級品とかる格調高い香りのする代物でした。

お土産というには余りにも大きすぎる……。加えて値上がりつたどつい先刻話題に上がつたお茶を^{いぶか}しげに眺めた後、マリーリーはロイドに問います。

「…………なんぞこれ」

「あ、西の山を越えた所の農家の方からもらつたお茶つ葉です。お礼だつて」

(あれ？　西つて今崖崩れで大変なんじゃ……)

マリーの頭にはまずなんのお礼かより、そんな渦中の農家の人が気前よく渡すはずがないと考えます。詐欺か何か……疑心に溢れた顔でマリーは問います。

「ほんとに西の農家の人がこのアザミ王国に来ていたのか？」

マリーの質問にきよとんとしながらロイドは答えます。

「え？　来ていませんよ」

「はい？」

なんとも繋がらない会話にロイドはあつけらかんとした

まま、とんでもないことを口走ります。

「ですから西の農家の人がからもらつたんですね。山二つほど越えた村に買い物に行つてですね。小麦を安く買うために。その途中で——」

「…………やまふたつ？　え？　そんな遠くにいったの？」

「え？　やだなあ歩いて行ける距離じゃないですか、それに買い出しつて普通そのくらいの距離の村に行きますよね」

ガニッ！　と、マリーはせつかく直した壁に頭を打ち据えます。奇しくも棟梁が頑丈に作つてくれたので傷一つ付きませんでした。付いたのはマ

リ」のおでこのほうです。

「匠たくみ」の技が光る一方、頭を打つて涙目の光るマリーは悶々もんもんと頭の中でツツ「ミニを展開します。（確かに国内で買えなんてひと言も言つてないけど！）

一ちなみに、コンロンの村では買い出しというのは山三つか四つ越えた先の村で物資を購入するのがあたりまえでした。一般人なら何日もかかる行程を伴の村人らは小一時間で済ませてしまします。

さて「買い物出しどはなんぞや」という哲学じみたことで頭を痛めるマリーにロイドはさらに追い

打ちをかけます。

「いやーなんかその途中道路が混んでいまして。どうやら崖崩れのせいでお道が塞がつていたみたいで、とりあえず岩を全部取り除いて端に寄せておいたんですけど……そしたら業者の人が『神様じゃあ』なんて言つてお礼につて摘みたてのお茶つ葉をもらつたんです。小麦粉もほとんどタダで購入しましたし……神様なんて大げさですよね」

「……ウンマアネ」

「端に寄せるだけで僕なんか一時間もかかっちゃいましたし……村長だつたら修復魔法で一瞬で戻せますし……都会の人つてお世辞上手ですね」

マリ一は頭を押さえながら、とりあえず「次は国内でお買い物してね」と伝えようとします。

「ロイド君……色々言いたいことがあるんだけど、まず――」

それを勘違いしたのかロイドは慌てて頭を下げるのです。

「ご、ゴメンナサイ！ 余つたお金お小遣いにしていいって言われたからって、ちょっともらいますよね……」

「あの、言いたいことはもうじゃなくて

「本当は返金しなきゃいけないんでしょうけど……その浮かせたお金使っちゃったんです……コ

レなんですが」

申し訳なさそうにロイドは懐から細工の施された雅なブローチを出しました。琥珀色のベツ甲でその周りに銀の装飾がふんだんに使われておりひと目で高価とわかる代物でした。

「どしたのコレ？」

「あ、プレゼントです」

「誰への？」

「マリーサンへのです」

しばし沈黙しマジマジとブローチを眺めた後マリーはもう一度問います。

「誰への？」

「だからマリーさんです。タダで泊めてもらつて
いますし、正直家事だけじゃこの恩は返せないと
思いまして」

他意のない、やんわりとした表情でブローチを
差し出す彼に対し、照れながらマリーはそれをぶ
つきらぼうに「アリガト」と言つて受け取りました。
(……やつぱ早急に常識を知つてもうわないとね、
国外に買い出しもそうだけど……あんまり他意な
く女の子にこんなプレゼントしちゃダメつてこと
とか)

内心すごく喜んでいる自分に辟易へきえきしながら、マ
リーはいそいそとブローチを胸元に付け、鏡を見

やります。改めて見てても値の張るであろう代物です。
「……コレ、結構なモノよね、イミテーションじ
やないでしょ？」

「ああそれはですね、道中運河の水量が減つて大
きな船が使えないと嘆いていた貿易商の人人がいた
んです。その人のために雨を降らせたらかなり喜
んでいまして『是非ウチの最高品質の物をもらつ
てくれ』なんて言われちゃいまして……タダは気
が引けるので浮かせたお金全部で購入したんですね
(お使いしただけでこの国のインフラ問題を開
いた!)

買い出しそるだけでこの国の経済状態を回復す

るロイドにマリーは頭を振りながら「これだからコンロンの村人はツ！」とへタリ込むのでした。

そしてロイドの買い出しが国だけでなく一人の女の子の運命も救うことになるのでした。

その女の子、地方貴族のセレン・ヘムアエンと
いう少女は今、王都の安宿で試験当日まで過ごしていました。イーストサイド寄りのその宿は簡易宿舎のような作りになつていて客層も仮眠するだけの行商人などが大半です。

長期滞在には欠片かけらも向かない所ですが事情のある彼女には干渉が少ないほうが好都合でした。ボ

ロイ部屋もその心配がないだけでお釣りの出るくらい居心地のいい空間でした。

ただ問題が一点、素泊まりなので食事が出ないという点を除けば……大抵こういう宿屋には共同の台所があり食材を持ち合わせ作ることが可能です。

しかし彼女は料理をしたことがありませんでした。加えて道中、干し飯など湯戻しすらせらず水と一緒に胃に流し込むような食生活を送ってきたため腹の虫は限界に達していったのです。

そして彼女はフードをまいつぱい目深にかぶると腹の虫にせつつかれながら重い足取りで市場へ

と向かうのでした。

サウスサイドの蜃下がり、冒険者や行商人、観光客が行き交い買い物をする光景、その喧騒けんそうと活気に入られた市場にセレンは圧倒されました。どこを見ても人、人、人でめまいすら覚えるほどでした。

「これなら夜に来ればよかつたですわね」

軽い後悔をするも腹の虫は「そんなもん知つたこつちやない」とうなり続けます。そこそこ大きなお腹の音も喧騒と雜踏に消えていくのでした。

セレンはお腹に手を当てながら目ぼしい露店を探し出します。が、膨大な店の数に目移りしながら

ら人波に流され思うようを選べません。

「……ハア……ハア」

何もしていななのに旅路より疲れたセレンは肩で息をし始めます。そんな折、後ろのほうから香味油のいい香りが漂つきました。

振り返るとそこにはカリッと揚げられた鳥肉の揚げ物が売っていました。他にも山菜や小ぶりの川魚が露店の大皿に盛られていて、道行く人はその香りに誘われて紙に包まれた揚げ物を購入しては塩を振りその場でかぶりついていました。

何日も温かい食事にありつけなかつたセレンは生唾なまつばを飲み込みます。

ここで普通の人なら何の考えもなしに露店に足を運ぶのでしようがセレンは買い食いは疎か買いた物すら満足にしたことがありません。十分な所持金を持っているのですが色々と不安になつて財布の中身を確認したりします。

「……もう」

そして他人の購入する仕草をフードの隙間から何度も確認し、頭の中でシミュレーションし始めるのです。初めておしゃれな美容院に入る前の举动不信感に似ていますね。

しばらくしてお客様の流れも途切れ、余裕をもつて購入できる絶好の機会と一歩踏み出した矢

先でした。

「すいません。少々よろしいでしょうか」
肩に手を置かれセレンは声のするほうに振り向きました。

そこには深緑の制服にアザミ王国の紋章を縫い付けた軍人が二人、硬い笑顔で会釈します。

逡巡するセレンに軍人は事務的に話しかけます。

「失礼ですが身分証など拝見させてもらつてもよろしいでしょうか……最近、建国祭が近づいてきたせいか不審な輩^{やがら}が増えてしまして……他国の工作員だの街にモンスターを手引きしている輩もいるとかで……」

つらつらと語り出す軍人にセレンは察しました。

「……私を不逞の輩と？」

確かにこんな青葉香る暖かい春先にフレードを
目深にかぶつた人間が挙動不審にしているのです
から、自覚のあるセレンはため息をつきました。

しびれを切らせたのか、事務的な軍人の後ろに
いるもう片方が、やや強めな口調でセレンに問い
詰めます。

「そんなあからさまな格好して疑うなと言ふほう
が無理がある、後ろめたいことがなければ先ずは
フレードを取つてもらおうか」

軍人がフレードに手をかけようとした時、セレン

はその手を振り払うとフードの隙間から顔を覗かせ睨み付けます。

彼女の顔面に巻かれていたのは血のようなシミの付いた禍々しい革のベルトでした。

乱雑に巻き付けた顔の隙間から落ちくぼんだけで睨まれ、軍人は震えた声を漏らします。

「……ベ、ベルト姫」

「中部地方の？」軍人志願してきたのは本当だったのか……

幽靈か何かを見た時のような聲音、セレンはそれが不快でたまりませんでした。ギリッと歯をきしませさらに強い嫌悪を乗せた視線を注ぎます。

その視線にさらに動搖する軍人に今度は周囲が何事かと騒めき始めました。『ベルト姫』の単語も聞きつけたのでしようか、好奇の視線がフード越しにも感じられます。

「……」

いたたまれなくなつたセレンはその場から立ち去ります。軍人の制止も聞かず、人通りのないほうへと。

後ろめたい人間そのままの行動に対し忌々しげに独り言ちます。

「……何も悪いことはしていませんのに……まるで悪党ですわね……」

——『呪われたベルト姫』と人々は彼女のことを口にします。

もちろんセレンのことです。彼女の生まれば大陸中央の豪商で俗に言う貴族でした。

青々とした肥沃な大地と起伏の小さい緩やかな地形、さらには大陸一の運河に面したその地方は大きな戦争が終わり、各國で交易が盛んになると瞬く間に栄え、この大陸の通商の要となるのにまさほど時間はかかりませんでした。

そんな物流の盛んな地に珍しい物は集まるもので、彼女の父親は交渉の材料に、自己顕示欲のためにと東西のあらゆる珍品を収集するのが趣味で

した。

その趣味が娘——セレンの人生を大きく狂わせる
こととなります。

セレンが四歳のころ、父の宝物庫で戯れに『呪
いのベルト』と呼ばれる太古の装飾品を手にして
しまつたのが悲劇でした。

宝物庫の石扉が開いているのを見て、家の者が
駆け付けた頃には顔中をベルトでがんじがらめに
巻き付けたセレンが部屋の中央で泣いていたそう
です。

父親はあらゆる手段を用いベルトを外そうとし
ました。しかし一向に外れません。

高名な僧侶、東洋の商人、王都一の学者……誰も彼もさじを投げました。

そして月日が経つにつれ、初めは同情の眼で見ていた周りの人間もいつしか忌むべきものを見るような眼へと変わつていったのです。

大きくなつても外れない血のような赤いシミのある革のベルト、片目が塞がつているため目つきも次第に悪くなり髪の毛もとても綺麗なブロンズベルトの隙間から伸びてきます。

いつしか彼女自身も周囲の目に耐え切れなくなり、部屋にこもるようになりました。

そして彼女は高名な僧侶の言つていた「呪いに打ち勝てる相応の力を持てばいつしか呪いを解くことはできる」、その言葉にすがるように日々鍛錬^{たんれん}をはじめたのです。

来る日も来る日も部屋の中で汗水たらして体を鍛え、運ばれてくる食事を食らつてはまた鍛錬、髪が伸びたらハサミでちぎり容姿も気にかけずひたすら鍛錬——気が付けば彼女の体は並の戦士では太刀打ちできないものへと変わりました。

色白で透き通った肌に似合わぬ鍛え抜かれた体つき、ベルトのせいでミイラのような頭部、すべてを恨んだような暗い目つき……

その姿を見ていつしか世間は畏怖^{いふ}を込め『呪わ
れたベルト姫』と口にするようになるのです。

彼女は十五歳を迎えるも一向に外れぬベルトに
辟易した頃王都から軍人募集の打診を受けそれを
了承し、今に至るのでした――

好奇の視線にいたたまれなくなつた彼女は隙を
見て一目散に逃げ出します。

「ま、待て！」

呪いを解くために鍛え上げた体はしなやかな猫
のよう裏路地を駆け上がります。そしていくつ
もの細い路地を通り別の開けた通りにたどり着き
ました。

もう一度フードを目深にかぶり直すと、セレンは今度は両手でお腹を押さえます。

「また体力を使つてしましましたわ……流石に……何か食事を……」

先ほどの鳥肉が頭をよぎつてしまいすっかり口の中が揚げ物になつてしまつたセレンは似たような露店を求めまた練り歩き始めました。

そしてようやく串揚げの露店を発見したセレン、しかしやはり勝手がわからないので念のためにはい物客を物陰から観察します。今度は軍人に気取られないよう、距離を取り、数十メートル先の柱の陰で完全に息を潜めて。

さすが

しばらくしてテント地のズボンに麻のシャツと
いった少年がその串揚げ店の前に現れました。

「揚げたでもらっていいですか？ 何かお勧めあ
つたら教えてください」

「あいよ！ 今日はいい鳥の胸肉を使っているか
らよお！ ささみ揚げがいいぞ！」

「あ、じゃあそれ一本……あ、いえ……一本で」

「食うねえ兄ちゃん！ ちよつと待つてな、すぐ
揚げるからよ！」

店主は手際よく揚げた鳥の串揚げに荒めの塩を
振つて差し出します。少年はにこやかにお金を払
うとそれを両手に持ちました。

その様子を見てセレンは独り言ちます。

「買い方は先ほどのお店と変わりませんのね。いえ、私が少し気にしてすぎーツ！」

「あ、コレいります？」

自分の無知さに嘆息するセレンの前にいつの間にか先ほどの少年が立つていました。

いきなり声をかけられて彼女は身をこわばらせます。それを気にしたのか少年はやわらかい口調で話し出しました。

「ああ急にすみません。お店で買い物している時ずっと見ていましたよね？ それでもしかして欲しいのかな？ なんて」

「……気付かれていた？　気配を消していたのに」
セレンは訝し気な聲音です。それもそうでしょう、念入りに距離を取り気配を消し物陰に潜んでいたというのに……アザミ王国までの道中何度かモンスターをやり過ごした経験もあつて気配を消すことにには自信がありました。

加えて、警戒していく自分に気取られることがなく眼前まで距離を詰められたのですから……そんな「何者？」と逡巡する彼女に対し、のほほんと少年は言葉を続けます。

「あはは、ご冗談を。木こりじやあるまいし気配を消す必要なんて」

(木こりが気配を消す必要性はないと思うのだけ
ど……)

そう思うのも無理はありません。なんせ木こり
という名の上級狩人かりうどの類たぐいですし。

頓珍漢とんちんかんな物言いにフレードの下で眉根を寄せるセ
レンです。その戸惑いを感じたのか少年は少し申
し訳なさそうな顔をしました。

「あ、もしかして僕、変に気を使つちゃいました?
だとしたらゴメンナサ……」

ぐぎゅう!

少年が言い終わる前に、セレンの腹の虫が雄おた
けびを上げました。

「……つ！　こ、これはその……」

弁明するセレンに少年は無言でにこやかに串揚げを差し出します。

食欲をそそる衣と肉汁の香り。ほどよく振られた絶妙な塩加減。空腹。あらが抗うすべなし。

顔を伏せながらセレンはその串揚げを手に取つたのでした。

「わかります。僕も初めての買い物の時は無作法がないかと色々気にしてました。田舎じや物々交換が基本ですしちゃでも都会だから気負わなく普通にしていればいいそうですよ。受け売りです

けど

「そ、 そうですの？ 私普通に自信がなくて……」

「少なくともドワーフ集落の職人たちのよう
に少しでも気に障つたら斧^{おの}が飛んでくるようなこ
とはないみたいです」

串揚げを頬張りながら少年は自身の体験談を語
り始めます。

(ドワーフなんておとぎ話の種族のことと言つた
り、木こりが気配を消すのがうまいとか言つたり、
きっと冗談で私の緊張をほぐそうとしてくれてい
ますのね)

実際は冗談でも何もなく、彼は自身の経験をよ

かれと思つて話していました。背の低いドワーフには目線を合わせて交渉することが誠意だとカエルフには鉄を使つた装備は極力身に付けないほうが多いとか……そんな親切心のこもつたレクチヤーは無駄知識どころか都市伝説に近い内容です。今で言うなら「口裂け女に出会つたら飴あめを投げつけると舐めだすからその隙に逃げろ」みたいな会話内容です。

セレンは最初こそ訝し気に聞いていましたが端々から感じる少年の使いに次第に心を許していきました。ぺろりと串揚げを平らげた後、恥ずかしげに彼女は少年にお礼を言います。

「その、すみません……私ほんとんど買い物したことがなくて……助かりました」

懐から財布を取り出していくらか出そうとする

セレンに少年はにこやかに断ります。

「いえいえ大丈夫ですよ」

「そんなわけには」

「むしろあなたの買い物の練習を邪魔しちゃつたみたいですし……そうだ！ だつたらそのお金使つてあのお店で串揚げ買ってくださいよ」

「え、あ、練習ではなくて……」

「不安なのはわかります。だから自信もって。ち
ゃんと後ろで見ててあげますから」

なし崩し的に買い物の練習を促されたセレン。しかし不思議と悪い気はしませんでした。

（後ろで見ててくださる……ね）

こんな風に自然な感じで話しかけてもらつたのも久しぶりです。むずがゆい気持ちのまま、コクンと首を縦に振ると小走りで先ほどの店に向かいました。

（お返しに何本か多めに買いましょう……いえ別のお店でもつと違う物のほうが……）

色々想像を張り巡らせるセレン。

しかしその視線の先に先刻の軍人が辺りを見回しながら人波を搔き分けっていました。

きっと自分を探しているのだろう、セレンはすぐさま感づくと眼光鋭く逃げ道を模索します。

その時、ふと後ろにいる少年が目に入ります。彼はやんわりとした物腰で優しくセレンを見守つています。

(……もしここで私の醜いベルトまみれの顔のこと……あの少年に知られてしまつたら)

あの柔和な笑みが嫌悪感に塗り替えられる想像にセレンは耐え切れませんでした。

「……いたぞ！」

その逡巡で隙が生じたのか、軍人に見つかってしまうします。

「マズいですわね」

あの少年と別れるのは辛^{つら}い、でも自分のことがバレてしまふのはもつと辛い、そう思つたセレンは少年のほうを名残惜しげに一瞥^{いちべつ}すると全力で逃げ出しました。

待て！ という制止も瞬く間に後ろへ消えていくほど一目散^{いちもくさん}に、全力で、後ろ髪を引かれる思いを振り切るようには、彼女は細路地へ駆け込みます。

一步一步を大きくスライドさせて跳躍するように路地へまた路地へ身を潜めるようには、セレンは逃げ出します。自分自身の呪いに対する後ろめたさを暗示しているかのように入り組ん

だ場所へと彼女は迷い込みました。

「……ツ、ハア……ハア……逃げ出せたのはいいですが……どう帰ろうかしら……」

土地勘などなく、もはやイーストサイドなのか
サウスサイドなのかもわかりません。

建物の隙間、風化したゴミの類や雑草の生え方
から察するにおそらくイーストサイド、そう考えたセレンがどう帰ろうかと考えていた矢先でした。

その隙間に真新しい何か生臭いものがあります。
おそらく誰かが放置した生ゴミか何かだろう、口
元を押さえ立ち去ろうとした時その生ゴミに突然
何かが覆いかぶさりました。

極彩色の薄羽をはためかせ嬉しそうにイナゴが顎でその生ゴミの塊をむさぼっています。それだけでも嫌な光景なのですがなによりおぞましいのはそのイナゴの巨軀でした。

成人男性の身長ほどある高さ、全長はおそらく四メートルにも及ぶでしょう。そんなイナゴが建物の隙間から這い出してきたのです。

生ゴミの正体はおそらく野犬か何か、無残に食いちぎられたその肉片はからうじて動物の皮だけがわかるくらいでした。

そのイナゴはセレンを見たとたん、建物の壁を削りながらこちらへと身をよじらせ這い出してき

ます。一瞬思考の制止した彼女は距離を取ること
ができませんでした。

「虫？ いえ？ モンスター？」

先ほどの軍人が口走つていたことを思い返します。
すぐさま腰元のレイピアを取り鞘さやから抜こうとします。

「ギイイ！」

威嚇音と共に距離を詰めるイナゴは刀身をすべて抜く前にセレンに肉薄してきました。
万事休す、セレンの脳裏に諦めがよぎった次の瞬間でした。

細路地の上空から何かが飛来します。

覆いかぶさった影にイナゴは気を取られます。

そして。

「よいしょ」

ぐしゃりとその硬い体をひしゃげさせイナゴは
明後日^{あさつて}の方向に顎^{あご}を向けました。力なくその顎^{あご}を
所在なげにギイギイとうごめかします。

上から降ってきたー先刻の柔軟な笑みが印象的
な少年は、はみ出した極彩色の薄羽^{つば}を摑^{つか}んでゴミ
を隅に寄せるよう無造作に放り投げました。

ズズンー

虫と思えない重量感のある音を細路地に響かせ、
イナゴは足を折り曲げ息絶えました。

セレンからしてみたら目を疑うような光景でした。細い路地で動きにくい状況での得体の知れないモンスターと戦う……危機的状況に死すら頭によぎつていたのですから。

そんな覚悟をあざ笑うが如く、モンスターを軽々と踏み付け吹き飛ばす少年、開いた口が塞がらないまま少年の背中をただただ眺め、地面にへたり込みました。

「大丈夫ですか？　お怪け我は？」

少年はまるで何事もなかつたかのようにそう言いながら、柔和な笑みで手を差し伸べます。

「え、ええ」

伸ばした少年の手を取つたセレンは、その鍛え上げた戦士とは程遠い自然な筋肉付き、日々の生活で培つたであろう自然な筋肉……とてもあのモンスターを倒したと思えないと驚きを隠せませんでした。

その少年はその自然な体つき、物腰、表情、すべてに裏のない雰囲気を纏いセレンの身を案じているのです。

「あり、がと、ございます」

「ちよつと初めての買い物でパニックになつちゃつて逃げちゃつたんですね？　心配しないでください、斧なんて投げてきませんから」

そう言うと少年は彼女の肩をポンポンと叩き「丈夫ですよ」と声をかけ服に付いた泥を払い始めました。

動搖し、されるがままになつていたセレン。そのため不覚にも彼の手がフードを外すのを止めることができませんでした。

「あ、ああ！」

現れたのは件くだんのがんじがらめの顔です。慌てて彼女はフードを被り直し縮こまるよう下を向きます。

(……また不気味がられる)

「あの……」

しかしロイドは不気味がるどころかそのままもう一度フードを外すと変わらぬ笑みのまま赤子をあやすように優しく頬ほおを拭き出します。

「顔にも泥、付いていますよ」

セレンはこの顔を見てまだ変わらぬ笑みを浮かべたままのロイドに呆ほうけてしまいます。

「うーん都會つてこんなファッショング流行はやつているのかな? ……よくわからないなあ」

みなさんも海外のファッショントリーン等を見てみてください、きっと同じ気持ちに浸れますよ。

さて少年がぼそりと口にした疑問もセレンの真つ赤になつた耳には入つてしまませんでした。

しばらくして呆けていたセレンが我に返ると今度は赤くなつたであろう顔を隠すためにフードをぎゅっと目深にかぶります。

そして上目遣いで少年を視線で追いました。彼は何かを思い出したようで少し慌てています。

「あ、帰つて夕飯の準備しなくちゃ！ すいません。急いで帰ります」

と言葉を残し去つて行こうとしました。セレンは慌てて名乗ります。

「あの！ 私はっ！ セレンといいます！」

「あ、ご丁寧^{ていねい}にどうも。僕ロイドといいます。それじや」

少年……ロイドはそう言い残すとフリー・ラン選手よろしく階段を駆け上がるようになに建物の壁を蹴り上がりながら姿を消してしまいました。

「……」

セレンは彼の去つた後、頬に触れた感触を確かめながらしばらく惚けていたのでした。

その日の夜、セレンは買い出し品を抱え、宿場へと向かつていました。

フードを目深にかぶつている彼女の纏う雰囲気は数時間前では考えられないくらいとても軽やかで、通りを歩く足取りもどことなくダンスのステ

ツブを思わせます。調子に乗つて買ひ込みすぎた商品も苦もなく持ち運んでいました。

それもそうでしょう、彼女の頭の中にはあの自然な笑みを携えたロイドのことがずっとリフレインされているのです。

（王都にいればきっといつか会えますわね……）

そう思うと彼女の顔はほころびます。ベルトで締め付けられたがんじがらめの顔はほころんでもただ軋み歪むだけの異様なものでした。そして、それすら見ても変わらぬ眼差しを向けてくれたロイドに思いを馳せてしまうのは無理からぬことです。今までなら一

「あん？」けつ、噂^{うわさ}は本当だつたみたいだな

……ベルト姫が軍人志願するつて話はよ」

そう、こんな風にまるでお化けでも見たかのようになにベルト姫と言われ続けたからです。彼女の和やかな雰囲気が一転して抜き差しならぬ剣呑^{けんのん}な雰囲気へと変わります。

大きく見開いた片目でセレンは声の主を探ります。その先には腰に戦斧^{せんぶ}を携えた二メートルに届かんとする筋骨隆々^{きんこつりゆうりゆう}の男が彼女を見下しています。

その体^{たい}躯^{いく}と荒つぽい言動に反して身なりはとても整つていて上流階級の雰囲気を漂わせています。

セレンはその身なりと装飾品から記憶をたどります。

（リドカイン家……地方の貴族……武勲^{ぶくん}で名を馳せたところね）

それだけ確認するとセレンは面倒事はゴメンと興味をなくしたそぶりを見せ歩み出します。

「オイ、無視してんじゃねーぞ。てめえがどんだけ地方貴族の評判下げていると思つてんだ」

（そんな話聞き飽きたわ）

自身の怪談^{かいだん}めいた話が尾ひれを付けて広まつているのをセレンは知っていました。そしてそれが地方貴族全体のイメージ低下に繋がっていること

も。

「気味の悪い女だぜクソ！」

リドカイン家の男は悪態をつくと苛立ちを隠さず食堂の明かりの中へ消えて行きました。

そんな言葉もごまんと聞いたわ、とセレンは独り言ち、数秒後にはまたさつきの少年との出会いのシーンを思い出して悦^{えつ}に浸つていました。

宿につき、ベルトの隙間からツタのように伸びるブロンドを見ては驚く店員を気にも留めずセレンは部屋へと早々に引きこもります。

そして泥の付いたフードや軽装などを外しました眺めては思いを馳せます。

「あの方の払つてくれた服………」

いっそ思い出として洗わずにとつておこうかとも考えましたがせめて顔はこんなでも綺麗な身なりでと思い直し桶おけに水を張り衣類いりょうを浸します。

そんな彼女は、ふと鏡に映つた下着姿になつた自分を見て物思いにふけるのでした。

白い下着だけを纏まといつた白い肌……肌は白くとも

幼少期から不本意にいじめ続けた肉体は色白さに似合はずとても引き締まり、石膏像せつこうぞうを彷彿ぼうふつとさせます。加えてその体にまるでとつて付けたかのように据えられた、赤いシミの付いたベルトが巻かれた頭部。

大昔は見るのもつらかったこの姿ですが今ではもう何の感慨も湧きません。別人を見るよう眺めるだけです。

「ただ今日は違いました。少年、ロイドの一件で少し心境が変わり大きく見開いた片目を見ながら」「化粧でもしようかしらと」寂しく独り言ちていました。

「無駄かもしない」という葛藤かつとうが顔のベルトのようには彼女の胸を締め付けます。

「こんなベルトがなければ……」

ベルトを伝うようにゆっくりと涙がこぼれ落ちました。

今しがた生まれた淡い想いも、思い描いた未来も、この肌に吸い付いて離れないベルトのせいであわないのです。

久しく思い出すことのなかつた「悲しい」という感情……これが本当の恋だつたんだと気が付き、また涙を流します。

ひとしきり泣いた後、乾いた瞳でベルトを睨み付けたセレンは憤りをぶつけるようベルトを引き剥は付けた。皮膚が剥がれてもいい。

半ばヤケクソな衝動で外そと試みました。震えるほど指を喰い込みせ歯を軋ませながらベ

ルトに手をかけます。

しかし彼女の顔に巻き付けられたベルトは石の
ようにはく彼女の顔を締め付け続けるのです。

「いつもだったら、そうなるだけのはずでした。
するり、と、ベルトが解けます。

「え？」

セレンの口からは短いひと言が漏れるだけでし
た。

そして数分固まつていた彼女はまた思い出した
かのようにベルトを外し始めます。

何の抵抗も見せずするすると解けるベルト、そ
こから先はプレゼントの包装を剥がす子供のよう

に無む我夢中でベルトを引っ張がしていきます。

「う……そ」

すべてのベルトが外れ鏡に映る自分の顔。十数年ぶりに出会う自分の顔は赤の他人を見ている錯覚にとらわれます。

鏡の中にはブロンドの髪の毛を携えた美女といつても過言ではない顔立ちの少女が映っているではありませんか。確かめるように頬を手で触ると目の前の美少女もまた同じ仕草を見せました。

「私……なの？」

鏡に映る少女はセレンと同じ言葉で口を動かします。それを見た彼女の目から涙が溢れてきました。

「私だ」「

泣き崩れるセレン、思い浮かべるのはあの少年の顔と昔牧師に言われた言葉です。

『強き者の力でその呪いは解ける』

自然に少年が触ってくれた頬を指でなぞります。

「あの人だ」

自分の体を抱きながらもう一度つぶやきます。

「運命の人だ……」

第二章 たとえば羊の品評会に狼を出すような所業

そんなこんなで試験当日です。

アザミ王国のお膝ひざもと元、城下中央広場の国王の銅像は観光客に人気のスポットで連日その銅像を見に多くの人が訪れています……ただほんのちよつと王様の銅像はスリムかつイケメンに作られて揶揄ゆされるので現地の人には『王家の見み栄えの塊』なんて

そんないつも旅行客で賑わっている銅像の視線
の先には、あきらかに観光気分とは言い難い剣呑
な雰囲気の人で溢っていました。

いざれも腕に覚えのありそうな連中ですが、そ
の身なりには多少ばらつきがあり豪華ごうかな装飾や軽
装に身を包んでいる者もいれば使い古された胸当
てのみの野盗のような者と多種多様のごつた返し
です。

そのごつた煮な人の群れを城の一室から遠巻き
に二人の軍人が見ています。片方は若くは見える
がどこか老成したような落ち着いた雰囲気を漂わ
せる銀髪で頬ほおの切り傷が目に付く男の将校、もう

片方は打つて変わつて年齢の割に落ち着きのない少女のような茶髪の女性将校です。

女性将校はこの人だから見て珍しい動物を見た観光客のようにはしゃぎながら男のほうに声をかけます。軍服を着ていなかつたら観光に来た女子中等生と思われても仕方ないくらいです。

「いやー今年は例年にないくらい色んな奴でごつた返しとするなあメルトファン」

西方訛りの軽妙なしやべり口で話された男の将校、メルトファンは対照的に抑揚の少ない、何か報告書を読み上げているような事務的な語り口で言葉を返します。

「この国の平和の為だ、身分など二の次、実力なくしては何も始まらん。違うかコリン」コリンと呼ばれた女性将校は息つく間もなく答えます。

「まー違わんけどな、甘つたれた貴族様より一旗揚げてやろううつちゅう農民のほうが根性あるもんやし……おお！」

会話の途中で何かを見つけたのかコリンは「あれ見てみい」とメルトファンの肩をバシバシ叩きました。

「あれ地方貴族の武勲^{ぶくん}で名を馳せたりドカイン家^は

の長男、アラン・トイン・リドカインやないか？いくつもの大会を総なめにしたつちゅう」

その男アランはコリンだけでなくその周囲から
も一目を置かれているらしく「おいあれ……」な
んて声が波紋のよう広がつています。街で有名
人を目撃した時によく見る光景ですね。

マルトファンは抑揚のない声で言葉を返します。

「彼は非常に功名心の強い男でな、将校にすぐなれるなら軍に志願すると即決したよ」

「ほんま？なんかいかにも貴族つて感じやな

……実力は折り紙付きやけどなんかすかんわ」

「上昇志向も突き詰めれば強い意志だ。この国の

為になるなら何の問題もない」

あくまで事務的な態度を変えないマルトファンにコリンは大きさに首を振ります。

「気合入つてんのはわかるけど……いくら平和の為いうてもアレはやりすぎやないか？」

コリンがアレと指さしたその先には露出の高い服に身を包んだ、目付きの悪い長身瘦躯ちようしんそうくの女性が道のへりに座り込んでいました。始終ニヤついた笑みをへばりつかせ自身の片腕：：おそらく義手であろう機械仕掛けの腕でなにやら手記に書き込んでいます。

そこだけ避けるようにスペースが空いているの

で余計目立つていました。そしてただ避けられて
いるのはどうやら不^ぶ氣味^{きみ}な義手のせいだけではな
いようです。

「リホ・フラビン……別名『隻腕^{せきわん}の女傭兵^{ようへい}』、フラ
ビン地方出身の悪名^{あくみょう}高い女傭兵で確かに気に食わな
い雇^{たい}い主への暴行や国境侵犯、その他もろもろで
逮捕状^{たいほ}が出でているはずやで」

「奴の本質は傭兵だ。ちゃんと取引したので問題
はない」

「どんな取引したん?」

「軍に入れば逮捕状は取り消すと言つてある」

「それはそれは……気合入りまくりやん……あり

や？」

コリンは不思議そうに広場を見渡します。どうやらお目当ての人物がないようです。

「どうした」

「あ、いやな。こんだけ人おつても噂の『ベルト

姫』が見当たらん思つてな」

「ああ、呪いを解くため十年以上部屋にこもつて鍛錬し続けた噂のな」

「目撃情報は結構上がつとつたから見てみたがつたんやけど……しゃーないなあ」

コリンはそう言うと手を後ろに回し「つまんな」と言いながらこの場を後にしようとします。

「どこへ行く」

「試験の準備や。魔法系の筆記担当やねん。ほな
なー」

「……早く行け……もういないか……あいつは自
由すぎる」

メルトファンはそう独り言ひとりごとちるとまた志願者た
ちに視線を戻すのでした。

その時、急に大きなどよめきが立ち込めます。

視線をどよめきのほうに向けると、まるでモー
セの奇跡のよう人に垣いはが割れ、中から見目麗うるわしい
女性が姿を見せました。ブロンドの髪を短く整え
気品のある顔立ちではありますがどこか陰かげを漂わ

せる……不思議な魅力のある女性です。そして顔立ち以上に気になるのは——

「鍛え込んでいるな」

メルトファンも思わず唸りました。軽装で身を包んでいますが、ナイスバディとは少し毛色の違います。しなやかに駆け抜けれることができる猫のようないい象です。腰元には赤いシミのある奇妙な革のベルトがまとめてあつて……彼はそのベルトを見てハツとします。

「もしや『ベルト姫』……セレン・ヘムアエンなのか？」

そのメルトファンの獨白に共鳴するかのように
広場の大男——アランが声を上げます。

「てめえもしかして『ベルト姫』か?」

彼の一聲が広場に波紋を呼び、「あれが」や「噂
の……」といつた声が伝播しました。

「……」

アランの問いかけにも、周囲の好奇の目にもこの美人は何の反応も示しません。その覚えのある態度に彼は舌打ちをします。

「チツ……その舐めくさつた態度、間違いねえ。
んだよベルト外せんじやね——か、オマケに美人と
きたもんだ」

「……だからなんでしょう」
透き通るような冷めた聲音。それがアランの神経をさらに逆撫でた模様です。

「ああ！ ざけんなよ！ てめえの奇つ怪じみた格好のせいで『地方貴族は変人だらけ』なんて面白がつて尾ひれの付いた噂が広まつてんだよ。まつとうな格好できんならハナからそうしてろつてんだ」

アランはズイと近寄り睨み付けます。
「俺の出世に響くだろーが」

遠巻きにその一連のやりとりを見ていたメルト
ファンは顎に手を当て思案します。

(実力ともに申し分ないが少々跳ねつ返りがすぎるな……ま、あの程度なら修正可能だが)

冷静に今後について考えているメルトファンですが次の瞬間、

「フンッ」

仮頂面そのまままで鼻水を飛ばしてしました。なかなかの飛距離です。

「何んまいやバくなーい?」

若干キヤラじやない言葉遣いが出てしまうほどメルトファンは動搖しています。その視線の先には――

「どこか腰下ろせる場所ないかなあ……」

純朴 じゅんぱく そうな麻のシャツの少年が辺りを見回しながら歩いています。しかし只者もさではありません。歩くたびににじみ出る猛者もさの纏う力まと…見た目からは考えられない底知れなさに息を呑のみました。鼻水を放置したままで。

「彼も志願者もざんしゃなのか……なんということだ……」
彼が国を想う軍人になつたら向こう数十年は我が國の軍事力は他国に引けを取らないものになるぞ。仮に今すぐ戦争が始まつても負けようがないぐら
いだ」

そう思つたメルトファンはこの運命的なめぐり合わせを神に感謝するのでした。鼻水を放置した

ままですが。

その頃、先ほど悪党と称された女傭兵のリホが広場のへりに腰をかけ、アランとセレンのやりとりを含みのある笑えみで眺めていました。

「おーいいねえ威勢があつて」

そう独り言ちた彼女は二人の実力を瞬時に見抜きます。

(斧使いのほうは強いっちゃんや強いけど『試合巧者』つて感じ

だな。一対一はよくても戦争に向かないかも……噂のベルト姫のほうは鍛え込んでるけど実戦はほとんどしていないつてところか)

そして手記につらつらと書き加えていきます。

（どちらも中部地方のある家柄……と。金の匂いがするじゃねーか）

彼女、リホ・フラビンはこの場にいる人間を品定めしては金づるになるか、利用価値があるかななど事細かに手記に記しているのです。

傭兵として扱いやすい雇用主を探したり組みやすい人間を見出すのは彼女の処世術で、幾度となくくぐり抜けてきた死線が見抜く目を培^{つちが}つてきたのです。

リホはひと通り品定めを終えたあと手記を閉じ、懐に入れ、ゆっくりと息を整えました。

(さて……と……)

手汗をズボンで拭ぬぐります。

(じやあ……現実と向き合いますか)

そう勿もつ体たいつけて、リホは恐る恐る視線を隣へと向けました。

「ふう……なんかここだけ空いててやつと腰を下ろせるよ」

(なんつだこのバケモンは!)

リホの隣に、のほほんとした顔で麻のシャツを着たいかにも貧乏びんぼうそうな少年が座り始めました。

一見すると普通なのですが――

(見た目じゃわからんね――けど只者じやない！
気圧されそくなぐらいだぜ！)

今まで彼女が経験したことのない得体の知れない何か。彼女にとつて「逃げ出したい」と思つたことは多々あれど、「逃げられない」と考えたことは初めてでした。

(このアタシが……動けねーんだ……ちよつと動いたり隙でも見せたら首を吹っ飛ばされてもおかしくない……そんなイメージが浮かんできちまう)

たとえるならいきなり虎とらが隣に座り込んだ心境です。下手に動いてこちらに意識を向けられでも

したら何をされるかわからない状況です。

(やべー……ヤベー……軍舐めてた……こんな奴も来るのかよ)

女傭兵はその顔面に脂汗を十分に滴らせ虫のよう^{したた}に息を潜めていました……が。

「あの……ちよつといいですか？」

虎一口イドが不意にリホのほうを向きました。

「ひやい！」

裏返った声を出しながらリホは自慢の義手を前に出し、身構えてしまします。

「……それすごいですね。義手ですか」

刹那^{せつな}、リホはやばいと思ひます。このように無

骨な義手で身構えてしまつては「戦闘の意思有り」と思われても仕方ありません。

（やべー！この先の言葉選びはアタシの人生を左右するぞ！）

即座に義手を後ろに回しきこちない微笑みを浮かべながらリホは逡巡しゅんじゅんします。

A
リホ「あ、そうです義手です」

B
ロイド「ならば痛みなど感じぬな」義手ブチブチ

リホ 「いえ、生まれつきです」

ロイド 「嘘うそを付け」 義手ブチブチ

リホ 「……」 黙秘

ロイド 「何か言え」 義手ブチブチ

リホの頭の中ではどうあがいても義手を引きちぎられる未来が描かれ、走馬灯がこれでもかといいくらい駆け抜けています。

(おわつ……た、人生)

そんな彼女を見たロイドはとくに、

「あ、なんかすいません。変なこと聞いちやつて。
その義手ちよつとカッコいいなつて思つちゃつて
つい」

いつも柔和にゅうわな笑みをリホへと向けます。それ
がまた心地よさすら感じる笑みなので「悪魔の微
笑みつてこんななんだな」と彼女を警戒させる
に至りました。

彼女の胸中はお構いなしにロイドは言葉を続け
ます。

「僕、かなり田舎いなかから出てきまして……知つてい
る人誰もいなくて心細かつたんでつい……あ、僕
ロイドと言います。ロイド・ベラードンナです」

「あ、え……リホ……フラビンです」

ロイドの差し出した手を握らなかつたら死ぬと察したりホは選挙中の政治家のよう両手で包むように握手をしてはしきりに頭を下げます。体重はいつでも逃げられるよう後に後ろに預けたままですが。

そんな折、ロイドとりホのなんとも言えない奇妙な空間に割つて入ってきたのは『ベルト姫』セレンです。

(な、何だ次は? 『ベルト姫』かよ!)

彼女はあるのモンスターを一撃で倒せるような人物なら軍人、もしくは軍人志願者か何かかと周り

を探つていいたのでした。その勘が大当たりしたことと運命の邂逅にほんのり頬を染め満面の笑みを浮かべます。いつもなら笑うたび聞こえていた顔面を取り巻くベルトの軋む音も、今は聞こえません。そんな事情を知らないリホは新たな来訪者に身構えます。

さあ、幸せの絶頂のような顔つきの彼女はロイドの前に現れるやいなや、かかとを揃え直立不動の姿勢になりなにやら言いたそうにしています——きつと思ひだけ先走り言葉を用意していなかつたのでしよう。

「ああロイド様ロイド様ロイド様ロイド様——」

それ以前の問題でした。言語中枢がやられています。

ロイドはそんな小声でぶつぶつ言い続ける挙動不審の彼女を見て一瞬小首をかしげますが、感じたことのある気配と背格好といつた少ないヒントで「串揚げの人だ」と気が付くといつもの笑みを向けました。

「ああセレンさんですか？　あなたも軍人志願だつたんですね」

「はい！　あなたのセレン・ヘムアエンです！」

あなたのという枕詞まくらごとばにクエスチョンマークを一瞬浮かべるもロイドは気にせず会話を続けていま

した。

（これ、逃げるチャンスじゃないか？）

若干噛み合つてない感じの会話が気になります
がりホはこの隙に乘じこの場から離れようと四つ
ん這いになつて逃げ出さんとしました。

「で、あなたは一体何者ですか？」

が、そやは問屋が卸さないと言わんばかりのタ
イミングでセレンがりホを呼び止めるのでした。
目に光の宿つていない……まるで恋敵を見るかの
ような濁つた瞳です。

「——ばつかやろう！ この女あ！」

千載せんざい一遇いちぐうのチャンスを潰つぶされたりホはセレンに

四つん這いのまま睨み付けます。

「ずいぶんロイド様と親しげに喋しゃべつていましたけ

ど……」

「親しげ？　お前の目は節穴か！」

リホはその濁つた目を見やり、「うわー節穴っぽい」と漏らすのですが、その声を搔き消すかのよう

にロイドが間に入つてきました。

「この人はリホさんといつて、さつき会つたばかりでして」

その言葉にセレンはパアつと明るくなりますが。

「そりなんですか？　それにしては変な感じでしたのでつつきり恋敵出現かと……」

(アタシの怯えをそんな風に捉えてたのか……
ん?)

その時、リホはあることを思いつきました。豆
電球がピコーンと背景に浮かんでくるかのような
「閃いた!」な表情です。

(地方のお貴族様と田舎もん……どう考えても
釣り合わない身分なのに親しげに話しているとは
……恐らくこの二人はただならぬ関係)

傍から見たらこの二人……というか一方的です
が恋人とはいかずともそれに近い関係のように思
えます。実際は赤の他人と大差ないと知つたら驚
くでしょうが。

(このロイドとやらからは身の毛もよだつほど底
知れない力を感じる……しかし親しいベルト姫を
介して利用することができれば……)

リホの頭の中では自分がサーカス団の団長になり
猛獸使いのセレンに指示しロイドを巧みに使う画
が想像できました。そしてへばり付くような嫌な
笑みを浮かべます。

(ベルト姫を利用してこの化ばけもの物をうまく操縦でき
ればとんでもないでかい山も動かせる、軍なんて
小さい仕事についてもお釣りが出るくらい……金
の匂いがするじゃねーか!)

人生終了の覚悟から一転して大儲おおもうけのチャンス

が降つて湧いたことに、リホは小さくグツとガツ
ツポーズをしました。

一方猛獸扱いの口イドはいつもほわんとした笑みです。

「わー友達できた……つとまずは試験頑張^{がんば}らない」と

一方利用価値アリと目を付けられたセレンは恍惚とした表情です。

「ロイド様×20」ブツブツ

……… 様々な思惑の中、士官学校の試験は始まろうとしていました。

雲一つない青空の下で、いくつかのグループにわかれ試験は展開されています。特に最近はメルトフアン大佐の肝いりで大勢の人間が試験を受けているため、試験は流れ作業のように進んでいて「次つ」という試験官の勇ましい声があちこちで響いています。最初は武術試験のようです。

試験官が無骨な鉄板を幾重にも貼り付けた力カシのようなダミーを叩きながら志願者たちに説明を始めます。

「よーし、ここにある好きな武器を持つてこのダミーに斬りかかるんだ。身のこなし、太刀筋なんかを見極めるからな……別に真まつ二つにしても構

わんぞお」

その冗談に受験者から笑いが起きました。このダミーは鋼鉄の板を重ね合わせた代物。片や使用する武器は安物のブロンズ製、逆立ちしても真っ二つにはできないでしょう。普通なら。

そんなジョークは基準の違うロイドにはわからぬよう、「なんか簡単に真つ二つにできそうだけど」という風に小首をかしげながら、なんで笑つていたのが理解できていな御様子です。

さて、ロイドが試験の順番待ちをしている列の大きく離れた所ではメルトファンが試験の様子を頷きながら眺めています。満足気な御様子です。

「苦労して搔き集めたかいがあつた……この者たちが愛国の軍人になればいかなる驚異にも太刀打ちできるであろう」

そんな腕を組むメルトファンに物騒な義手をぶら下げたりホガ並んでいた列を離れ、ニヤケ顔で近づいてきました。

「…………何だ？」
今更やめたいなんて言わない

「どうな隻腕の」

「へつ、じよーだん言わないのでくださいよ。今までの悪事を水に流してくれる上にお金がもらえて……ちよつとしたことなら見逃してもらえる。こんなうまい話逃せませんよ」

「なら 一体何のようだ」

怪訝 けげん そうなメルトファンに対し、リホはのらり
くらりと話を続けます。

「いえね、今回の試験もやたら気合入っていますね。
アタシみたいなもんに噂のベルト姫、他にも色ん
な曰く付きやらなにやら募集をかけたんですねえ
⋮⋮⋮

「この国の未来のためだ」

「へえへえ⋮⋮そこで質問なんですが
サツと控えめにロイドを指さします。

「アレ、何なんスか?」

「知らね」

キャラリじゃない返しをするメルトファンにたまらずりホが詰め寄りました。

「知らねつて何！　あんたがスカウトしたんじやないの？　あんなヤベーの！」

「だから私も面食らつているのだ！　多分、私を含めここにいる連中全員束たばになつてかかつても勝てるかどうか……」

そしてロイドの緊張した顔を見てリホはなんとも言えなくなります。

「パツと見ただの田舎モンの少年なんですがどね……だから逆に怖くて……一瞬自分の勘が鈍にぶつたのかと思つて聞きに来たんスよ」

そのリホの言葉に合点がいったのかメルトファ
ンはまた事務的な態度に戻ります。

「気になるのもわかるが、私が試験中、一個人に構うことはあつてはならん。お前も早く列に戻れ、試験失格になつたらただの罪人だぞ」

「へいへい、ま、ロイド君の実力のほどは合格してからつスね」

「随分余裕だな、受かる自信があるのか？」

「それ、スカウトした大佐が言いますか？」

そんなひょうひょうとした態度を見せるリホの後ろから彼女を呼ぶ試験官の声が聞こえます。

声に誘われ義手をブラブラさせ悠然と試験官に

近寄りました。

「——武器は何にする？　リホ・フラビン」

刀、メイス、斧……木箱の中にはんざいに突つ込まれた様々な武器を一瞥いちべつするとリホは含み笑いを漏らします。

「何がおかしい？」

「いえね、アタシにそれ聞きますか？」　って話ですよ

そう言うと試験官の鼻先にギイギイとカミキリ虫の音を立てた義手を突き付けます。

無言の試験官を尻目にリホはダミーへと軽く跳躍すると義手を振り下ろします。

耳障りな金属の擦れる音の後、剥はれたダミーの鉄板が地面にガランと落ちました。

「バカな……何枚も鋼を重ね、溶接した代物だぞ」

リホは驚く試験官を横目で見てニヤリと笑いま

す。

「あいにくアタシの相棒はミスリル製なんですね、こんぐらい楽勝ですよ。もし合格したらきっとアザミ王国のお役に立ちますぜ……ここだけの話、便利なんだけど維持に金がかかってしようがないんですよ。というわけでヨロシク試験官殿」

「……早急に新しいものを持つてこい」

アピールを終えたりホは意気揚々と次の試験会

場へと向かいました。

「だからロイド君にセレン嬢……アタシの為にきつちり合格してくれよ」

一方少し離れたロイドの列では、彼の前にいた男、武勲で名を馳せたりドカイン家のアランが自慢の腕前を披露していました。

「おりやおりやおりやおりや！　うわりや！」

重量のある両手斧が実際に軽々と振るわれあらゆる角度からダミーを切り付けます。その様子を見て周囲からは感嘆の息が漏れるほどです。

「そこまで！　次の者！」

「ふん、いい運動になつたぜ」

その様子を見たロイドは次のように考えました。

（そ
うかわかつた！コレは如何にこのダミーを倒すことなく素早くリズミカルに連打する試験なんだな。それなら合点がいくよ！）

フイギュアスケートばりの芸術点を求められていると勘違いしたロイドは「うわー難しいなあ」と身構えてしまします。

「次！ロイド・ベラドンナ！」

「あ、ふあい！」

噛んでしまったロイドの返事に周囲がぐすくすと笑いロイドはまたガチガチに体を固くしてしまいました。右手と右足を同時に出しちゃうくらい

ベタに緊張しています。

「コホン……武器は？」

「え、あ、た、短刀で」

ロイドは木の箱から小ぶりの短刀を取り出すると慌てて構えます。忍る忍るへつぴり腰でダミーに近づく彼に周囲は嘲笑ちようしょうを向けてきました。

(軽く、軽く、壊さないようにな……かつ……連打、リズミカルに……)

触れたら崩れてしまうものを扱うかのように近づいた後、ロイドは目にも止まらぬ速さで短刀を振ります。

そして本当に目にも止まらぬ速さだったので周

団の受験生は疎^{おろ}か試験官ですら何が起こったのか理解できていません。

数秒後……ダミーはバラバラになってしまったのです。重量感のある倒壊音と壮大な土煙がその場を包み込みました。

「「「ええ——?」」

騒然とする試験会場。

一方ロイドは「うつそだろオイ」という周囲の反応が大失態を犯した人間にに対するものと勘違いしうなだれてしまします。

(あああああやつちやつたああああ……)

試験官はそのうなだれたロイドとバラバラにな

つたありえないダミーを見て、
「うむむ……きっとさつきのアランとやらの斬撃ざんげき
で脆くなつていたのだろうな……なんせ『触れる
前に』バラバラになつたからな」

そう考えるに至り「これまで！　おい！　代わ
りのダミーを早急に用意しろ」とそのまま流れ作
業のようにロイドの出番を終わらせたのでした。
挽回ばんかいがつくりうなだれるロイドは次の筆記試験で
のでした。

さて、次は筆記試験のお話です。会場では既すでにに

終わった答案用紙を試験官が集めていました。

「ん？ 何だ？」

試験官は集めている最中、異様な答案用紙を目の当たりにして回収の手を止めてしまいます。

「ロイド・ベラドンナ……何だこの回答は」

試験官が注視しているのは『火の魔法を記せ』というとても簡単な設問でした。しかしその回答はとくにわからぬから適当にごまかすアレだな。されていたのです。

「あーわからないから適当にごまかすアレだな。単語とかでよくあるなハハハ」

こんな簡単な問題を絵みたいなのを描いて

誤魔化す幼稚な奴はきっとダメだろうなと思うと
また答案用紙を集め出しました。

「ただその文字が古代人の叡智である『古代ル
ーン文字』ということをこの試験官も採点する人
間も知るはずはありませんでした。」

筆記の回収が行われている中、隣の部屋では志
願者の面接が行われておりました。強張つた顔の
ロイドが試験官二名に見られてサウナのごとく玉
のような汗を額に浮かべています。

「ロイド・ベラドンナ君だね」

「あ、はい。軍人に憧れてこの王都に――」

「コンロン村……聞かない名前だがどちら辺にあ

るのかね？」

「あ、大陸の端はじつこです」

「端……まあいい、ところで何か特技とかアピールできることはあるかい？」

「え、えっと炊事すいじ、洗濯……あとえっと……あ、雨を降らせることができます」

突飛な発言に試験官は思わず目を丸くします。

「ハア？」

「そ、そのぐらいです……えっと」

ロイドは席を立ち窓際に歩むとサラサラと木の枠に何か書き込み空へ飛ばす仕草を見せました。古代ルーン文字を用いた降雨魔法ですが試験官か

らしたら胡散くさい何かです。彼らは互いの顔を見合させ苦笑します。

「……よし。えつと、あと数分で空から雨が降つてきます」

「もういいです。お帰りはあちらです」

「あ、ハイ」

ロイドは追い出されるような言葉に肩を落としうござごと部屋を後にすることになりました。

「——いかんでしょアレ」

ロイドが去った後、試験官が言葉を漏らすともう片方がうんうんと唸ります。

「雨つてねえ……おや？　でも少し曇つてきてい

ませんか？」

その言葉に、いかんでしょと言つた試験官が怪訝な顔で答えます。

「大方田舎者の特技じゃないですかね、天気を、雲の流れを読むのは。それを雨を降らせる特技つて言つちゃうのは、いただけませんな」

「騙せると思つたんですね」

「まったくです。そんなことができたら一大事です

よ」

ポツリポツリと雨が降り始めた窓の外を見て、試験官は苦々しげに言い放つていきました。

試験終了後、ロイドは肩を落として帰路に着いていました。

「ああ……やっぱ雨なんてたいしたことないんだ……」

雨の中ロイドは駆け抜けます。水たまりを踏み抜いても気にもとめず、自己嫌悪を抱えたまま。はたして彼が自身の強さに気が付く日は来るのでしょうか？

第三章 たとえば事務員の面接に筋骨隆々の男が
来たので「スポーツジムと勘違い？」と疑うよう
な心境

そして月日は経ち合格発表の日、ロイドの下宿
先『イーストサイドの魔女』マリーの雑貨屋には
近所のおばさんが来店していました。どうやら
腱鞘炎か何かで肘を痛めているらしくハツ力の香
る軟膏を塗つた箇所を時折さすっています。

おばさんは台所で乳鉢でコリコリ薬草を調合し
ているマリーの背中に向かってお喋りしています。

た。

「――というわけよマリーちゃん。王様の体調はあまり優れていらないらしくてほとんど部屋にこもりつきりなんだつてさ」

「おばちゃんそれホント?」

「ホントよホント! お城で奉公しているうちの娘が言うんだから間違いないわよお。あとお偉いさん方が慌ただしいらしくて戦争は秒読みかもつて噂うわさもあるわね」

「あーそれは色んな所で耳にするわ。デマじやないのかな? 反対意見も多いはずだし」

「そうそう、だから戦争の準備したりしなかつた

りで揉もめてるそうよ。最近街道が爆破されたり運河の水がせき止められたりつてあるじゃない。それで戦争をする方向だつたのが最近一気に解決しちやつたみたいで反対派が盛り返しているそうよ」「ああ、そうなの……ナンデカシラネー」

その遠因がウチの居候いそうちとは口が裂けても言えないのでマリーはお茶を濁にごします。

「商人たちも冷静になつて『あれは本当にジオウ帝国のせいか? 国が無策なのを誤魔化ごまかしていたのでは』なんて意見も出てきてね。噂じや王様が戦争したがつてるから反対派は王女様を擁立ようりつしようと行方不明の王女様を必死になつて探ししている

とか。その行方不明の原因も戦争するしないのイザコザ……痛いたた

「ほら興奮するから……はい、できたわよおばち
やん」

妙齢の女性特有の機関銃のようなトークに彼女自身の肘が悲鳴を上げました。そのタイミングを見計らいマリーは調合した軟膏を差し出します。

「いつも悪いね、もらつちやつて」

「いいのいいの、お城の面白い話聞かせてもらつてるからさ」

「そりゃ今度お料理作りすぎたらまた持ってきてあげるからね」

「ん、あんがと」

おばちゃんは軟膏の入った小瓶こびんを受け取ると笑顔で雑貨屋を後にしようとした。

「……あーそうだそ�だ、聞きたいことあつたんだけどマリーちゃん」

店を出ようとしたおばちゃんがくるりとマリーニに向きます。先ほど以上の笑顔……下世話な話をする時のニンマリとした顔でした。

「あの男の子はマリーちゃんのアレかい？」

「ガンガラガツシャン！」

「な、なぬお言つてんの！」

マリーは思いがけぬ奇襲に片付けていた乳鉢を

豪快に台所にぶちかましてしまいます。

「いやねえ、いつもなら缶詰に飽きてご飯たかりに来たりしているのに最近来ないから近所の奥様たちは疑問に思つてたのよ……そしたら目撃情報がわんさか出てきてね」

「ち、違います！」親戚の子——あ、そうだ！

「あたしは魔女ですよ！」下僕の一人くらいはいます！だから料理をやらせたりつ！」

「最近の魔女は下僕の寝癖を丁寧ていねいに直してあげたり、お出かけの際は見えなくなるまで手振り続けるのかい？」

その情景をフラッシュバックのように思い出し

たマリーは湯気でも出るんじゃないかと思うくら
い顔を真まっ赤かにしました。

「どこまで見てたんですか！　どこで見てたん
ですか！」

「おつと怖い怖い。じゃあおばちゃんは退散する
わね」

おばちゃんはそう言つて足早に店を出ていくの
でした。

おそらくこのあと奥様連中とこの話をネタにお
茶でもするのでしよう。マリーは自分の痴態ちたいが鳥
の巣に持ち帰られた餌えさのごとくついいばまれること
を想像して、また赤面するのでした。

そしてなんといつても自覚がある分言い訳ができないのです。ついやつてしまふ過保護な行為を省みて、あの口リババアのこと言えないなあと所以在なさげに頬を搔ほほかくのでした。

「ぐうう……とにかく落ち着くためにコーヒーを……」

片付けを後回しにしてコーヒーを淹いれ出すマリー。香ばしい香りが辺りを包み始めると次第に彼女も落ち着きを取り戻します。

そして頭の中には浮かべ始めるのは先ほどおばちゃんから聞いたお城の情報です。

(戦争は秒読みだったのか……街道の爆破、川の

せき止め、そしてモンスターの件……すべてがそ
う仕向けるためには繫つながつていたと見たほうがいい
わね）

コーヒーを含んだマリーは苦い顔をします。

「私がもつとしつかりしていればこんなことに

はならなかつたのにね……」

「おいバカマリー！ ワシにもコーヒーちよう
だ！」

そして当然のようにひよっこりとクローゼット
から現れるツインテールの口リババア師匠^{じじょう}、アル
力を睨^{にら}んで叫びます。

「こんな師匠と関わらずに済んだのにね！ 今日

は何しに来たんですか！」

乱暴にコーアヒーを質問とともに差し出します。アルカは椅子に座りちんちくりんなあんよを組むとしけつと答えるのでした。

「え？　今日試験の合格発表じやろ。ロイドの合格をねぎらつて共に喜ぶ流れで抱き締めてチユツチユしようかと」

「ほんと恨むわ十歳の頃の私！　こんなダメ人間と関わらせてね」

頭を抱えるマリーをよそにアルカは勝手に砂糖を増し増しにしたコーアヒーをすすります。「ま、仮に落ちてしまつたとしてもじや……お主

が権力を取り戻せば造作もないことじやろ、のう
ー」「どこか含みのある言い方のアルカ。ニンマリと

口の端^{はじ}つこを釣り上げた悪くい顔です。

「アザミ王国の失踪^{しつそう}した王女様……マリア王女ならのお」

それを聞いてマリーは頭を抱えすぎて前衛的なポージングをしてしまいます。これがこの国の中女だと言つても誰も信じないでしよう。眼科と脳外科の受診を勧められるのがオチです。

「その為にロイド君を私の所に！」

「まあの……ロイドはいい子じや、情が移つてしまふことも目論もくろんでな……しかし……ちと情が移りすぎてるやも知れんがの。フラグが立つ前になんとかしなくては」

アルカの視線が心なしかマリーのブローチへと向いているようで……マリーは総毛立ちます。

このままズルズルいつたら別のフラグが立つ……そうです頭に『死亡』が付くアレです。そう感じ取った彼女は弁解するよう答えるのでした。

「いや、情といつても！ 兄弟的な！ あ、あともう少し待つてください王女として戻るのは。戦

争を引き起こそうとしている絵を描いた黒幕を見つけるまでは！」

「まあそんなことはどうでもいいんじゃ。ロイドのことじや、どうじやあの子は」

そんなこと扱いされても「この人は昔からこうだ」と達観しているマリーは目を細めながらアル力の問いに答えます。

「えー試験当日帰つてきてから元気ないですな……あと——」

「あの子の自己評価の低さも筋金入りさね……あと何じや？ ロイドがどうかしたかえ？」

「ロイド君がじやなくて、綺麗な女の子がロイド君を探し

て色々聞き回っているそですよ」

「ほう」

「運命の人だとかなんとか」

「…………ほう」

心なしか雑貨屋の店内がひんやりとし始めまし

た。

「あの師匠？」

「…………もしロイドの元気のなさが試験如何いかん
ではなく恋煩わざらいとしたら」

「あのししょー？」

「決めた！ この国滅ぼす！」

「このバカ師匠！ なんか嫌なことあつたら国滅

ばそくとするのはやめてください！ 大昔はパフ
エのイチゴの数が絵と違つていたからつて滅ぼそ
うとしていましたよね！」

「ああああ思い出して腹が立つ！ この国二回
分滅ぼす！」

「一回で十分でしょ！ いや一回でもダメだけ
ど！ やめんかこの口リババア！」

アザミ王国が何度も滅亡の危機に立たされ、そ
の都度マリーに助けられていることを国民は知ら
ないほうが多いでしようね。

恐ろしい女と人は彼女のことをそう評します。

リホ・フラビンのことです。彼女は『隻腕の女傭兵』と呼ばれるほど名の通った傭兵で、下着と見まごう服に身を包んだスレンダーな体つきと性悪さを隠しもしない三白眼、そして瘦軀に似合わぬごつい義手が目を引く近寄りがたいオーラを放つ女性です。

彼女はその義手をぶら下げては今日に至るまで金になることはなんでもこなしてきたそうです。また性格も難アリで金に意地汚い上に気分屋などころがあるので通行料を払わないやうに入らなければ、主に反抗し怪我を負わすなどトラブルが絶えず、それが積もりに積もりつてお尋ね者の域にま

でなつてしまつたそうです。

そんな彼女はその罪をチャラにすることをダシにされ、今では士官学校の学生へと相成りました。ま、無論それに留まるつもりは毛頭なく、同期や上官から金づるを探し今後利用してやろうかと考えていたのです。

合格発表当日、大門の前の立て看板には大勢の志願者たちが群がつていました。

リホは当然のように自分の番号を見つけては周囲の恐怖の視線をものともせず合格者の集う大きな講義室へと入っていきます。そして適当に空いている席に座るとスラリとした足を投げ出し周囲

を見回します。

(大抵目を付けた奴らは受かっているみたいだな
⋮⋮ヨシヨシ)

手記が無駄にならずに済みそうだと考えている
時、やたらキヨロキヨロしているセレンが目に飛
び込んできました。

例のベルト姫は居心地でも悪いのでしょうか、
妙にそわそわしては辺りを見回します。

(あーきっと例の想い人を探しているんだろうな)
リホの頭の中にはその想い人、ロイドが浮かび
上がらりました。

今まで会つたことのないような底知れない何か、

死線をくぐり抜けてきた自分だからわかる圧倒的実力……ただ見た目は完全に素朴な田舎の少年なので自分の勘が鈍つたかと錯覚してしまってほど毒気を抜く笑みを浮かべる少年でした。

リホにとつて今後の士官学校生活に銭の花という彩りを添える最重要人物です。

(ロイド君がいれば難関クエストやヤバイ仕事も軽くこなせるだろうな……尻馬に乗つかるだけでも懐が潤うねえ……ん?)

ここで問題が生じました。いくら待つてもそのロイドが姿を見せないのであります。次第にリホもセレンと同じようにキヨロキヨロし始める始末です。

「嘘うそでしょ……」

狼狽うろたえる彼女に後ろから声をかける一人の男が現れます。ハツとして振り向いたその先にいたのは

「なんだよ、隻腕の女傭兵も受かつてやがるのか」

リドカイン家の長男、アランでした。

「違う」

リホは即座にひと言そう言つてはまた辺りを見回します。あまりにひどい扱いを受けたアランは二の句を継ぐことなくリホの前からすゞすゞと去つていきました。

アランは気を取り直し今度はベルト姫のセレン

に嫌味ともに声をかけます。

「よおベルトー」

「違う」

アランは同じような扱いを受け涙目で隅っこのはうに座ります。そして時折「違うつて何だよお」と机に向かつてこぼすのでした。

しばらくして講義室の壇上に先ほど入ってきた仮頂面のメルトファンと茶髪の映えるかーるいノリのコリンが現れました。

「集まつているようだな」

威厳のある佇まいと毅然とした聲音に講義室はピタツと静まります。その様子を見て満足げに頷

きました。

しかしこのメルトファンも最初こそは落ち着き払つていました。時間が経つにつれ徐々にリホやセレンのようになり、キヨロキヨロし出すのでした。

一向に始まらないガイダンスと仮面そのままに挙動不審なメルトファン、彼は扇風機の首振り機能のように部屋中を何度も何度も見回します。

無言で。

「え？ どないしたんメルトファン？」

その後、彼は何度も名簿を眺めてはそんなまさかとぶつくさ言い、まるでメルトファン自身が試験に落ちたかのように、「そんなはずでは」と連呼

し始めました。

「メルトファン……そろそろ始めんと」

「あー遅刻者はいなか? トイレ行つている奴
は? つーかこれで全部ツ?」

「あのーメルトファン? キヤラちよつと変わつ
てへん?」

「よーし! いない者は手を挙げてツツツ!」

「メルトファン! キヤラ! キヤラ!」

いつもの事務口調からいきなり天然ポンコツに
成り下がった同僚を見て、仕方なしにコリンが仕
切り出します。

「えーとりあえずみんな合格おめつとさん」

そんなねぎらいの言葉も遮るかのように、いきなり生徒の中から手を挙げ質問を始める者が現れました。

「あの、すいません。ロイドという方は合格ではないのでしょうか？」

セレンです。彼女は焦燥^{じょうそう}などのこもつた訝しげな表情で個人的な質問をしてきたのです。

コリンは胸中で「アチヤー」と思い彼女に注意を促します。

「おいおいベルト姫ちゃん！ そんな個人的なことをのつけから質問しちゃつたらメルトファンにどんな修正されるかわかつたもんじゃないで」

規律、公平、平和を連呼するメルトフアンです。胸中穏やかでないコリンでしたが、

「私もそう思う！ 何かの間違いではないかと！」

「乗つかりおつたこの仮面！」

ポンコツに成り果てたメルトファンを見て、別のベクトルに胸中穏やかではなくなります。その壊れた同僚はといふと、手にした名簿をコリンに預けるやいなや講義室から出て行こうとします。

「コリン、後を頼む。ちょっと面接官に問いただしていくる」

「ハア？」

全く状況の掴めないコリンをよそにセレンが彼

について行こうとします。

「私も行きます」

「ちょ！ 士官候補生としての大変なガイダンスをサボるんかい？」

そんなんしたらメルトファンに……と思い、彼のほうを見やると、

「ああ！ 一緒に来てくれ！」

まるで同志を歓迎するかのように親指を立てたメルトファンがそこにはいました。コリンの彼を見る目はポンコツを超えた何かです。

「あーアタシも付いてつていいですかね？」

その流れに乘じり、ホも同行を申し出ます。セレ

ン嬢と仲良くなること、そして少しでもロイドの情報を得たいがためです。そんなサボタージュ目的とも取れる発言ですが――

「ああ来てくれ、心強い」

まるで盟友を歓迎するかのようなメルトファンでした。顔は相変わらず仏頂面ですが、両手の親指を立てちゃつたりなんかして全身で歓迎の意を表していて思わずリホも苦笑いです。

(この人こんな感じだつたつけ……まあいいか)

そして口をあんぐりさせたコリンをほつぽつて、三人は風のように颶爽さつそうと講義室を出て行つたのでした。

さあ、チームロイドの行く先は無論、面接官の所です。大佐と美大学生と女傭兵というアンバラシスな組み合わせが肩を並べて行く様子は道行く人々の目を引くには十分でした。

メルトファンは試験当時の資料を引っ張り出し、そこにはその名簿から面接官を割り出し、迅速に対象を連れ出し……

「リホさんは足を持つてください」

「あいよ」

「ちよ、君たちい？ め、メルトファン大佐！コレはいつたい何だ？」

「言い訳なら後でたっぷり聞きますよ」

「えええ？　なんのことおお？」

……失礼、『拉致^{らち}』して空いている講義室へと連れ込みました。人気のない講義室で鉄面皮^{てつめんぴ}のメルトファンが不惑の年齢の男性面接官に壁ドンをするという誰得な光景が広がります。

「あなたがロイド・ベラドンナの面接を担当した
そうですね」

面接官の両脇には噂のベルト姫、そして女傭兵……両手に死に花という状況に顔面蒼白^{そうはく}の面接官はガクガクと首を縦に振り肯定の意を示します。

「よろしい……では率直に聞こう……なぜ彼を落

としたのだ?」

「いやあそれはですねえ、面接で急に変なことを
言い出したもんですからあ！」

「もしかして私への愛ですか?」

「はい黙ろうねベルト姫」

「あらごめんなさい、そうね別に変ではないわね相思相愛な
のだから……つてなんであなたが?」

「そうつれなすこと言うなよセレン嬢。仲良くな
ろうぜえ」

両脇のボケとツツコミに構うことなくメルトフ
アンは眼光鋭くしてさうに聞いただけします。
「変なこと、とは?」

「いえ、特技は？　つて聞いたらその……『雨を降らせることです』なんて言い出しまして」

「……………雨？」

チームロイドが同時に眉根を寄せます。一方面接官はと、いうと落ち着きを取り戻し、生気の戻つた顔で襟^{えり}を正しました。

「いやあ、私もそんな顔になりましたよメルトフアン大佐」

「でも、実際降りましたわ。わたくし覚えていますもの」

「ですが田舎の人間は雲の流れを読んで天気を当てるというじゃないですか。それがあたかも自分

が降らせたかのように嘘を付こうとしたら面接官として見過ごせませんよ」

完全に落ち着きを取り戻した面接官は職務を全うしたといふ顔でメルトファンを見やります。今度はメルトファンが立場のない顔つきになる番です。

「確かにそんな真似まねできたら干かんばつによる不作もなくなる……しかし彼なら……いやでも雨つて、雨つて……」

いくらなんでもそんな荒唐こうとう無稽むけいなことはできるはずがない。頭を悩ませるメルトファンに今度は面接官が体を入れ替え壁ドンをし返します。完全

に形勢逆転です。誰得な点は欠片も変わつていませんが。

「加えてですね、筆記試験では基本問題の魔法に関する設問で落書きを書いて提出したと聞きました⋮⋮流石に軍人としてはふさわしくないかと」

「落書きかあ、そんなことするタイプには見えないけどな」

リホはあるの真面目そうなロイドの顔を思い出しつぶやきました。それは他の二名も同じ考えでした。

「面接官様、よろしければその回答を見せていただけますか。自分の目で確かめたいのです」

「……いいのかねマルトファン大佐」

「申し訳ございません。私も少々気にかかつていまして」

「……君らしくもないが……少し待つていてください

納得いかない顔のまま部屋を出ていつて数分後、面接官は一枚の答案用紙を手に戻つてきました。それを机の上に広げるとチームロイドの三名はまるで宝地図を前にしたかのように額を突き合わせ覗き込みます。

選択問題は何の滯りもなく丸が付いているようですが、その下、筆記問題の欄には全く読め

ない文字が羅列されていました。いえ文字というには絵に近く、ひと言で言つなら一

「落書きだな」

「落書きですわね」

「落書きだねえ」

落書きでした。

「これはその……なんと言つたらいいのか……」

前衛芸術を前にした門外漢のごとく唸うなるだけのチームロイド。その時です。後ろから甲かんだか高い声が響いてきました。

「おいこらーメルトファン！ 何やつとんのや！」仕事を探し付けられたコリンが名簿をぶんぶん

振り回しながら空き講義室に入ってくるやいなや
メルトフアンの尻を名簿でスパンと叩きます。

「ぬお！ こ、「コリンか。その節はどうも」

「ちよつとは頭冷えたかあ？ それとも氷魔法か
何かで冷やしたろかコラ！ 結局ウチが全部やる
ハメになつたやないか……説明不足の部分があつ
ても文句言わさへんで！ 「規律を大事に」があ
んたのデフォルトかつ不变不動の座右の銘なのに
随分おちやめになつたんやなあオウ。今度の休日
パフェでもおごつてもらわにややつてられへんわ
あ！」

「あ、ああすまない」

機関銃のごとくベラベラ喋るコリンに言葉少な
に謝罪するメルトファン。その姿を見てコリンは
情けないと言わんばかりのため息をつくのでした。

「……ハア。で？　どうやつたんそのロイドつち
ゅう奴は？　気は済んだんか？」ニバカ

セレンがズイと前に出て答案用紙を見せつけま
す。

「ちよつと筆記で溢あふれ出す絵心を抑えなくな
つたり、面接で小粹こいきなジョークを言えるほどユニ
ークな人でした。軍に必要な人材と思いますので

早速合格手続きと私と同室での生活を要求します」

「あんた士官学校をお笑い養成所か何かと勘違い

してへんか？」

「コリン大佐、先ほどの言葉を訂正してください。
バカはコイツだけです」

セレンの言動に額を押さえながら三バカ撤回を
要求するリホ、そしてメルトファンは冷静に話し
出します。

「……正直、面接官の言い分はもつともだつた。
惜しい人材を落としてしまつたと思うがまた別の
方法で我が軍に迎え入れられるよう模索してみよ
うと思う」

「——ちよお待つて」

「……わかっている。自分でもらしくない入れ込

みようだと思うが彼からはとてもない可能性を感じたんだ。それはこのリホも……」

「——ちやうちやう！　お前やベルト姫ちゃん！　その回答よー見せて！」

案用紙を奪い取りました。

「ど、どうしたコリン、お前らしくない真面目な顔じやないか」

そんなメルトファンも意に介さずコリンはその回答にご執心のようです。

「……これ。古代ルーン文字やないか！」

「「「古代ルーン文字？」」

三人が同時に声を上げます。

「せや、とつくの昔に廃すたれて今ウチを含めた研究者たちが調べている代物しろもんや。見たことない文字かもしれんがウチの知つてゐる文字と共に通点がいくつもあるんや……こら間違いないで」

「ふむ、これが例の古代ルーン文字だつたのか」
メルトファンの発言にコリンがギロリと丸い眼を向けてます。

「あんたが研究せい言うたやんか、この国の為とか言つて！それを他人事のようにまあ言つてのけますなあ！ そういうや労ねぎらいの言葉の一つももらつてへんで！」

「す、すまん、私の知つている文字とえらい雰囲気が違つてな」

まだ喧嘩けんかが始まるのを防ぐようになりホが間にります。

「まあまあ……で、その『古代ルーン文字』って何なんですか？」

「あらあー気になつちやう感じい？」

カリスマ店員のようには反応したコリンは面接官を帰すやいなや、三人を講義室の椅子に座らせ教鞭きょうべんを振るい始めました。

「古代ルーン文字つちゅうのはその名残なごりだけをわざかにとどめどる超古代文明の頃に使われた魔法

形態と言われとるな。一般的に魔法は『詠唱』や杖や宝珠を使つた『媒介』などがあるけど……

「すんませーん、搔いつまんでおねがいしまーす」もう飽きたと言わんばかりのリホにコリンは払い一つして答えます。

「昔のすげー魔法や」

「あざーす」

「……搔いつまみすぎじやないのか?」

身も蓋ふたもない言い方にメルトファンは呆あきれた御様子です。

「ちよいまち、何がすげーのか、この回答使って説明するわな……」

コリンはそう言つて答案用紙の落書きを一つ
つ区切り始めたのです。

「ちよつと補足するとな、単語の組み合わせ次第
で色んな魔法が使えるんや……この問題は炎の魔
法『ファイアーボール』の術式を書けやけど解答
欄にはローン文字で『炎』『球』『放つ』の三単語で
書かれていると思うんや……たぶん……『放つ』
しか知らんからなんとなくやけど」

「多分とかなんとなくとか随分アバウトつスね」

リホのつぶやきにコリンは「いーい質問やな」
と満面の笑みで食いついてきました。若干うざく
感じ始めるリホですが表情に出ないよう我慢しま
がまん

す。一応上官ですから。

「そのなんとなくがキモなんや！」古代ルーン文字つちゅうのはただ並べるだけじやあかん！発動したい魔法に合わせた雰囲気を醸かもし出して書かないかんのや。これよく見てみい、まるで火の玉が放たれているかのようになつとるやろ」「……なるほど、落書きに見えるのはそういう意メニがあつてのことですのね」

「私の見たものとまるで違うのはそういうことか」セレンとマルトファンが頷くのを見届け、コリンは説明を続けます。

「漫画やら小説やらのタイトルを見てみるとその

雰囲気に合つた字体で描かれているやろ。それと一緒にや。ただ単語だけ知つてもそれをイメージさせる雰囲気とそれ相応の魔力が必要になるんやで」

「逆に単語を知つていてイメージさせる字体で書ければなんでもできると」

「究極はな。たとえば『世界』『滅ぼす』『龍』『召喚』の単語を世界を滅ぼす龍を召喚するかのようなイメージを想起させる字体で書いてな……」

世界を滅ぼす龍……この突飛な例え話に三人は固唾かたずを呑み込んでしまいます。

「この世界を滅ぼせるくらいの魔力を込めねば召

喚できるつちゅうことや」

「——世界を滅ぼせるほどの魔力があるなら別に古代ルーン文字いらなくないですか」

呑み込んだ固唾を返せと言わんばかりにリホガ 辛辣にツツコみます。

「例えばや！ そんな奴おつたらとつくの昔に世界は滅んどるわ！」

一方イーストサイドの魔女の家では、

「もういいこの世界滅ぼす！ ロイドがワシを見

てくれないなんてこんな世界いらない！」

「ちよま！ ルーン文字そんなもんに使わんでく

ださい！　早まりすぎです考えすぎです！」

世界の危機を救う作業が執り行われていました。

「ま、つまりは『古代ルーン文字』は単語と技量と魔力次第で既存の魔法にとらわれないことがで
きるスゴイモノつちゅうこつた。燃費は悪いけど
な」

「コリン大佐は使えるんですか」

その言葉にコリンはバツの悪い顔をしました。

「いやな、使えるつちやー使えるんやけど時間も
かかるし成功率も低いし……普通の魔法唱えたほ
うが楽なんや。隕石を降らせる古代ルーン文字を

見つけたには見つけたんやけど魔力が足りんくて唱えられへん……せつかく研究して復活させたのになあ、しょんぼりやわ」

シヨボーンとするコリンにリホが素朴な疑問を投げかけます。

「なんでわざわざそんな唱えられないもの復活させたんですの？」

「いや、唱えられる候補がおつたんや。魔力に関してはこの国一の人材がな」

メルトファンがやや重い口調でコリンの代わりに答えました。

「今、行方不明の王女。マリア・アザニ様だ」

一方イーストサイドの魔女の家では、

「ぶえつきしょーい！」

「ぎやああ！ 目に！ 目に王女汁が！」

「王女汁って何ですか！ つてすいません！ きっと誰かが噂して！ わざとじゃー！」

「おのれええ！ この世界もろとも消毒じやあああ！」

「やめてええええ！」

世界の危機が加速していました。

「マリア様の魔力量はずば抜けていたのだ、古代

ルーン文字を余裕で扱えるくらいには。そこで我々は来る戦争の日のために、対ジオウ帝国の切り札として隕石のルーン文字を研究していたのだ。もつとも本人が失踪し計画は頓挫とんざしてしまつたがな……今頃どこにいるのやら」

窓の外、遠くの空を見やるマルトファン。実際は近くのイーストサイドの雑貨屋で今現在世界の危機と戦っているとは思いもよらないでしょう。

「とはいえたが、戦争の為にえぐい魔法覚えてくれるかは疑問やけどな」

「この国のがだ、きっと首を縦に振ってくれるに違いない……いや……振らせてみせる」

消え入るようなメルトファンの最後の言葉は周りの人間には聞き取れませんでした。

その横でコリンが何かを思い出したかのように手をパンと叩きます。

「おおそやそや！ 王女様で思い出したけど今年もちやんと候補生たちに伝えといたで」

「……ああ、あれか」

コリンの言葉に少し表情の曇るメルトファン、それをリホは見逃しませんでした。

「あれ？ メルトファン大佐が嫌な顔してますけど」

「おつとあんたら二人にもちやんと伝えとくで、

ほれ」

その質問を遮るようには、コリンが差し出したのは
わら半紙と一枚の写真でした。

わら半紙にはタイプライターで打たれた堅苦しい文面、写真のほうはとても純真そうな十歳くらいいの女の子が笑顔で高価な椅子に座っている画像です。

リホは三白眼を凝らしながら文章のほうに目を通して始めます。そして文章を読み終えた後、意外そうな声を上げました。

「……行方不明の王女様の捜査依頼だあ？」

「そ、写っているのは今尚失踪しているアザミ王いまなお

国の王女、マリア・アザミ様や。五年前の画像や
けどな」

「やんごとなきオーラは感じていたけどよ……いやそれよかなんでそんなでつかい案件ペーぺーのアタシらに出すんですか？」

リホの質問にメルトファンが答えます。

「軍部も長い間彼女の行方を追つているのだがなかなか進展がなくてな……数を打てば当たる……という浅はかな考え方を上が行つているのだよ」

仮頂面のメルトファンですがどこか否定的な感情がにじみ出ていることに対しセレンが質問します。

「メルトファン大佐はあまり乗り気じゃないのですか？」

「ああ、建国祭間近のこの時期、候補生たちの鍊度を早急に上げねばならんのに……しかも毎年毎年報酬目当てで問題起こす奴が一定数いてだな、尻拭いに奔走したり大変なのだ」

報酬と聞きリホの目がキラリと光ります。そしてその項目を感嘆混じりで読み上げます。

「金一封及び昇進や人事の他……可能な限りの要望に応える！ うつそ、なんて破格の報酬！」

リホは読み終えた後、ヒュウと感嘆の口笛を一つ鳴らしました。

コリンが胸を張つて「すごいやろ！」と威張ります。そしてとなりの仏頂面の「なぜお前が威張る」という視線をシカトしながら得意げに説明を続けるのでした。

「せやで。最近捜索のほうもなあなあになつとるしなあ。やる気のある候補生にニンジンぶら下げたほうがなんばかマシつて考え方や。王女様の身に何か起ころる前に保護できるなら安いもんやで」

「最近ジオウ帝国の工作が活発になつてゐる、つて聞きますしねえ。報酬も納得ですね」

合点が言つたりホはいつものニヤケ顔です。頭の中ではロイドの編入に加え金一封とソロバンを

はじき出して いるのでした。

「他の候補生たちも早速意気込んだで。 そういや一人かなり発奮しとつたな、 確かアランやつたかな？」

「入りたての士官候補生たちに頼んだところで焼け石に水だとと思うがな…… そんなことさせるくらいなら筋トレでもやらせたほうが…… セレン・ヘムアエン、 リホ・フラビン、 お前らも話半分で聞いておけ、 ロイドの件は私が色々手を考えてみる」あくまで否定的なメルトファンは上層部に対する嫌味交じりで二人に釘くぎを刺しました。

ですが糠ぬかに釘…… セレンはガタリと椅子を倒し

ながらコリンに近づきます。

「つまり王女様を見つければロイド様を士官学校に編入することも」

「聞こえてないのかセレン・ヘムアエン……」
疲れた声で目頭を押さえるメルトファンを尻目にリホもニヤケ面でコリンに近づくのでした。

「コリン大佐、その話もつと詳しく聞かせてくれ！」

「報酬はどこまでアリなのかとか！」

「リホ・ラビン……お前もか」

「ロイド君の件に加えて金一封、他にお得な副賞が付くつて聞いて我慢できませんよ」

リホは更にロイドに恩を売れたらスマートに事

が運ぶと考えています。乗るしかないこのビッグ
ウェーブにといつた心境です。

「頼むからあまり無茶はするなよ。さつきも言つ
たように尻拭いは面倒だ……ロイドの編入に関し
ては不確定な王女探し以外の手を考えておく」

「あああロイド様のために動ける幸せ！」そして

お礼と称して二人は……あああああ！

「……タノムカラネ」

ゲッソリするメルトファンの隣ではコリンがに
っこりと頷きます。

「ええ意気込みや。王女様が見つかったらあんた
らはウハウハ、ウチはやつと隕石降らせるルーン

文字を実践できてウインウインやね。いやいや正直こんな時間かかるんやつたら最初は花を咲かせるとか雨を降らせるルーン文字とか研究するべきやつたわ……早よ試したいわ」

ワクワクするコリンのふと口にした単語に三人が声を揃えて食いつきます。トリオの芸人が如く、息ぴったりのリアクションです。

「「「雨!?」」

「そそ、それつぽいルーン文字もあつてん……そや、そもそもなんでこんなん答案用紙に古代ルーン文字が……うむむ」

眉間にしわを寄せ唸り出すコリンをよそに三人

は顔を見合わせます。

「メルトファン大佐……これが事実だとしたら口
イド様は合格では？」

「——しかし古代ルーン文字かもしけないなんて
突拍子もないことが通るのは難しいだろう……だ
がこれが事実ならますます手放すわけにはいかな
いな」

一方リホは顔を伏せ口元を一やつかせます。

「……こいつは掘り出し物どころかとんでもねえ
オーパーツだ。雨を確実に降らせる拌み屋なんて
引く手数多^{あまた}で金なんざ濡れ手で粟^{あわ}だぜ……」

メルトファンもまた仏頂面の裏で固い決心をし

ていました。

「ロイド・ベラドンナ……この者が我が軍に入ればこの国の軍事力がより磐石ばんじやくのものになるはず……必ず彼を……」

そしてセレンは――

「ああロイド様……ルーン文字を駆使してまで合格し、私と添い遂げたかつたなんて――」

……好きにしてください。

さてそんなゴタゴタが起きるほんの少し前、ロイドはとすると合格発表の立札に自分の番号が書かれていないと知るやいなや、悲喜交々の輪から

外れ下を向きどこへともなく歩いて行きました。

「わかつていたとはいえ……やつぱこたえるな
⋮⋮」

自分なんかが受かるわけがない、そう思つていたロイドでしたがそれでも心のどこかで期待するものがあつたのでしよう。

しかし、その淡い想いが打ち砕かれ、力ない笑みで下を向いていました。

そんな彼はこのままマリーラの家に帰る気も起きずフラフーラと中央区を歩くのでした。

中央区は軍の施設や軍人の寮や彼ら向けの酒場などの店が軒^{のき}を連ね、奥のほうではその施設に守

られるかのようには王族関係の邸宅^{ていたく}があり、物々しさと華やかさ、相反する二つのコントラストが街行く者の目を引きます。

軍人関係者、士官学校の学生、商人や観光者……街行く人の波に流され、あてもなくふらついたロイドが着いた場所は、

「士官学校のキヤンバスか」

士官候補生が集うキヤンバスです。普通の大学のよう一般開放されているその敷地はところどころベンチがあつて緑も生い茂りのんびり過ごすにはいい場所でしょう。

ただロイドにとつては辛^{つら}い場所です。合格して

いたら自分がそこでゅつくりと友達と一緒に語らつていだかもしれない……そんなタラレバが頭をよぎりまた悲しさがこみ上げてきてしまうからです。

「もう帰ろう……ここにいても悲しいだけだ」

そう踵^{きびす}を返した時でした。色々な告知やイベン^{たぐい}トの類^{たぐい}が貼^はられている掲示板^{ひじばん}……その中にあるやたら男らしい文字に目を奪われます。

「……募集^{めうし}? ……食堂^{じきどう}のアルバイト?」

実際に豪快な字です。下手くそに片足突っ込んでいる領域で男らしい文字です。近づいてじっくり見てみるとそこには「学生食堂アルバイト募集^{めうし}」

と書かれて いるではあります ま せんか。

ロイドはその告知を見て、物思いにふけると決意したかのように歩き出しました。道行く人の波を搔き分け、胸を張り、前を見ています。

「 村のみんなゴメン、もうちよつとだけ、ワガママさせてください」

そしてたどり着いた先は「まさに食堂」といつた出で立ちでした。カフェテリアでもなくフードコートでもなく食堂です。場所が場所でなかつたら立ち飲み屋でもおかしくない雰囲気です。あの豪快なバイト募集の文字も頷ける店構えでした。「定休日……かな？」

店内は静まり返っているようです。確かに今日
は合格発表の日、食堂が休みでもおかしくありません。
せん。ただこれが営業中でもなんら不思議ではな
いでしょう。商売繁盛^{はんじょう}とは無縁な店構えですから。
ロイドが扉に手をかけると簡単に開きました。
どうやら鍵^{かぎ}がかかっていないらしく、誰かいるか
と期待して中へと入ります。

「ごめんください」

足を踏み入れたとたん油ぎつた床がヌルリとロ
イドを歓迎します。外観から容易に想像できる期
待を裏切らない食堂です。
ゆっくりとカウンター越しに奥を覗いてみます

が誰もいません。やつぱ留守だ今日は諦めて帰ろうかと思つた矢先でした。

「誰だ」

恐ろしくドスの効いた声が背後からかけられた刹那、背後から鉄拳てつけんが飛あんできました。

「あ、すいません！ 怪しい者ではつ！」

動搖しながらもロイドは軽々と鉄拳を躲かわします。

かすかに残像が残る俊敏な動きです。本人にとつては大した動きをしたつもりはありませんがその鉄拳を放つた男は目を丸くしています。

「何！」

拳こぶしを突き出した姿のまま立ち尽くしているのは、

やたら四角いガタイの男でした。死線の一つや二つをくぐつていってもおかしくはない風貌……

その男の名は『クロム・モリブデン』。王女のお付で元近衛兵だつた男です。

無論ロイドがそれを知る由よしはありません。ガタイのいいお店の人か何かだと思つていました。

クロム・モリブデン。かつて王家の近衛兵たちを束ねる近衛兵長として職務に追われる日々を送つていました。

彼は理由あつて今現在、食堂の店主という前職とは遠い立場に身を置いているのですがその忠誠

心は失われることがありますでした。

そんな彼が出先から帰つてくると得体の知れない少年が店の中に入りなにやらキヨロキヨロしているではありませんか。

そしてバイトの可能性を募集をしている本人が失念し、あろうことか殴りかかってしまった理由は、この少年から感じる尋常じゃない力でした。

「何だこの男は！」と危険を察知したクロム、躊躇うことなく鉄拳を繰り出しました。が、それを軽々避けたのです。ひと筋の汗が彼の頬を伝います。

クロムは構え直します。角張った体中に押し込

めたかのような筋肉が一層隆起しました。

しかし彼の体は全く動きませんでした。構えたままロイドを、胸中穏やかではないといつた表情で見やっています。

（一体何者だ……この男は！思わず本能で殴りかかるてしまうほどの底知れぬ力！そして相対すると動けなくなるほどの……もさ猛者！）

初手を躊躇されただけで力量が読めてしまふくらい差は歴然としています。いくつもの死線をくぐり抜けた彼だからわかるのです。クロムは頬を伝う汗をそのままに考え出します。

（……狙いは何だ？　元近衛兵の俺から国の情報

でも？）

目の前の少年、ロイドは毒気の抜けた笑みでこちらを見てきます。空恐ろしさすら感じるほど自然な笑みです。

少し探りでも……そう思つてクロムはゆっくりとロイドに話しかけます。

「何か御用で……お客様……」

ロイドは軽く息を整えると落ち着き払った声でゆっくり答えます——先の面接での失敗を生かしながらべく余裕たっぷりに答えようと彼なりに考えていました。悲しいことにこれが余計クロムを勘違いさせることになるのですが……

「いえ、先ほどアルバイトの募集を見てきまして」
クロムは一笑に付します。こんなあからさまな
嘘は……と。

（一瞬驚いたが、すぐさま落ち着きを取り戻し
たか……場慣れしてるな……まあいい何が目的か
……少し話に付き合つてやろう）

クロムは構えを解くことなくジリジリ間を詰め、
あくまで余裕のある雰囲気で話しかけます。

「ほう、それはそれは……ちなみにここは食堂な
んですが、特技は何でしょうか？」

ロイドはしばし考えた後、柔和な笑みとともに
答えます。

「はい、料理と掃除そうじです」

「料理（殺し）と掃除（始末）ね」

「ええ、手前味噌みそですがウチでは一番つて言われていました」

「ウチ（組織）ね」

クロムは曲解しながら「こいつはそう簡単に口を割らんな」と結論付け、腰を落とし臨戦態勢に入りました。入口を背にしている自分のほうが地の利はある。何よりこんな不穏な猛者を野放しにしておくわけにはいかない。元近衛兵の職務魂だましいに火が灯ります。

「では、その腕前を披露していただいても？」

余裕の表情を保ちながら、クロムは不敵に笑いました。間合いをジリジリ詰めてお互い手の届く位置へと相成りました。

「ええ……そちらさえよければ……今すぐにでも」
ロイドもやる気と言わんばかりに袖そでをまくります。
「なら……見せてもらおうじゃねえかツツツ！」

「リゾットでいいですか？」

「あ、ハイ」

クロムの覚悟を決めた「見せてもらおうじゃねえか」が食堂に響いた瞬間、ロイドは颶爽さつそうと厨房ちゅうぼう

に入り普通に料理を始めました。食材を手に取つては「これ使つていいですか？」と何度も聞いてくるのでクロムは次第に構えを解いてカウンター席に座つてしまします。

（なんかフツーに料理しているぞオイ、一体どういうことだ？）

クロムは構えこそ解きましたが警戒は怠りませ
ん。そんな彼にロイドが世間話のように話しかけ
ます。

「実は僕、士官学校の試験に落ちちゃいまして

⋮⋮

「ほう」

嘘だな、とクロムは即座に胸中でつぶやきます。
こんな猛者が落ちるわけがない、と。

「それでですね、村のみんなに盛大に送られてそのまま帰るのも申し訳ないんで……もう少しこの王都で頑張がんばつて来年もう一度試験を受けてみようかと……」

香ばしい香りとともに食欲をそそる音が聞こえてきます。その奥ではロイドが柔和な笑みのまま自分を語っていました。

クロムは眉根を寄せたまま黙つて聞いています。「都會に住んでたら成長するんじゃないかなって考え、田舎者の発想かも知れないんですけどね」

クロムは眉根を寄せたままでですが、ふとあること

が頭をよぎりました。

(あれ？ なんかフツーの田舎の子じゃないか？)
そしてすぐさまその考えを振り払います。

(いかんいかん！ こんなこと考えては相手の思
うツボだ！ あの俊敏な動き！ 只者のばずがな
い！ 警戒を怠るな！)

ぐつと拳に力の入るクロムにロイドが話しけま
す。

「あ、魚捌さばきたいんでナイフ借りますね」
(ツ！ なるほど！ そういうことか！)

このように世間話で相手を油断させた後、魚を

捌くフリをしてナイフで奇襲！

実に狡猾な男

だ！ クロムはそう考えました。

「あの？ いいでしょうか？」

「……ああ」

気がついたことがバレぬよう、静かにクロムは頷きました。

（いいだろう！ 貴様が奇襲をかけた瞬間カウンターをかます！）

「……ああ、やつぱり都会の魚は牙^{きば}も角もないじやないか、ほらみろジーチゃん」

（なんか変なこと言つてゐるが動搖するなクロムツ！ 一拳手一投足に集中するんだ！）

クロムは椅子に座りながらも臨戦態勢を保つのでした。

「そして何の滯りもなく料理は完成しました。

「できました。リゾットです」

「あ、ハイ」

「……」

「……」

「……あの、試食のほうを」

「……え？」

手際よく盛られたトマトの酸味さんみの香る美味おいしそうなリゾットにクロムは動搖します。

(どういうことだ……料理が完成したぞ!)

肩透かしを食らつた顔のクロムにロイドが不安
そうな顔で覗き込みます。

「あの? 何か不手際でも……トマトが苦手だと
か……」

「いやそうではないが……ハツ！」

次の瞬間クロムはなるほどといつた顔つきにな
ります。

(そ、うか!
人間が一番油断するのは飯を食つた
りしている時だ!
こいつはその瞬間を狙つてい
るのだな!)

そう合点のいった顔になるとスプーンを手に取

りリゾットを頬張り始めます。眼光鋭くロイドを見つめたままです。

(いいだろう！ 貴様のその手に敢えて乗つてやろう！ この元王家近衛兵長クロム・モリブデンを甘く見るなよ小僧ツツ！)

— そしてなんの滯りもなく料理を完食しました。

「…………あの」

「…………え？」

ロイドは動搖した表情を隠せません。おそらく

食事の感想が「美味^{うまい}」「マズイ」ではなく「え?」という疑問符だつたからでしょう。

一方クロムも動搖した表情を隠せません。何事もなく完食してしまったからこそそこそこ美味しかつたからです。ついにとうとう彼の頭の中にある可能性が浮かび上がりました。

(……え? 本当にバイトの募集で来た子なの?)

ロイドが顔を覗き込んで不安そうに質問します。

「あの? お口に合わなかつたでしょ? うか?」

「あ、いや、美味^{うまい}かつたよ」

その言葉に「よかつたあ」と純粹に喜んでいる

ロイドに対して完全に警戒心を解いたクロムです。落ち着いた聲音で話しかけます。

「えーとお名前は?」

「あ、すいません! ロイド・ベラドンナと申します!」

丁寧に頭を下げるロイド少年につられクロムも丁寧に頭を下げました。

「あ、どうも。クロム・モリブデンです」

本当にアルバイト募集の子だと全く考えてなかつたクロムはどうしたものかと頭を抱えます。こんな猛者をバイトに雇つていいものか……たとえ裏がなくともこんな危険人物……つーかなんでこ

んな奴落としているんだ、メルトファンは試験に何を要求しているんだ……と。

色んな思いが駆け巡る彼は「とりあえずこんな猛者はほつとけん、自分の監視下に置いておこう」と決意するのでした。

「あーロイド君といつたかな。うん、君を雇うことにするよ」

「あ、ありがとうございます！」

純粹に喜ぶロイドを見てクロムは言葉を付け足します。

「でも住み込みじゃないのでな。君は村から出てきたと言っていたがちゃんと住む場所のアテはある

るのかね？」

「はい！居候いそつわうですが村長のツテで……食費とか

払えれば置いていてもうえると思うのですが」

嘘をついているようには思えず改めて「本当に

バイトなんだな」と思うクロムです。

「そうか、ちなみに場所はどこだい？」

「あ、イーストサイドの雑貨屋です」

ロイドのその発言を聞いてクロムは顎あごに手を当

てました。

(全く……こんなデータラメな子供を平気で預かる
なんて、どんなデータラメな奴だ)

そのデータラメな奴こそが、クロムが探ししている

行方不明の王女、マリアということは今の彼には想像も付かないでしょう。

そして後に、ロイドを介して奇跡の邂逅^{かいこう}を果たすことになることもまた、今の彼が知る由はありませんでした。

一方そのイーストサイドの魔女の家では小一時間ほど「この世界を滅ぼす」と曰うアル力を必死で止めているこの国の王女、マリアこと魔女マリイがいました。

「ああああああロイドおおおおお！」

「やめんかこの口リババア！ バカ師匠！ 今日

も愛くるしいですね！」

「ちよつとなんじや！ 最後無理やり褒めて誤魔化しても最初の暴言は聞き捨てならんぞ！」

こんな調子を小一時間ほど続け、なんとか世界の危機を救つたマリーは王女の威厳など欠片も感じないくらい股をおつぴろげて床に大の字になつて寝つころがりました。

「ハアハア……ちよつとかもしれないつて言つただけじやないですか」

「ロイドはそんな子じやないもん！ 最後は村長

村長つて私の所に戻つてくるんだもん！」

「口調変わつていますよ……全く、そんな目に入

れても痛みすら快感になるほど溺愛できあいしているのなら、なんでこの国に送り出したんですか。正直コ

ンロンの村人は軍じや持て余しますよ」

その言葉を聞いたアルカは真剣な面持ちで答えます。

「……マリーには関係ない。ワシの大願成就じようじゅのためよ」

（あ、絶対しようもないことだ）

マリーの目の前にいるこの女子中等生もどきは、その気になれば国なんてカートン単位で滅ぼせる……地震、雷、火事、アルカと並べても遜色そんしょくのない歩く災害の類たぐいです。そんな彼女に何度も振り回

されていたマリ－は悟つた目をしていります。

「その日の気分で山とか盆地に変えられるような人がこれ以上何を求めるんですか？　そんな余裕あつたらこの国救つてくれませんかね割とマジで」マリ－は何気ないひと言のつもりでしたがアル力は一笑に付すと久々に師匠らしい威厳のある態度で返します。

「マリ－⋮⋮何度も言つたと思うのじやがワシやコンロンの村の人間が手を出すのはあくまで『魔王』や『厄災』といつた人知を超えた時だけじやよ。人間同士のくだらない面子めんづやらなにやらで生じた戦争とか事件には一切手を出しつもりはないのう」

ちなみにさつき色恋沙汰^{ザタ}で世界を滅ぼそうとした人の台詞^{セリフ}です。

「何度も聞きましたよ、そうやつて過ちを犯して反省し後悔し成長することが人間には必要と。そのせいでも滅んでしまつても仕方がないとね……だから私は必死であなたから解呪^{かいじゆ}のルーン文字を会得したんですから」

手に刻まれた無数の傷を見て、自分に言い聞かせるようにマリーは言います。

「で？ 進展のほどはいかがかえ？」 — マリア王女様[』]

「正直厳しいですね……おそらく国王……父は操

られて いるでしょ う。そし て世論を 戰争賛成に 向け るため 裏で色々工 作して いる情 報も 入つ てきま した」

「黒幕が動き出しあつて わけじやな」

「ええ、そしておそらく建国祭……各 国の外交筋 や首脳が来るの で、その時 大々的に宣戦布告をす るのではなかと。そこまでは 摘みましたが……」

ふむ、と頷きアルカは顎に手を当てます。

「肝心の黒幕の正体がわからんとい うわけじやな」

「はい、このまま無理やり城に乗り込んで父を開 放したところで黒幕を捕まえなくてはいざれ同じ ことが起きてしまいます」

マリ一は神妙な顔です。焦燥^{しやうそう}や苛立^{いらだ}ち、それらを出さないよう拳を握り締めています。

「向こうも警戒してるじゃろうし……信頼できる人間は城の中におらんのかえ?」

「私のお付であつたクロム・モリブデンという男がいれば……他の人間は正直どこが黒幕に繋がつてゐるのか見当が付かないので安易に身分はバラせません……そして聞いた話ではクロムも近衛兵をやめてしまつたとか」

「状況は劣勢、時間もない、ここが踏ん張りどころじやな。十五の小娘には荷が重いかの」

あくまで他人事、といつた様子のアルカですが

言葉の端々から気にはかけているのがわかります。

それを感じていて、マリーアは一層、神妙な面持ちです。

「はい。ですので明日からバレるのを恐れて近寄らなかつた中央区のほうに足を運ぼうかと思ひます。正直なりふり構つていられません」

俯きながらも固い決意を示すマリーアにアルカが口を開きます。いえ、自分に言い聞かせるかのようです。

「これが魔王の仕業^{しわざ}や自然発生の厄災とかだつたらワシも手を貸すんじやが、国内の権力争いが発端かも知れないんじや仕方ない……敵の懷に侵入する際は色々気を付けるんじやぞ」

「ご忠告感謝します」

「忠告ついでじゃ、もしロイドをこの件に関わらせたらあの子を村に連れ戻すから」

心のどこかがズキンと痛んだことを悟られぬよう、マリーは深々と頭を下げます。

「……ご忠告感謝します」

「んでついでにお主をカエルに変えて三日ぐらい放置するから。案ずるな遺書は書いてある。ほどよく誤字脱字を織り交ぜた死を決意した際のリアリティ溢れる作品じゃぞ」

「もう忠告でもなんでもないですよね、死の宣告ですよそれ。てか人の遺書を何勝手に作成してい

るんですか！　文書偽造罪ですよ！」

そんな話をしている時でした。入口の扉がやけに重々しく開き、奥からロイドが少し複雑な顔で現れました。まるで捨て猫か捨て犬を拾つてきた子供のような表情です。

「あ、おかえりロイド君ー」

「おつかえりいい！　ロイドオオオ！　お主の大好きなアルカ村長じやよつ！」

アルカはロイドの表情の機微など知つたこつちやないといふ勢いで、思いの丈たけという名の劣情丸出しどで彼にダイブをかまします。

「ただい……つて村長どうしてここに！」

「ほらあ（スリスリ）だつて（スリスリ）大事なロイドの合格発表の日じやろお（モフモフ）すつ飛んでくるさね（ガジガジ）」

「文字通り瞬間移動ですっ飛んできましたよね……大事だつたら噛かむのは止めましょ、よ」

ぶつちやけ合格発表関係なしでここ最近は頻繁に現れではロイドのことを尋ねられ、あげく食料を漁られているのでマリーにとつては倉庫に住み着いたネズミ同然です。

で、天井の柱の如くかじられ歯形を付けたロイドは恥ずかしいとは少し違った表情でうつむきながらゆつくりと話しました。

「あの……ゴメン……落ちちゃつた」

しばし間を置いた後アルカは淡々とルーン文字で術式を展開します。

「そう、じや、この国滅ぼすかの」

「ちょっとご勘弁ください！ 子供も見ているんですよ！」

「……おっと危ない危ない……小糋なジヨークじ

やよお、二割くらい」

「八割はなんですか！」

「純粹な悪意じや」

胃がもたないと言わんばかりとがつくりうなだれるマリーの背中をロイドはさすりながら言葉を

続けます。

「あの……それでね、ちょっとお話があるんだけ
ど……」

マリ一の背中をさすりながらモジモジするロイ
ドを見てアルカはというと。

「…………やはり……女」

真顔でルーン文字を展開し出します。それを見
て胃を押さえながらマリ一が必死に食い止めんと
します。

「勘弁！ マジ勘弁！ 変顔でも土下座どげざでもしま
すから！ 後生だからそれだけはツツツ！」

ちなみに一国の王女の発言です。そしてその突

飛な会話のやりとりが一段落したのを見計らい 口
イドが間にに入ります。

「えつとあのね、ワガママかも知れないんだけど
来年の試験も受けさせてほしいんだ……」

その言葉にアルカはいかにも村長のような威厳
をもつて答えます。

「やつぱりのお、ワシにはすべてわかっていたぞ
口イドや」

「ひでー嘘つきもいたもんだけ……」
しれつとした態度のアルカを忌々しげにマリー
は見つめます。

「それで厚かましいかも知れないんだけど……」

村に帰らずもう少しマリーさんの雑貨屋に住まわせてほしいんだ。もつと都会のことでも知りたいし……このままじや村のみんなに合わせる顔がないよ……ああちやんとお金は払います！　バイトも見つけてきたんですね！」

「——カエツテコナイノカエ？」

「動搖しないでください師匠、すべてわかっていますよね」

放心状態のアルカをよそにロイドはマリーに向き直り深々と頭を下げます。

「お願いしますマリーさん！」

「ん、ま、私は全然いいんだけどどさ」

マリ一はその真摯^{しんし}な態度のロイドに少し頬を染め、まんざらではない顔で答えます。が、すぐさま嫌な予感がしてこめかみを押さえました。

(この口リババアがよからぬことを勘ぐつて猛反対するんじやないか)

アルカのことです。下手したら「恋が芽生える前にお前の命を摘み取る!」と言い出しかねません。すぐさま変顔で土下座の体勢に入り怒りを静めんとするマリ一でしたがアルカは意外にも冷静でした。

「しそうがない……許してあげるかの」

その言葉にロイドはパツと明るい表情になりま

す。そしてマリーは怪訝な表情でボソリと漏らすのでした。

「……明日は隕石降るかもね」

「ん？ 降らせてやるうか？ この国一帯に」

「勘弁してくださいせえ」

颯爽と土下座をするマリーですがアルカは彼女をひよいと持ち上げると部屋の隅へと連れ出して耳元で囁きます。

「と、いうわけじゃ。とつとと事件解決してとつとど王女に戻つてとつとと権威を使つてロイドを士官学校に入学させるのじゃハリー・ハリー」「できたら苦労しません！ てかなんでそこまで

してロイド君を軍人にしてたがるんですか！」

「ワシが聞きたいのはイエスという返事だけじゃが……またちよつとした不幸になる呪いかけられたいのかえ？　それとも久しぶりに力エルにでもしてやろうかの」

「イエス！　イエース！　力エルだけは勘弁してください！」

その無様な姿を見てアルカはにつこりと悪魔の笑みを浮かべました。

「わかつた、じやあちよつとした不幸の呪いのほうで勘弁してやろうかの」

「ちよつとロリババア！　二択だつたなんて聞く

てないわよ！」

アルカはファールに不服なサッカー選手のよう
に詰め寄ろうとするマリーをガン無視です。

「おつとそろそろ仕事の時間じゃ……村の者にど
やされてしまうのでな……ま、ちよくちよく呪い
をかけられたくなかつたら早めに手を打つんじや
な——ロイド！　また来るからの！」

そう言い残し颯爽とクローゼットに入る悪魔の
背を呆然と眺めた後、マリーはため息をついて思
考を巡らせます。

一方許可が下り、嬉^{うれ}しさのあまり新婚さんのご
とく鼻歌を歌いながら台所に立つロイドの姿を眺

め、胃のあたりをさすりながら彼女が考え付いたことは、

「……とりあえず胃薬ね、考えるのはその後にしよう」

自身の胃粘膜の保護でした。薬棚から油紙の包みを取り出すと文句を言いながら開きます。

「ちくしょう……今度変なことしたらあの瞬間移動のゲートになる水晶を井戸にでも沈めてやろうかしら」

ぶつくさ言うマリ一は胃薬を口に放った瞬間、気管支に薬を詰まらせてしまします。

「ブゲホブゲホ！」

そしてむせた勢いで足の小指を机にぶつけてしまい豪快に転んでしました。その転倒音に何

事かと台所のロイドが振り向きます。

「マリーさん？ どうかし……」

ほどなくしてローブの中身を全開にして見せつける痴女の凶ができあがつたのでした。首元までめくれ上がつて大きな胸まで露わにし『お医者さんの聴診器を待つ少女』状態です。

「黒…………み、見てません！」

見てはいけないものを見たようにロイドは動搖し脱兎のごとく部屋に逃げ出します。

「…………」

王女から魔女、そして今現在痴女に成り下がつたマリ一はと、無言でクローゼットの水晶を引っ張り出し何のためらいもなく井戸の底に沈めたのでした。

この後「勢いでやつた、今は反省している」と述懐するハメになることも知らずに……

第四章 たとえば空手漫画で白帯相手に油断する黒帯キヤラのよくな滑稽さ

数日後、窓から朝日が差し、漂うホコリがきらめく軍の講堂に、士官候補生らがずらりと並んでおります。今日は士官候補生たちの入学式のようです。

さて普通の入学式なら壇上の人間の言葉に聞き入る初々^{ういうい}しい候補生たちが見られるはずなのですが……メルトファン大佐が集めた濃ゆい人材のせ

いで初々しさは欠片かけらもありません。「今年は骨が折れるかもしない」と講師陣はぼやいています。

それに加えー

「つまり！この国の軍事力を担う者として！君たちは心も！身も！心も！強くなければならぬ！」

壇上で熱弁を振るうメルトファンの気合の入りようがその心配を加速させているのです。講師陣たちも頑張つて軍に必要な人材に育てようと思つてはいるのですが、いかんせんメルトファンは意識が違います。言うなれば淡々と事務的に話しているのが普通のメルトファンなら今壇上にいるの

は意識高い系メルトファンです。勢い余つて心を二回言うくらいですし。

さて、その曲者の最たる存在、悪名高き『隻腕の女傭兵』ことリホは支給された深緑色の制服に身を包み込んで気だるそうに演説を聞いていました。

彼女は入学式が終わつた昼下がり、先ほど壇上で熱弁を振るつていたメルトファンの元へと駆けつけました。

士官学校の中庭、生徒同士の語らいが聞こえる広場に場違いなほど背筋を伸ばし張り詰めた空気を纏う男に声をかけます。

「よう大将！　景気はどうですか？」

顔見知りに話すような態度をされてもメルトフ

アンは表情を崩さず淡々と窘めます。

「馴れ馴れしくするな……それに私は大将でも中

将でもない、大佐だ」

「へいへい、相変わらず冗談通じないくらい真面目ですね」

「で、何の用だ？」

「いえ、例のロイド君の件、進展はどうかなつて思いまして」

「残念ながら進展はないな……居場所もわからずじまい、故郷に帰つてしまつたかもしけん」

メルトファンは事務的な態度の中に後悔を感じます。

(でかい魚を逃がしたつてところだもんな)
同じくロイドの底知れぬ何かを感じ取つたりホ
です。メルトファンの気持ちが痛いほどわかりま
した。もつとも彼女は自分の懐のためですが。

「で、なぜお前がロイドの件に首を突っ込んでく
るんだ? そう言えばこの前もセレンと一緒に私
についてきていたな……よからぬことでも——」

三白眼さんぱくがんの片目をつぶりウインクしながら舌を小
さく出しました。

「てへ

「「企たくらうんでいるのか」

「いえいえ、この国のためにどうしても彼を士官学校に編入させてあげたいのですハイ」
当然リホの頭の中では彼を利用しひと儲けする
という算段があります。士官候補生として編入させ恩を売り今後の金儲けを円滑にしたいといったところです。

「何にせよ居場所がわからないうにはどうすることもできん。調査待ちといつたところだ」

「それなんですが、例のベルト姫、セレンはロイドとただならぬ関係だそうで、多分居場所ぐらいなら知つていてると思いますよ」

運命の人とまで豪語するセレンです。想い人の居場所くらいは聞いているはずだとリホはそう考えていました。

「どうか、ならセレンに聞けばすぐにでもわかるのだな」

「メルトファンは安堵の声でそう言うと「今セレンはどこにいる」とリホに聞きます。

「今日も入学式終わつたらすつ飛んで行きましたよ。多分ロイドに会いに行つているんじゃないですか? ついわけで居所に関しては心配ないと思いますよ」

「ふむ、では残りの問題は彼をどう上手に編入さ

せるかだな」

「というわけでここは一発、大佐の権力でドカンと！」

「……そんな前例を作つてみろ、これ幸いと上層部の間抜けどもが縁故採用で自分の身内を押し込んでくるぞ……軍部を無能で溢れ返させる気が」

「はあ、そつちもそつちで大変なんですね」

リホは険しい眼差しを向けられ、「当てが外れちやつた」と口ずさみます。

「私は昼飯を食つた後色々と手を打つてみるつもりだ……来るか？」リホ・ラビン

「アラあ？ お誘いでですか？」

「ああ、これから合う奴は知り合いになつて損のない男だ」

メルトファンのなにやら含みのある物言いに歩きながら説明するのでした。

「元近衛兵このえいがやつている士官候補生向きの食堂があつてな、量が多くて値段が安くて味は微妙というリーズナブルな食堂だ」

「一番営業努力すべき部分がダメじゃないですか」

「本人曰く美味いわうますぎるトレーシヨンが食えなくな
るからこのぐらいがいいと言つていたな。あと店
そのものも微妙で薄汚うすぎたなくて床が油でヌルヌルして

いるな。もつぱら学生はこじやれたカフエテリアに行つている」

「営業努力どころか営業できなくなりますよ、保健所からダメ出し食らつて」

「……汚れた場所で平然と飯が食えてこそ一人前の軍人のたまと曰つてたな」

若干足取りの重くなつたりホ。「失敗した」と
思いながらも食堂のほうへと向かつて行きました。
その先には……

「妙だな、いつもはもつと人が少ないのだが」
前評判から想像できないくらいに店は繁盛はんじょうして
いました。二人が中へと足を踏み入れるとその繁

盛つぶりもなげける古風ながら小綺麗な店内です。

「言うほど汚くないですね……こつちがカフェテリアですか？」

「……いや……奴め、リニューアルでもしたのか？」

そんな金などないはずだが

ちようどいいタイミングで空いたカウンター席にリホとメルトファンは並んで座ります。その目の前には無愛想な店主らしき男……クロムがせつせと魚を捌いていました。彼は二人に気がつくと一瞥いちべつだけしてぶつきらぼうに話しかけます。

「メルトファンか……何のようだ？」

「ふむ、食堂に来て言うことか? クロム」

ぶつきらぼうながら、まるで長い友人のようなやりとりです。その流れでメルトファンは「いつもの」とひと言言いました。

「……そつちのは?」

「えつと……じゃ、リゾットを」

厨ちゅう房ぼう^{注文}を受け短く「あいよ」と答えたクロムは厨房の奥へと向かいます。それを見届けた後リホは耳打ちするようによろづファンに話しかけました。

「なあ大佐、あのおっさんも相当な手練てだれじやないですか。ただの元近衛兵じゃないつスよね」

「……まあ、やつは昔、王女のお付で近衛兵長だつた男だ」

「近衛兵長……つてなんでそんな人が食堂なんてやつてるんですか？」

「まあ色々とな……だがいざれ講師として復帰してもらうつもりだ。奴が首を縦に振ればだが……知り合いになつておいて損はないぞ」

その色々に関して問い合わせようとした時、当のクロムが山盛りのリゾットとミートソースのパスタ、そしてクルトンをふんだんに振りまいたサラダを持つてきました。

「お、美味そ^{うまい}じやないですか」

「ほお……少し腕を上げたのかクロム？」

「黙つて食え」

料理を置いた後、クロムは視線を流しに向けたまま皿を洗っています。そんなそつけない店長を前にリホはリゾットを頬張ります。そして口に運んだ瞬間、目を見開きとなりのメルトファンへ顔を向けました。

「嘘つきました？」

「いや」

メルトファンはといういつもの仏頂面で勢いよくパスタをすすつています。時折「おかしい」と口にしながらペロリと平らげたのでした。

「メシ、美味しいじゃないですか」

「ああ」

「しかもコレ相当いいお米ですよ、トマトも安物
じゃないですよきっと」

「ああ」

メルトファンは少し眉根を寄せながら口元を拭ふ
いた後、クロムに話しかけます。

「おい、どういうことだクロム？」 美味いじゃない

いか」

「お前はメシが美味くて文句を言うのか？」

クロムはなおも懸命に皿と格闘しています。普段こんなに食堂が混んだことがないので洗い仕事

が追い付かないのです。納得のいかないメルトフ
アンは少し声を荒らげます。

「あれだけ味付けやら素材やらを気にかけなかつ
たお前が急にどうしたというのだ！　おかげで私
が嘘つき呼ばわりじゃないか！」

言い切ったメルトファンはお茶を飲み干し喉を
潤します。そしてまた声を荒らげるのでした。
「おい！　本当にどうした！　茶まで美味しいでは
ないか！」

「おい

料理が美味しくてケチつけられるという理不尽
の極みとも言えるメルトファンの態度に辟易して
きたクロムは洗い物を中断し、しぶしぶ彼のほう

へと向き直ります。

「どうもこうもあるか！　美味しいメシと美味しい茶！　お前は食堂に何を望んでるんだ！」

「しかもなんだ！　あの油ぎつたヌルヌルの床が見る影もなくピカピカではないか！」

「オマケに綺麗な床にまで文句を言うのか！」　そんなにあのヌルヌルに愛着があつたのか！』

リホはそのやりとりにお茶を飲みながらボソリとツッコミました。

「店長がヌルヌル言つちやだめでしょ……」

呆れた口調にバツが悪くなつたクロムは落ち着きを取り戻し理由を答えました。

「……バイトを雇つたんだよ」

「この無愛想な店長の汚い店にバイトが来たとい
うのか？ 修行僧が解脱げだつしに來たのか？」

「メルトファン……お前にとつてこの食堂はどう
いう位置付けだつたんだ」

精神修養の場所扱いの物言いにクロムは額に手
を当てて困惑していました。そして騒うわさがしいやり
とりを気にかけたのか奥のほうから噂うわさのバイトが
姿を現したのです。

「店長？ どうかしたなんですか？」

件くだんのバイト——ロイドが顔を出した瞬間、
「「ふンブツ」」

メルトファンとリホは美味しいと評価したお茶を仲良く同時に吹き出したのでした。

ロイドがその二人を確認しようとしました瞬間別のテーブルから「すんませーん」と注文を頼む声が届きます。

「あ、はーい」

会釈だけして慌ただしく別のテーブルに注文を取りに向かいました。そして落ち着きを取り戻したメルトファンはカウンターに身を乗り出しクロムに問い合わせます。コリンがこの場にいたら「キャラぶれとるでメルトファン」とダメ出しをするく

らい豪快に身を乗り出していました。はしゃいでいる子供が両膝をカウンターに乗っけている姿を想像してください、アレです。

「おい、どういうことだクロム！ なぜあの男がここにいるんだ？」

「何!? 彼の素性すじようを知つていてるのか、メルトファン！」

「知らん！」

「オイ！」

（何だこの会話……）

リホは紙ナップキンで口元を拭いながらいい年した男同士の珍妙なやりとりに呆れていきました。

「クロム、お前が鈍にぶつてしまつたのか知らないが感じないのか？」

「バカ野郎！ いくら現場から離れたとしてもあの底知れない力をわからんわけがないだろう……正直いつ襲われるかと気を張りながらメシを作るなんざ生まれて初めてだ」

クロムはそう言うと今度はメルトファンに身を乗り出し問い合わせます。

「それこそメルトファン、お前こそ鈍にぶつたのではないか？ あんな猛者もさを試験に落とすとはな」

「……痛いところを突いてくれる」

今度はメルトファンが額ひたいに手を当てる番でした。

「まあとにかくだ、メシ作りもうまい、掃除そうじもかなりできる、雇わん理由がなくてだな……ま、それにはあんな男ほつとけんだろ。最初はどこぞの間者かんじやかと思つたぞ」

「……たとえ間者じやなくとも変な輩やからに利用されではコトだからな。いい判断だく口くム」

メルトファンはそう言うと隣のリホに視線を向けました。軽やかな口笛を吹きながらリホはそっぽを向いています。

「とにかく不穏な動きもなくてここで働きたい動機は来年の試験まで食費を稼ぎたいだそうだ……嘘をついているとは思えんし」

クロムが話をしていると奥のほうからロイドの声が聞こえます。

「てんちょー！ 溜まつたゴミはどこに捨てるんですか？」

「裏を歩いた先のゴミ捨て場だ」

ロイドはハイといい返事をして外へゴミ出しに行きました。

「フツーによく働く、人柄もよく接客も上手……今みたいに気が利くしな」

そう評価するクロムにメルトファンは申し訳なさそうに頭を下げます。

「……すまんがもう少しここで預かってくれ

ないか？ 士官候補生になれるよう色々骨を折つてみる……」

「規律規律のお前がそう言うのも無理はないな……任せておけ、命懸けで預かる」

「……そうか、恩に着る」

そんな二人の会話をリホは怪訝な顔で見つめていました。

(……ここ食堂だよな)

その食堂とは思えない不穏な会話が繰り広げられている時です。妙な喧騒が外から聞こえてきました。

「何だ？ 揉め事か？」

揉も

ゆっくり喧騒に耳を傾けるリホ、道行く人々の会話の中には「喧嘩」や「一触即発」、そして「ベルト姫」なんて単語が端々から聞こえます。

(⋮⋮ベルト姫？　何やつてんだアイツ)

気になつたりホは不穏な会話をしている二人に声をかけ、一緒に喧騒の元へ向かうのでした。

「――どういう意味ですか」

声のほうへ向かうリホ、そこではセレンとアランが言い争いを始めていました。

「――何を考えているのか知らねえけどよお、これ以上地方貴族の悪い噂広げられたら俺おれが困るんで

な」

士官学校の大通りは候補生らや軍人、観光客や物資搬入の業者などで賑わっています。

その往来のど真ん中、喧騒の中心にいる二人を困むように道行く人々が足を止め人垣を作つていました。

「……何？ 忙しいんですけど」

セレンはと、いうとブロンドの髪をなびかせてその隙間から蔑さげすんだ目をアランへと向けています。彼は動じることなく言葉を返します。

「何じゃねえ！ お前街中で人探ししながらやらやたら問題起こしているそ、うじゃねーか」

「ちよっかい出してきたのは相手のほうですわ
……ロイド様を見たと聞き、ついて行くとタダの
下卑げたナシ。パだつたからちよつと痛めつけただけ
です」

芯ハリのある眼差しのまま、ブロンドの美女は毅然きぜん
とした態度で言い放ちます。

「てめえなあ……地方貴族ヒヤウヅクどころか士官候補生の
評判まで落とすつもりか？」

「評判が下がるような大したことはやつていませ
んわ、ただその男の胸毛をすべてむしり取つただ
けですわ」

「大したことあるわ！ ヒリヒリして風呂に入れ

なくなるだろう！」

「「もし何かあつたら今日は腕毛にするから問題ないですわ」

「お前ムダ毛に何か恨みでもあるのか？」生えかげのチクチクは一度気になつたら夜眠れねーんだぞ！」

主旨^{しゅし}がどんどん横道にそれ、ムダ毛の話になりつつありました。セレンはきつい双眸^{そうぼう}を向け一步も引かないといつた態度でアランに詰め寄りました。

「とにかく、私とロイド様の恋路を邪魔するのなら誰であろうと容赦^{ようしゃ}はしませんわ」

その言葉を待つていましたと言わんばかりにアランは口元を歪めます。

「へ、言つたな。これ以上騒ぎを起こして俺の出世に響いたら困るからよ……ちよつと痛い目見てもううぜベルト姫さんよ」

「セレンよ……あなた、そんなに頭頂部をむしられたいのかしら？」

「俺の場合ムダ毛じやねーのかよ！ 結構大事な部分だぞつぺんつて！」

コミカル、かつ剣呑ななんとも言えない不思議な空間ではありましたが。お互いが武器を持った瞬間、空気が一変し緊張感が張り詰めます。

「安心しな……寸止めしてやるからよ」

戦斧を撫でながらアランは不敵な笑みを浮かべます。豪華な装飾の施された両刃の戦斧。もし寸止めできず振りぬいてしまつたら大惨事になるでしょう。

「……どうぞご自由に」

一方セレンは臆することなくレイピアを優雅に構えます。そして形式に従いお互の武器を合わせようとした瞬間でした。

刹那、武器を合わせる素振りも見せず、アランはその巨軀に似合わぬ機敏な動きで瞬く間に懷に潜り込みます。

想像以上のスピードにセレンはたじろぎ対応が遅れてしましました。

「経験不足だなベルト姫！」

「くつ」

セレンに戦斧の刃が付けつけられるその時です。ビュっという音とともにセレンの腰元の呪いのベルトがアランのなぎ払いを止めました。

「は？」

まるで生きているかのような動きをした後シユるシユるとまた腰元にベルトが收まります。

なんとも氣味の悪い動きをする赤いシミの付いたベルトにセレン以外の全員が言葉を失いました。

「オイオイ！ なんだそのベルトは！ 動いたぞ！」

「これはアレですわ！ ロイド様の思し召しですわ！」

「はあ？ 答えになつてねえ！」

「つまりよくあるではありますんか、愛しい人か
らの贈り物を懐に入れていて矢で射られたらその
贈り物に矢が当たり一命を取り留める……」

「いや懐つツーか腰元にあるし、つてか思いつき
り動いたぞ、そのベルト……蛇みてーに」

「つまりこの命はロイド様のもの！ 差し詰めこのベルトは運命の赤い糸！」

血のような赤いシミの付いたベルトを頬ずりする彼女に周囲は戦慄してしました。今日もセレンは仕上がっていますね。

「ち、まあいい」

アランが戦斧を構え直しました。腰を深く落とし眼光には殺氣が宿つていました。

「気味の悪いベルトごと叩つ切れば問題ねえ……手加減しねえぞ」

底冷えするかのようなアランの発言に、周りの野次馬も血を見るかも知れないと感じ取り固唾かたづを呑み込んで二人を見守ります。

ただ一名、この空気をものともしない少年が

ゴミを抱えて現れるまでは……ですが。

「あ、すいませーん。なんか僕の名前が聞こえた
気がしたんですけども」

ふんわりとした聲音こわねのほうを見てみると大量の
ゴミを抱えたロイドがそこに立っていました。

「何だ？ 清掃業者なんて呼んでないぜ」

ロイドはゴミを地面に下ろすと対峙たいじしている二
人を見やります。

「あ、いえ、業者じゃなくてロイド・グラドンナ
と申しますが……」

「ロイド様！」

刹那、一陣の風とともにセレンはロイドの懷へ

とダイブします。全く状況を呑み込めないロイドとアラン、そして野次馬たちはただただポカーンとするだけです。

「ああロイド様！私が絡まれている時にまたも助けてくれるというわけですね！そして二人は運命の——」

一方、セレンからしてみたら探しに探しようやく見つけた意中の人が、自分が強面の男に絡まれていいる時に颯爽と現れたものですから、その思いの丈^{たけ}……ぶつちやけ脳内妄想がダダ漏れです。放つておいたら将来設計を老後まで余すことなく披露しかねないでしょう。

さてその妄想を律儀に聞いていたロイドはこれまた律儀にアランに確認します。

「あの？ 絡んでたんですか？ それで僕が代わ

りに相手になる……と

「あ、いや……えつと」

アランはロイドののんびりした口調とセレンのポンコツっぷりに一気に興^{きよう}が削^そがれひどく冷静になつてきました。

「こいつがロイドとかいうセレンが探していた奴か……どう見ても食堂のバイトだよな」

なんにせよ探し人が見つかったら馬鹿^{ばか}な真似はもうしないだろう……そう思つた彼は手にした戦

斧を收めます。

「あの……」

「あー大丈夫だ。えっとバイト君、候補生とはい
え軍人が一般人に手を出すわけにはいかないので
ね……それにもうこの件は大丈夫だろうしなーお
いベルト姫！　今日は見逃すけどもし次おかしな
ことしたら容赦しないからな！」

「ああロイド様ロイド様ロイド様ー」

「聞いちやいねえし……」

ほどなくしてコリンが騒ぎを聞き大慌てで駆け
つけました。

「ちよつと何してん！　なんやアラン君とセレン

ちやんが喧嘩をおっぱじめるつてみんなゆうとつたで！……つてコレどんな状況？」

ロイドの胸にまだ顔をうずめているセレンを指さしコレ扱いするコリンにアランは姿勢を改め状況を説明します。

「——と、いうわけであります。もう問題は解決したかと」

「はえ——なるほどな……ま、なんにせよ問題起こさんかつたらええわ。にしてもロイド？ どつかで聞いたよくな……なんやつたつけ？」

コリンが自分の記憶をたどつている時でした。遅れて騒ぎを聞きつけたメルトファンたちが野次

馬の中に現れました。人垣が一斉に道を開けます。

「一体何の騒ぎだ」

実際に落ち着き払った威厳のある態度に興味本位で眺めていた、大半は学生の野次馬たちは押し黙つてしまします。かわりに答えるようにはコリンが声を出します。

「おお！ メルトファンやないか！ リホちゃん
と、それに……クロムさん？」

彼女は意外な来訪者に驚きを隠せません。

「どうしたコリン？」

「いやあ搔かいつまんで説明するとやな、アラン君
とセレンちゃんの喧嘩をこのロイドっちゅー子が

止めたんですねわ」

「「ロイド?」」

メルトファンたちが同時に声を出しました。それには呼応したかのように胸に顔をうずめていたセレンが急にこちらを向いて力説を始めます。

「そうですわ! 私を守るために&私の代わりに! この粗野な男そやと戦ってくれるのです!」

「……街で人の胸毛むしり倒していくお前のほう
が粗野だろうに」

呆れるアランですがそのぼやきは二人の耳には入つてきていませんでした。
「何考え込んでるんですか?」

リホの質問にメルトファンは唸りながら答えます。

「リホ・フラビンよ……お前にもわかるだろう。戦場などいくつもの修羅場をくぐってきた人間だから感じるロイドの圧倒的な力……」

何を今更といった顔のリホ、メルトファンは続けます。

「ロイドが戦う……しかしその実力の程をじつかり確認したわけではない……だからこそ見たいとは思わんか？」

その言葉にリホはハッとしました。ロイドはひと目では虫も殺せないほどのやんわりとした少年

で「自分の勘が鈍ったのでは」と思つてしまふくらいです。

「確かに実際に見てみたいつスね……」

金勘定が基本のリホですが、どうやら純粹な好奇心が湧き出でてきたようですね。

「もしアランを完膚かんぷなきまでに倒したら……士官

学校編入への足ががりになるやもしれんな」

メルトファンはそんな打算を漏らしながらアランに近づくと真剣な顔で問いただします。

「本当なんだな？　本当にこのロイドと戦うというのだな？」

アランはかかとを揃そろえ敬礼すると首を横に振り

ました。

「いいえ大佐、問題は解決したようですし……それに自分も軍人の端くれ、何の罪もない一般人に手を出す気にはなりません」

「空氣読め」

「え？」

露骨な態度で模範的回答を示すアランに対し、真剣な面持ち……といふ睨にらみ付けてメルトファンは吐き捨てるよう言いました。なぜ怒られたのか皆目見当付かないアランは口を開けたままです。

「軍人たるもの！ 一般人ぐらいボコボコにでき

ないでどうする！」

野次馬がドン引きするほど過激なメルトファンの発言にコリンがたまらず間にに入ります。

「ちょ、メルトファン！　あんたいつもなら『軍人^がが守るべき相手に手を出すとは何事だ！』なんて言つて修正しまくるやんか！　なんか変やで最近

「…」

「目えそらさんとこつち向かんかい」

自覚があるメルトファンは少しバツが悪そうに黙り込んだ後コリンにそつと耳打ちします。

「…コリン、このロイドという少年は例の『ル

「ン文字」の子だぞ」

「……」

そのことを聞いた彼女はおもむろに野次馬の中
心に歩き出すると、

「レツツ！ ファイト！」

レフリーを買って出ました。実にキレのある動
きで交戦を促すのでした。

一方、翻弄ほんろうされるアランは困惑しきりです。正
論を言つたら空氣読めと言われるわ交戦を促され
るわと涙目になつてます。

（一体どういうことだ……大佐たちはなぜ俺を戦

わせようとするんだ?)

この不可解な流れにアランは答えを探します。

そして出した結論は……

(……つ! そろかつ! カイン家の出身で数あまた多くの大会で優勝した俺の実力が見たいのだな!)

涙が出るくらいポジティブでした。納得した彼はロイドのほうに向き直ると申し訳なさそうに頭を下げます。

「すまんバイト君、俺と戦つてはくれないか

「え? ぼ、僕ですか? 僕弱いですよ」

急なご指名にロイドはタジタジです。アランは

武勲ぶくん

で名を馳は

せたリド

それを受け更に頭を深く下げます。

「そこをなんとか……俺には、認められなきやいけない目的があるんだ。頼む、この通りだ！」

「は、はあ……いや……いいんですけど」

「おお！　ありがとうバイト君！」

そして野次馬から見たらまつたくもつて意味のわからない決闘が始まろうとするのでした。「ありがとう」「いえいえ」といつた譲り合いから始まるがどう」「いえいえ」と軍人と食堂のアルバイトの戦い、全く興味をそそられない対戦カードですが軍でも指折りの実力者メルトファンと魔法のエキスパートであるコリンが瞬きもせず見ているのです。往来に不思議な空

まばた

気が漂つっていました。

（軍で指折りの実力者にこうも注目されているとは！　感無量だ！　ここは俺の実力を余すところなく見せつけないと！）

「気合十分のアランでしたがその両名はどうと、
「……早くしろ」ボソリ

「はよルーン文字見せんかい」ボソリ

身も蓋ふたもありませんでした。そんなことは露知らずアランは物々しく距離をとつては勿体つけて腰元の戦斧を構えます。

「我が名はアラン・トイン・リドカイン！　かの武勲で名を馳せたりドカイン家の長男でー」

誰も求めていない名乗り、口上を挙げ始めます。
実情を知る者から見たら滑稽こつけいの極ごくみでしよう。

口上が終わり、いざ勝負といつ時です。アランはロイドが丸腰であることに気が付きました。

「えつとよろしくお願ねがいします」

「ちよつと待つたバイト君、君もしかして素手か

い？」

「あ、ハイ」

「ふむ……流石に丸腰相手じゃ勝負にもならぬ、誰か武器を——」

そんなアランにコリンがキツく睨のぞみ付けます。
「空氣読まんかい」

「ええ……」

また不可解なダメ出しをくらいいアランはちょっと涙目です。

「……武器なんかいらん、ルーン文字やー」

そんなコリンの思惑などわかるはずもないアランはどうしたものかと悩んでしまいました。

一方そんな中、外野ではリホがこつそりとメルトファンの横に立つて耳打ちします。

「あのーメルトファンさん」

「なんだ？」

「アランの奴……下手したら死ぬんじゃないです

か？」

「いや、大丈夫だろう。ああ見えてもあのアランは様々な武術大会で優勝した強者つわものた。加えて頑強さには定評があつてな」

その会話にクロムも入つてきます。

「それにな嬢ちゃん、あそこにいるコリンは魔法⋮⋮とりわけ回復魔法の達人で、ちよつとした怪我ならすぐ治せるさ」

「そ、うなんスか店長さん⋮⋮あの人ガ」

ちなみにその回復魔法のエキスパートは「はよ戦わんと血を見ることになるでえ」と場の中中央で物騒な発言を連呼しています。どう見ても傷を治

す側ではなく負わせる側の雰囲気でした。

「…………あの人ガ?」

「…………ああ、俺もメルトファンも何度も助けられたさ」

聞かなかつたことにして強引に話を進めるクロムにメルトファンが付け加えます。

「ま、なんにせよ即死でなければ問題ないだろう……そりだな、アランなら無防備な顔面に渾身の一撃さえ食らわなければ大丈夫だろう」

「顔面がトマトピューレにならなきやいいつてことつスね」

さて外野の話がまとつた頃、なにやら思い付いたアランがロイドに提案します。

「よし！　流石にそれじゃハンデが必要だろう！」

「は、ハンデですか」

驚くロイドにアランが頷きます。

「ああ、一方的すぎてもアピールにならない！
ここは……そうだな、先に一発！　顔面を思いつ
きり殴ってくれ！　俺の一番の売りは頑強さん
でな！」

「あ、は、はい……頑張ります」

「おう！　遠慮はいらん！　さあこい！」

「…………メルトファンさん？」

「…………アイツ死んだな」

「おい！ なにボーッとしてるんだ！ 止めるぞ！ 二度とトマト料理が食べられなくなつてもいいのか！」

クロムの声に我に返つた二人は死刑執行を阻止せんと全力で駆け出します。その目の前では今まさにロイドが全力でアランの横っ面をぶん殴ろうとしていました。

「行きます！」

「逝くなつ！」

完熟トマトが裂果するその瞬間でした。アラン

の足元から突如空風が吹き荒れたのです。

「な?」「え? なに?」「きやああ」「あかん!」

土埃つちほこりやらゴミやらスカートやらを巻き上げそこにいる者の視界を遮ります。

もう一度その場を見ると、やがて暴風が収まり、リホやセレンが目を擦り

「消えた?」

ロイドがその場から姿を消していました。一体何事かと周囲は啞然あぜんとしています。

「みぎやあああ! 誰や風魔法なんて唱えたんは! ホック外れてもうたやないか!」

中央にいたコリンは空風をもろに受け、運悪く

タイトスカートのホックが外れずり落ちてしまつたようです。あられもない姿を披露してしまいました。何のとは言いませんが色はベージュだつたと伝えておきましょう。

「コリン？ 今のは？ 敵襲か？」

「そんな大層な魔法やない……ただの風魔法や……ところでメルトファン……見たんか？」

「いやロイド・ベラドンナがどこへ行つたかは見えなかつた……」

慌ててスカートを履き直したコリンはメルトファンの朴念仁^{ぼくねんじん}な発言にご立腹のようです。「そつちやないわ！ ウチのスカートの中身や！

……こんななんやつたら三枚お買い得セツト
の地味なヤツやなくてお気に入り履いてくるべき
やつたわ」

消え入りそうな最後の言葉はメルトファンには
聞こえなかつたようです。そして彼はあろうこと
か突き放すような発言をします。

「そんなものなどどうでもいい。それより——」

力チン。そんな音が聞こえたかと思つたらコリ
ンがドスの効いた聲音で青筋を立てます。

「…………オウコラ、言葉を選べ仏頂面…………そ
いう時は興味がある素振りを見せつつ上手に見た
かつたけど見えませんでしたとオブラートに包み

つつ発言するもんやで」

「ちよつと注文が多くないかコリンよ。いやそれより彼がどこへ行つたかのほうが……」

「いー やこの際はつきり言わせてもらうで！ だいたいアンタはな乙女おとめ心つちゅうのをー」

「ま、待てコリン！ 今の状況を冷静に考えー」

からうじてクロムだけはパンツではなくその影を見ていました。渦中のベージュではなく黒を基調とした魔女らしい服装ととんがり帽子……そして昔、何度も見た少女の横顔……

「王女……？ 王女なのか？」

クロムは騒然とする野次馬を搔き分けるとその

黒い影の消えたほうに一目散に駆け抜けていったのでした。

「おいクロム！ クロつ……クロムさん！ ちよつと待て助けてく……ぬわああ」

メルトファンの断末魔が背後から聞こえました

が、クロムは気にも留めませんでした。

士官学校大通りの外れ、軍事施設の屋根の上で肩で息をしながら脇にロイドを抱えるマリーがいました。

「はあ……あぶなかつた……」

マリーからしたら、情報を得るべく身を潜めな

がら中央区に来たら死刑執行のシーンに出くわしたようなのです。ひと安心したとたん変な汗が体中から吹き出します。

で、一方ロイドはというと、「そっか……僕がボコボコにされるのをマリーさんが守ってくれたんだ」

また大層な勘違いをしていますね。その言葉は小声でボソリと喋しゃべつたのでマリーには届きませんでした。

マリーは抱えたロイドを降ろすと「めつ」といつた姉な表情で彼をたしなめます。「何してるのでロイド君！」危うく死んじゃうとこ

ろだつたのよ！」

あの男が！　と言葉を続けようとした瞬間、ロイドはすごい勢いで頭を下げ謝ります。

「ホントにごめんなさい！　助けてくれてありがとうござります！　マリーさんは命の恩人です！なんでもします！」

一気によく立てた後少し潤んだ瞳でロイドは彼女を見上げます。

ロイドの子犬のような表情といつもの勘違いに一瞬で怒る気が失せたマリーは突き出した人差し指を所在なく動かした後、彼のおでこをツンと小突きます。

「でも弱気なロイド君が決闘ね……どしだの？」

「えっとなんか流れで……僕に何ができるかわからなかつたんですけど……頼まれて」

マリーは「何その曖昧あいまいな決闘理由」と呆れ顔になりました。

「ま、うん。何ができるかわからないけど前に進むつてことは大事よ、うん」

とりあえず適当にまとめたマリー。それをロイドは真撃しんしに受け止めます。

「そ、そうですね。前を向いて進むことが大事ですよね！」

その素直すぎるロイドの笑顔にマリーはほんの

り頬を染めるのでした。

「それと簡単になんでもって言っちゃダメよ。悪い人に騙されちゃうから……私みたいな女にね」

「え？ マリーさんはすごく優しい人じやないですか？」

「……全く

騙されているのは私のほうかも。と考えてしまふくらいロイドの素直な褒め言葉に頬を赤らめるマリーはほんのちよつと意図的に体を密着させながら彼を抱えて屋根から飛び降りました。

ふわりと風魔法による作用で路地裏に着地して辺りを見回します。

「誰もいないわね」

「え？ 誰かいたらまずいんですか？」

「ち、違うわよ！ なんでもするつていうから何かするわけでもなしに！」

人通りの少ない建物の隙間、暗がり、アルカだ
ったら「絶好のシチュエーションじゃ！」と吠え
まくつていたでしょう。

（いやいやいくらなんでも！ なんでもするつて
言つたからつてこんな！ いや逆に実は誘つてる
とか！ 神様の思し召し？ ああ落ち着け私！

王女でしょ！ 今は一人の女の子だろなんて言わ
れたら……つて！）

そんな妄想猛烈たけだけしいマリーの背後から息せき切つて大男が現れました。

「あの……その人」

「ち、違います！ 別に何かやましいことをしようとは！」

拳動不審ここに極まれりな慌てつぶりを見せる彼女でしたが、その視線の先にいる懐かしい顔を見て一気に落ち着きを取り戻します。

「クロ……ム？」

薄暗闇に浮かんだのは四角い体軀たいく、角ばつた顔……似合わぬエプロン姿ではありますがマリーの信頼できる人物、クロム・モリブデン元近衛兵長

がそこにいました。

クロムに気が付いたロイドは彼の前に駆け出し
猛烈に頭を下げるのでした。

「店長！　す、すみません！　ゴミ捨ての途中で
色々あります！」

「え？　店長？」

クロムもマリー……行方不明の王女を見つけ戸
惑いを隠しきれませんでしたがロイドの言葉で我
に返ると咳払いを一つして落ち着きを取り戻しま
す。　「コホン……いや、それはいいんだロイド君。そ
れよりも……やはりマリア様」

聞きなれない名前にロイドが口をはさみます。

「え？ 違いますよ店長、この人はマリーさんといつて僕がお世話になつている方です」

「うん？ マリー？ お世話？」

話が進まないと感じたマリーはロイドの頭をクシャリと撫ななでます。

「ロイド君、そのことは後でいいわ、お仕事の途中でしょ？」

「おおそりだ、店ほつたらかしにしてきたんだ」

マリーとクロムの言葉に「大変だ！ 急いで戻ります！」と言い残しロイドは風のよう而去つて行きました。残った二人はその背を見送った後、

久しぶりの邂逅^{かいこう}を懐かしみます。

「久しぶりねクロム、五年ぶりかしら」

「もうそんなりになりますか……本当によくぞご無事で……このクロム・モリブデン、今日まで身が千切れる思いでした」

四角い体を萎縮^{いしゆく}させ、かしづくクロムにマリーは慌てます。

「ちよつとクロム！ そんな片膝立てたりなんかしないで！ 誰かに見られたらまずいわよ、今まだ私の正体がバレたらまずいんだから」

「正体ですか、それは一体どういう……そういうえばメガネも伊達^{だて}ですね」

「積もる話はあるんだけど、また後で落ち合えな
いかしら？　その時つくり話すわ」

「わかりました。では今日の夜、食堂の裏手でお
会いしましょう」

深々と頭を下げるとクロムは路地を出て行きま
した。

その背中を見届けた後、マリーは大きく息をつ
くと気を引きしめ直しました。

（クロムが早々に見つかったのは嬉しい誤算ね、
ロイド君のおかげだわ……これで一步前進）

かび臭い建物の隙間から覗く王城を見やり、マ
リーは眼差しを一層険しくしました。

(エディーは建国祭の各国首脳会談……それまでに黒幕を見つけ出し父さんを解放する)
王城に向け、傷の付いた手を握り締め突き出します。

(この『解呪』のローンで!)

夜の士官学校キャンパスは暗く静まり返っていました。ところどころ見回りの人間の明かりがゆらゆらと揺れては建物の中へと消えていきます。

しかし食堂だけは閉店しているのに煌々と明かりが灯つていて中から人の話し声が聞こえています。その食堂の裏手では二つの影が話し込んでい

ました。

影の一人は、その角ばつた巨軀に似合わぬエプロンを身に付けたクロム……もう片方はイーストサイドの魔女にしてこの国の失踪^{しつそう}したと言われている王女のマリアア^{こと}マリーでした。

「そうでしたか……王が何者かに操られ、理性を失う前にあなたを逃がし^{つら}したと……さぞお辛かつたでしきうね」

愚^ぐ痴^ち失踪当日の話、今までのこと（おもにアルカのクロムはマリーを労^{いた}わります）を聞いた

「ええ、そしてこの絵を描いた黒幕がはつきりしない以上、迂闊^{うかつ}に動けないわ。お城に乗り込んで

父さんを解放したとしても、いざれ隙を見てまた操られでもしたら……」

そこまで聞いてクロムは食堂の店長に身を落とした経緯を月明かりに照らされたお城を眺めながら語り出します。

「王女が行方不明になつてからというもの、王もその周辺も目に見えて変わりまして……タ力派を重用し戦争をほのめかしたり人前に姿を見せることが減つたり……」

「街の人から聞いたわ。噂は本当だつたのね」

「私はおかしいと思ひ王女を見失つた責任を取る名目で辞職し食堂の店長に身を潜めました。そし

て隠れて王女の行方や王が変わってしまった原因を探つていたのです

「そう、お互い素性^{すじょう}を隠して警戒していただからすれ違つていたのね……」

「巡り合わせてくれたロイド君に感謝ですな」

マリーはそう言わされて、あの殺人未遂現場を思い出しました。

「あー、そうだと思い出した！　てかなんでロイド君を止めなかつたのよクロム！　一生もつ煮と冷やしトマトが食べられなくなるところだつたわよ」

チヨイスが酒のツマミであることをツツコミたくなるところは置いておいて、クロムは申し訳な

さそうに頭を下げました。

「言い返す言葉もございません……あの底知れぬ力の真意を確認したくてつい……」

「確認で人一人死ぬところよ……ま、あの子のやバさを怖いもの見たさで見たくなるのもわからなくもないわね」

「いったい彼は何者なんですか？　なぜあなたと？」

マリ一は薄暗闇をボートと眺めながら答えます。

「コンロンって村のおとぎ話……知つてる？」

「あの……大昔の英雄が世間から離れ静かに暮らしているつてお話ですか？」

マリ一の言うおとぎ話とは、世界の厄災やら魔王やらを人知れず食い止めているコンロンの村のお話で時代の英雄やら高名な学者、武将といつたいざれも耳に覚えのある人物の子孫が奮闘するというトンデモ話です。人の魂の流れ着く山々、その村には伝説の剣やあらゆる攻撃から持ち主を守る魔獣の革が財宝として収められ、トレントに囲まれた集落で川にはキラーピラニアが群れをなすという嘘くさい話をクロムは思いだしていました。

そんな眉唾まゆつばもの物の物語と自分の関係のことを見顔でマリ一は語ります。

「あまり言いたくないのだけどね……コンロンの

村は実在するそうよ……私の師匠がその村の村長ですつて

「本当ですか？」

「私も嘘だと思ったのかつたのだけど……片手間で魔王を跡形もなく消したりちよくちよく瞬間移動したり……言つてバカバカしくなるようなことを何度も体験したわ」

「ワーオ……」

キヤラフに合わないリアクションをしてしまったクロムを横目に更に驚愕きょうがくの事実を付け足します。

「ロイド君はそのコンロンの出身で師匠の身内なのよ」

「ワーオ……」

「しかも私が必死で習得した『解呪』のルーン文字も平然とこなせるし、モンスターを野生動物と思い込んでたり……街に出ているイナゴのモンスター——知つてる？　あれ人知れず倒しているのロイド君よ。『意外に都会つて虫出るんですけどねえ』なんてのほほんと言ひながらよ……いい子だけどやつぱぶつ飛んでるわあの子」

クロムはもうリアクションすら取れなくなりました。

「私から言えるのはそんなもんかしらね。あの子のこと悪用しちゃダメよ」

「そんな恐れ多いことできませんよ、料理と掃除で十分助かつてます」

「このことは絶対秘密よ……色々面倒なの、『人災にはコンロンの人間を利用してはならぬ、天災、もしくは魔王などが関わったとき、手を貸すのはそれぐらいじゃ』なんてことあるごとに言われてきたのよね」

「心中お察しします」

「だからロイド君をこの件に関わらせたらダメよ、あの村に連れ戻されちゃう。あの子の夢も奪つてしまふことになるのだから」

「心中お察しします」

「破つたらカエルにされちやうしね……なつたことある？ カエル？ あれ皮膚^{ひふ}呼吸できないと息苦しいから体表乾くと数分で苦しくなるのよね。私はそれ以来カエル見かけたらお水かけてあげるようになつちやつたわよ……アハハ」

「心中察するに余りあります……」
乾いた笑いをするマリーにクロムはお察ししますとしか言えません。

「とにかくこれから色々手伝つてもらうわよクロム……じゃ、そろそろロイド君が心配するから帰るわね」

その言葉を聞いたクロムはほんのりと目尻を下

げます。妹の幸せを喜ぶ兄のような目です。それ
を察したのか慌ててマリーは言葉を足します。

「ち、違うわ！ 勘違いしないでよね！ と、と
にかくこの件は内緒よ！ もちろんお友達の二人
にも口外厳禁よ！」

「言いませんよ、言つても信じてもらえるかどうか
か……それに連中とは古い付き合いです。そんな
悪用するような輩やからじゃないですよ」

クロムは食堂内の明かりに視線を送るとそうつ
ぶやきました。明るい喧騒が奥のほうから聞こえ
てきます。耳を澄ますとどうやらクロムのことを
呼んでいるようです。

「ほら、そのお友達が呼んでるわよ。んじや私帰るからね」

クロムは暗闇に消えるマリーを見届けた後、食堂の中へと戻っていきます。徐々に大きくなる喧騒の中心……酔っ払ったメルトファンが彼を見つけるやいなやグラス片手に声を張ります。

「遅いぞ！ クロム！ 兵は神速を尊たつとぶというではないか！」

「せやでー！ トイレかー！」

閉店した店内には既すでにできあがつたメルトファンとコリンがいます。何かあつた時、顔なじみの二人は家飲み感覚で閉店したこの食堂を利用し酒

盛りをするのです。

赤かすつかりできあがつたメルトファンは頬を真つ
りに染めあげて普段見せない態度でテーブルに寄
りかかつていました。仲の良い身内にしか見せな
いその醜態はクロムにとつては見慣れたものでし
た。

「……悪かつたな。ほら、燻製肉だ」

無愛想に皿にのせた燻製肉を目の前に出した瞬
間、メルトファンは子供のようにそれを搔つ攫い
一気に口に頬張ります。部下が見たら目をそらし
たくなるくらいはじけています。

「おお！ びみよーな味だ！ これはお前が作っ

たなクロム！」

「……ハイハイ、悪かつたな悪かつたな」
面倒くさそうに相手をするクロムに今度はコリ
ンが絡んできます。

「いやーにしてもクロムさん！ええバイト雇つ
たやないか！さっきの作りおきの料理、店に出
してもおかしくなかつたでえ」

「……ここは店だ、なにもおかしくはなかろうに」「
おつとそやつた！いやーこの前まで閑古鳥かんこどりが

鳴いてたから忘れとつたわ」

「……ハイハイ、悪かつたな悪かつたな」

この調子が深夜まで続くものですからクロムは

酒を飲んでも酔うに酔えません。そんな状況が小一時間ぐらい経った頃、メルトファンが今日一番言いたかつたことを口に出します。

「にしても、あのロイド・ベラドンナがここで働いていたとは……しかも一体何だつたのだ？ 急に突風が吹いたと思つたら一瞬で消えたぞ？」

「……後で聞いたのだが、突風が吹いた瞬間、戦うのが怖くなつて逃げ出したそうだ」

もちろん嘘です。そしてそんなクロムにコリンが疑惑の眼差しと酒臭い息を向けてます。

「ほんまかあ？ 何か隠してへん？ 実はものすごい英雄の子孫か何かで隠された力を見せるのを

ためらつたとかそんなんやないかい?」

(当たらずとも遠からずだな……)

ところどころニアピンなコリンの推察にクロム
は額を押さえます。

「……ベルト姫のセレンは『無益な殺生^{せつしよう}を嫌うロ
イド様ステキです』と言つてたな……しかし惜し
いことをした。彼の実力を確認するいい機会だつ
たのだが」

クロムはコリンの推察をごまかすようメルトフ
アンの言葉に乗つかります。

「そ、そうだぞメルトファン! 下手したらあの
アランという少年は死んでいたぞ」

「……うむ……なにも言い返せん」

「お前が人材確保にやつきになるのもわからんでもないがな」

含みのあるクロムの言い方に顔の赤いコリンが覗き込んできます。

「なんや、何かあつたんか」

琥珀色の酒を口に運びながらメルトファンがその質問に答えました。

「大昔、飢饉ききんがあつてな。私の故郷はジオウの連中に根こそぎ備蓄を奪われたんだ。あの頃もう少し軍に戦力があつたら国境付近の警備も……もう二度とあのようなことは起こさせん」

「ほんであつちやこつちやの札付きに声かけとつ
たんか。んでロイド君にもお熱と……王女様くら
いにしか扱えないルーン文字の研究もその為やつ
たんか」

「ジオウとの戦争でのアドバンテージはいくらくで
もあつたほうがいい。勝つためならやれることは
なんでもするさ……なんでもな」

グイとグラスを傾け中の液体をひと息に流し込
みます。ふうと酒気を帯びた吐息を漏らすメルト
フアンの顔はどこか悲しき氣でした。

アンニュイな雰囲気が酒の席を支配し始めた時、
それを打破しようとしたのかコリンが思い出した

かのように別の話題を振りました。

「そや！ 王女様で思い出したんやけど、最近中
央区でそれつぽい人を見たつて噂があるで！」

「ゲフンっ！ ……そ、そーカ」

ついさっきまでその人物と話していたクロムは
咄嗟に咳込んでしまいました。

動搖する彼をよそに「リンはぐいぐいと話題を
進めています。

「どーもそれで王女様をもう一度本格的に探そう
つて話が拳がつているそ、うやわ」

「建国祭など控えたこんな多忙な時期に人員を割
くのか？」

頬杖ほおづえを突きとろんとした目でメルトファンが毒づきます。

「色々考えがあるようやで。ジオウに王女様がとつ捕まつて人質にされたら敵かなわんし、もしかしたらモンスターが最近出没し始めたのはジオウが王女様を殺すためとか言われてるしな」

「……どうせ戦争反対派が王に対抗するため王女を擁立ようりつしたいからだろ、う……無駄なことを」

ぶつくさ文句を言うメルトファンにコリンは嘆息しながら続けます。

「はあ……あと実はモンスターを王女様が陰で退治しているなんて噂もあるで。まあこれはホント

にただの噂やで——」

「ゲツツフン！」

思いつきり咳込むクロムにメルトファンは半目で嘆きます。

「風邪か？ 鈍っているのではないか？」

「そ、そうかもな……」

無論、彼が咳込んでいるのは体調不良ではなくその人物がロイドだと知っているからです。しかもモンスターと思わず目に付いた害虫を善意で駆除しているだけというのですから。その為街の人との間では『見返りを求めない英雄』として噂が行き交っているといふことも。

一方渋い顔のメルトファンは手酌^{てじやく}でグラスに酒を注ぎ直すと口にしながら本音を漏らしていきます。

「とにかく今は建国祭、そしてジオウとの戦争に備えるべきだ。王女の安否など二の次だ……もつともマリア王女がルーン文字を駆使してジオウとの戦いで先陣を切ってくれるのなら話は別だがな」「……言いすぎだメルトファン、王女にその手を汚せというのか」

クロムの苦言に彼は声を上げて反論します。酒の勢いもあつていつもの事務的な態度は遙か彼方につつ飛んでいました。

「そもそもジオウにここまで好き放題やられてい
たのは弱腰だつた王家の失態だ！　あの飢饉もど
こぞの村が大量の小麦を支援してくれてようやく
収まつたのだぞ！　汚名をそそぐ機会を得られて
むしろ幸運というべきだ！」

「口が過ぎるぞメルトファン！」

「クロムっ！　お前にも言いたいことがある！

お前ほどの男が、王女が失踪した責任を取つて食
堂の店長になぞ！　いつまでこんなことを続ける
のだ？」

「いいだろう……自分で決めたことなのだ」

「私はな……お前に士官候補生たちの指導者にな

つてほしいと思つてゐる。早く戻つてこいよ、ジオウとの戦争はもう遠からず来る」

何か思うところありといつた感じで言葉を漏らすメルトファンをクロムはたしなめます。

「メルトファン……飲みすぎだ」

「もう飲まんほうがええでメルトファン。こつちもすっかり酔いがさめてもうたわ……あんま戦争だのなんだの考えんほうがええで、あんた傷付いたらウチ泣くからな」

メルトファンは少し思うところがあるかのようにな沈んだ顔つきになります。それを見たコリンは「吐くなら外でな」と背中をさするのでした。

「……大丈夫だコリン……騒いですまんなクロム」
コリンに肩を借り、夜の闇に消えていくメルト
ファン。その後悔をにじませた背中を見てクロム
は何か引っかかるものを感じたのでした。

士官学校の朝は早く、まずはすべての基本とな
る走り込みなどの体力作りから始まります。それ
は魔術師志願者や後方支援志願者でも例外ではな
く同じメニューをこなしていきます。

「人の命を守るには自らの命も守れなければなら
ない、その為にはまず体力ありきだ」

それがメルトファンの口癖くちぐせで入学初日から今日

に至るまで、授業のある日は毎日毎日候補生たち
は走り込みを行つてきました。

ただ、いつもは険しい表情の生徒たちですが今
日はどことなく緩んでいるようになります。

「ふう……走った走った。さつて今日はあとホー
ムルームだけやつてオシマイだぜ……んでおとち
よつとでお祭りだ、三日間はぐーたらできるぜ」

土埃舞う軍事施設周辺のあぜ道で、だるそうに
完走したりホガ口にしたように今日は半日で上が
りです。みんなの表情が柔らかなのほそのためで
しそう。

へそが出るのもお構いなしにシャツの腹部で顔

の汗を拭ふく。リホ。その横でセレンは対照的に丁寧にタオルで汗を拭き取っています。育ちの違いがよく出ていますね。

「……ふう、でも当分授業がないからといつても、ちゃんと警備のお仕事があるんですからね」

「ずっとつてわけじゃないだろ、交代制で数時間見回つてあとは自由時間！ 実質連休！」

口元をにんまり歪め、リホは笑いました。

そう、建国祭というアザミ王国のお祭りが間近に迫つているのです。生徒たちには警備という任務が与えられていますが訓練や座学と比べたら実質休みみたいなものです。リホをはじめクラスの

大半の気が緩んでいるのも頷けます。

朝のメニューをこなした生徒たちは軽い足取りで講義室に向かいました。そしてホームルームでイベント警備のルートや時間などを確認し、さあお開きだとなつた時です。

「みんな、聞いてくれ」

壇上のマルトファンが神妙な面持ちで、まるで警告するかのように話します。

「いいか、この建国祭には各国の外交筋の人間や上役の人々が来賓らいひんとして招かれる。加えて連日多くの観光客で賑わうこととなるだろう、万に一つでも賊ぞくの犯罪を見逃すわけにはいかないのはわか

るな？」

いつものように事務的な口調ではありますけれどなく重たい聲音です。空氣を感じ取つた生徒の緩んでいた空氣が一変しました。それを見届けた彼は二、三頷いた後続けます。

「君たちの中にはいつか来るかも知れぬ戦争を見据え、この国を守るために私の勧誘で入学試験を受けてもらつた者もいる。無論そうでない者もいるが、私はみな等しくこの国を守る一人前の軍人になつてほしい……そう願つていることを忘れないで此度の警備にあたつてくれ」

まるでスピーチのようにメルトファンは語り続

けていました。そして自分が少し感情的になつていることに気が付き軽く咳払いをして続けます。

「こほん……すまない。とにかくこの国の軍人として誇りを持つて職務にあたってくれ。警備の時に入用になる腕章や祭りの進行表、地図といつたものは各自の机の上に配布してある。あとで確認してくれ」

そんならしくないメルトファンを見てリホがセレンに小声で耳打ちします。

「メルトファンの旦那だんな、何かあつたのかね？」

「プライベートなことを詮索せんさくするのはよくないですわよリホさん……さてそれよりもどのよう口

イド様をお祭りに誘おうかしら……いえ、まず口
イド様のお祭り当日のスケジュールを把握して進
行表と照らし合わせませんと……」

「プライベートつて言葉を辞書で引いてこい……」
ストーカー脳ここに極まりなセレンに寒気す
ら感じるリホでした。

その様子に気が付いたのかメルトファンが注意
します。

「リホ・フラビン。何を喋っている、私語は慎め。
それとも貴様は走り足りなくて体力が有り余つて
いるとアピールしているのか?」

外周のおかわりなぞ死んでも遠慮すると言わん

ばかりに嫌そうな顔をしたりホは咄嗟^{とつさ}に言い繕いました。

「いえ、当日の警備の打ち合わせをセレン嬢と相談していたのですハイ……な、セレン嬢？」

口裏合わせてくれと言わんばかりの目配せをしますが空気の読めなさではセレンは想像をはるかに超える代物です。

「なにかしら暴動を起こしてその混乱の隙に人気のないところへ……」

「お前らは何の打ち合わせをしていたんだ」

片眉^{いぶ}を上げ、訝^{いぶか}しげな聲音のメルトファン、声にならない声を上げリホは頭を抱えました。

「つたく勘弁してくれセレン嬢……マルトファン大佐の機嫌が悪かつたことくらいわかるだろ」

こつてり絞られたりホはげつそりした顔つきでセレンを睨みます。講義室の机に寄りかかりながら半目で覗き込むその視線の先のセレンはというと……

「ああそんなロイド様！　ダメですわ！」

「仕上がつてました。

「……常時変なお前に聞くアタシがバカだつたよ」

苦笑いのリホを意に介さずセレンは妄想を続行

しています。

「もうロイド様ーお昼ご飯はさつき食べたばつかりじやないですか」

「え？ もう老後まで妄想進んでんの？」

「妄想ではありますん！ イメトレです！ 今后のことをシミュレーションすることで様々な状況に対応できるようになるのですわ」

サッカー選手のごとくイメトレを贊美するセレン、人としてレッドードものとは欠片かけらも気が付いていないのが恋のフリークリガンたる所以でしょう。

「イメトレが大事なら想像つくだろ！ 今日のメ

ルトファンの旦那だんなを怒らせたらどうなるか！ つ
たく一体どうしたんだ旦那はよお」

その二人のそばにアランが近づき会話に入ります。

「決まつてんじゃねーか、そんなこともわからな
いのかお前らは」

「……盗み聞きとはなんていい趣味、気が合うな
アランさんよ」

「銭ぜにゲバ女傭兵と一緒にくたにすんな……で、本当
にわからないのか？」

あくまで高圧的な態度のアランにちよつと力チ
ンときたりホは慄懾無礼に聞き返します。

「それはそれは、是非ともご教授願いたいですね」

「たぶん例の王女探しの進展がよくないんだろ。」

建国祭も近く、一刻も早く王女を見つけたい！

だから機嫌が悪かつたんだ。これはなんとしても

見つけねば」

「……旦那がねえ、違うと思うけどよ」

あの時メルトファンは言葉の端々から王女探しに乗り気じやない空気を醸し出していました。それが引っかかり続けていたリホでした。

「おつと、こんなことをしている暇なんてないな、そろそろ街に向かわんと」

「何だ結局あんたも王女探しに躍起^{やつき}かよ……出世

出世つて、どつちが銭ゲバだか」

「あいにく金のために出世したいんじゃないんだ。俺が解決するから今のうち諦めて祭りの時どんなスイーツ食べるか女の子らしく相談でもしてたほうが建設的だぜ」

そう言つて襟えりを正し去つていこうとするアランの背中にリホは悪態を投げかけます。

「へ、そつちもモンスターのスイーツにならねーよう気に付けるんだな」

「……っ！」

アランは一瞬ビクリとしますが無言で去つて行きました。

「なんだ？　あいつも大概変だよな」

「そんなことよりそろそろ王女探しを再開しませんと」

席を立つセレンをリホが制止します。

「そろそろ闇雲に探す以外に何か考えたほうがいいんじゃないかな？」

策はあるのか？

「大丈夫ですわ、今回はちゃんと毛をむしるのを控えますから」

「むしらないのは大前提だと思うんだが……策でもなんでもねえし」

リホは武闘派すぎる相棒に辟易します。いつもならこんな面倒な人物突き放していますが一応件

のロイドを利用するためのキーパーソンです。根気よく相手を尊重しつつ会話を続けようとします。もはや接客業ですね。

「気持ちはわかるけどよ……あたりを駆けずり回つても土地感のないアタシらじや大した情報は得られない、もう先輩方は何年も探してるんだからな」

「確かに……またあてもなく彷徨さまよつても無駄足かもしれませんわね」

「そこでだ……最近知つたんだけど魔女のマリ一つて人がいて、なんでも情報も取り扱つてるらしいんだよ。準備できたら明日にでもそこ行つて

みようぜ。王女様見つけてあのアランの鼻を明かしてやろうぜ」

「わかりましたわ、案内してくださいませ」

セレンは納得した御様子です。

それを受け、リホは指で小さなわつかを作り、いい笑顔で歯を見せるのでした。

「オッケー、その代わり情報料の支払いよろしく」
一切悪びれない彼女にセレンは苦笑するしかありません。

「ちやつかりと……やつぱ銭ゲバですわね」

イーストサイドの暖かな屋下がり。

猥雜わいざつ

さと

淫靡^{いんび}さに満ち溢れる印象の強いこの区も、今の時
間帯はとても穏やかです。

それこそ大通りに關してはノースサイドなどに
引けを取らないくらい活気に溢れています。下手
な路地に入らない限り比較的安全なのですが、並
んでいる品物は物騒極まりないものもあり、更に
は握力の強めの客引きやらお金を見る試食……ま
あとどのつまり『ぼつたくり』も散見されます。

「……思つた以上に活気がありますが……ところ
どころ胡散^{うさん}くさいお店がありますわね」

占いから軍の型落ち品の横流し、幻の珍味やら
珍品、そういった類の店が軒を連ねる中にイース

トサイドの魔女の雑貨屋がありました。

坂道に建てられた年季の入った家屋、申し訳程度の看板、何を入れていいかよくわからない色みの薬ツボ、一見して雑貨屋どころか店とも思えない：：：そんな店構えにセレンが言葉を漏らします。

「とても商売をやっている雰囲気ではありませんわね：：：よくこんな場所で情報売つているなんてわかりましたわね」

「アタシも最近知ったんだ。色んなところに顔出して顔なじみになつたら教わつてね：：：これから当分お世話になる国なんだからコネ作つとくのは大事だぜお嬢様」

「ふうん……見た印象と違つて根回しが大事なのですね傭兵は」

「自由業の最たるものだからな……逆にセレンは大難把すぎ
るんだよ。軍人だつて一緒さ。下手に敵は作らないほうがな
にかと得だぜ、もつと後先考えないじよ。『友達』どじて忠
告しとくぜ」

その言葉に、セレンは腰元に束ねてある『呪い
のベルト』を握り締めます。

「……後先考える必要なんて今までなかつたので」
急に重苦しくなつた空気を察し、リホは素直に
謝りました。

「ああ悪い。つてかまだ持つてんのかその呪いの

ベルト？ 大丈夫なのか？」

「ええ……今では私とロイド様を繋ぐ大事な赤い糸ですから……この前も私の命を助けてくれましたし」

「…………こんな禍々まがまがしい赤い糸もそうそうないな……なんかやばいオーラ放つてるし」

馴れ初め話が始まりそうだと察したりホガ足早に店内へと入ろうとしたその時でした。

「お休みですわね」

申し訳程度の看板にこれまた申し訳程度に「本日休業日」と書かれた札が下がつていました。

「いや、窓から湯気が出てる。中に人がいるな」

リホの示す先には窓から料理か何かの湯気が漂い、ほんのりいい香りとともに鼻腔^{びこう}をくすぐります。

「……せつかここまで来ましたし、時間もあまりあります。お話だけでもしてみましょう」

セレンはそう言うとためらうことなくノックをしました。その音に気が付いたのかやがてバタバタと小走りした音が近づいてきます。

程なくしてさび付いた蝶番^{テバ}の音とともに扉が開き、妙に馴染みのある顔が現れました。

「すいません。今日マリーさん出かけててお休みなんですよ……あれ？」

「「へ？」」

魔女の店から現れたのが素つ頓狂な顔をした口
イドだったので二人は面食らい固まってしまった
した。

「ささ、どうぞどうぞおかげください」

さて、そんな思考が固まつた二人はとうと口
イドに促されるまま中へと招かれました。彼は古
書の積んであるテーブル席を手早く片付けるとお
茶を淹れに台所に向かいます。

徐々に落ち着きを取り戻したりホは「ふう」と
一息つきました。

「まさかロイドが魔女のところに住んでるなんて思わなかつたな……あのなセレン嬢、いくら恋人のことだからつてそれくらい教えてくれよ、『友達』だろ？ 別に取つて食つたりしないからさ……つたく心臓に悪いぜ」

リホが悪態とともに隣に顔を向けると。
「……まさかロイド様が魔女とまさかそんな同居まさかそんな」

もつと心臓に悪い顔をした形相のセレンがそこにいました。心ここにあらず、この世の終わり、ソース焼きそばのお湯切り失敗、といつた顔つきです。

「……」

そろそろリホが自分の見通しと確認の甘さに後悔をすることとなります。「運命の人」と豪語し、ただならぬ関係と吹聴している割には色々とロイドについて知らないことが多すぎるとセレンに恐る恐る確認します。

「あのさ……セレンさんよお……確認したいことがあるんだけどさ……ロイドがここにいるって知らなかつたの？」

「　　ハ　い」

動搖全開のうわづつた返事が返つてきました。「じやあ、お前とロイドの関係つて本当はなんな

ん？」

「——もちろん相思相愛！　運命の人！　運命の赤い糸でがんじがらめに巻き付けたあと溶接して突つ張り棒で補強したかの様な関係性ですわ」

どんな耐震工事だよとツツコミたくなるリホでしたが、それをぐつとこらえ、ベテラン刑事の如く、精神科医の如く流されないようには淡々と問い合わせています。

「それはあなたの頭の中だけではありますか？
相思相愛のロイド様は実在しないのです」

「そんなことはありません！　忘れもしません！
あれは一か月前のことです！」

「あ、そんな妄想ノロケ話いりませーん。質問に答えてくださいーい」

「聞きなさい！ あれは私とロイド様が初めて出会つたー！」

「だからそんな妄想は……え？ 初めて？」

「はい、初めてお会いしたのは一か月前のことです。その時ーー」

一か月前、それは試験の前後、つまり……と、リホの中である結論^{はんちゅう}が導き出されました。

(ほほ顔見知りの範疇^{はんちゅう}じゃないか！)

それを相思相愛と言つてはばからないセレンの思い込みにリホは頭を抱えてしまします。ガチつ

と義手がこめかみに食い込んでしまいましたが気にしてはいられません。

（なんとなく見えてきた！　ロイドのとんでもない力で呪いのベルトの封印が解けたか何かで、それで初めて見たものを親と思うコガモのような心境でロイドを運命の人だと思い込み今に至るわけだな！　ロイドを利用するためにはセレン嬢に近づいたけど全くの無駄じやねーか！）

そんな二人の前に渦中のロイドがお茶を淹れて戻つてきました。テーブルにこぼさぬようゆつくりとカップを置きながら彼は質問します。

「ごめんなさいね、今日マリーサン留守でして

……えつと何か御用ですか?」

「そのマリーとやらの命をもういにー」

目に光の宿つてないセレンをリホは思いつきり
制止します。

「ややこしくなるから止めてくれ! いえねロイド……さ
ん、ちょっと情報が欲しかったんだ」

セレンがほぼ他人と知るやいなや、現状この化
余よ物そに對して命の保証はどこにもないリホは一気に
余所余所しくなりました。

制止を振り解きセレンは一気にロイドとの距離
を詰めます。ちょっと身じろぐ彼の態度にリホは
「勇気あるなお前……」とボソリ。

セレンはリホの言葉もロイドの機微も意に介さず声を大にします。

「ロイド様！　まだ士官学校に入りたいとお思いですか？」

「あ、はい。今年はダメだつたけど来年またー」

セレンはズイツとロイドへ近寄ります。

「そんなあなたに！　あなたのセレンが！」朗報

を持つて馳せ参じました！

「ろ、ろうほう？」

息のかかる距離で手なんか取つたりするセレン。ほぼ密着しているといつていいでしよう。

「はい！　今街で行方不明の王女様らしき人物が

目撃されていることはご存知ですか？」

「あ、はい。噂では」

近すぎて物理的にも精神的にも喋り辛づらそうなロイド。「お怒りを買う前に」とリホは割つて入ります。セレンは若干むくれていますが気にしてはいるれません。次の瞬間、肉塊にくかいになつてもおかしくないですから。

「本当か？」ロイド……さん

「はい。でもこれといつた手がかりは残念ながら……ごめんなさい」

申し訳ない、というロイドの顔を見てリホは慌ててフオローします。

「そつすか！ 気にしなくっていいっすよ！」 謝

「んなくたつていいっすよ！」

「あ、はい……ああ、あとそんな畏かしこまらなくていい

いですよりホさん、たぶん同じ年ですよね」「すんませんした！ あ、じやない！ ゴメンね！ ロイドッ！ 命だけは助ける！」

馴れ馴れしさを絞り出した謝罪という珍妙な態度のリホにロイドは柔和な笑みで対応します。そこに今度はセレンが割つて入りました。

「その昔失踪した王女様が敵国に政治利用されることがモンスターに殺されることを恐れ最悪の事態が起きる前に身柄を確保したいそうですね。うま

くいけば報酬として士官学校に編入できるかもつて話ですわ」

「なるほど……こんな弱い僕でも軍人になれるチヤンスなんですね」

何を仰おつしやるロイドさん、と思ひながらリホは三白眼で彼を見つめます。

（この期に及んで自分が弱いなんて言い張るのか⋮⋮相手を油断させるための擬態ぎたいつての？徹底

してやがるぜ）

空恐ろしささえ感じるロイドの徹底つぱり（笑）に戦慄するリホでした。

「で、ロイドさ……はもう何匹モンスター屠ほふつて

るんだ」

「あはは、リホさんはやつぱ面白いなあ。倒すは疎か遭遇してもいないですよ。あ、そうそう、でも虫は増えたなーなんて思います。暖かくなつたからですかね。最近はなんか四メートルくらいのおつきなイナゴが湧いてますね。追い払うと灰になつちやいますけど」

(それモンスター　あああ！)

リホはセレンのほうを向いて「お前もなんとか言つてくれ」と言わんばかりの表情で目配せしますが、

「まあ、都會には珍しい虫がいるんですね」

(だからモンスターだつての！ ツツコミ足りねえ！)

セレンにとつては白も赤も山吹色も鈍色もロイドが黒と言つたら黒なのです。変わらずのほほんとしているロイドとセレンを睨みながら彼女は頭の中であ絶叫しました。

「モンスターはもつと大きく、三階建ての家屋ぐらいになりますし、すぐ気が付きますよ。第二形態、第三形態と姿を変えるのが主流ですしー」

やがて聞くのが怖くなつたりホは胃痛を感じながらへたりこんでしまいます。

「も、いいですイナゴで……イナゴ万歳、イナゴ

「フォーエバーです」

一方セレンは恋する乙女の濁つた目でロイドを見つめます。

「というわけでっ！ とりあえず親睦を深めるために近くの宿屋へ参りましょう！ そして早く編入して私と一緒に寮に入りましょう！」

「色々落ち着け！ 色々だ！ アタシの胃がもたない！」

ほつといたら一緒に墓に入りましょうと言いかねないセレンと、モンスターをただの虫と言い張るロイド……ポンコツと人外じんがいを相手にするリホは胃のあたりをさすり考えます。

(イナゴ追つ払つてたねえ……おつそろしいな才
イ、モンスターをモンスターと思つていないなん
てよお、胃だけじやねえ頭も痛くなつてきやがつ
た)

その時、腹部をさすつているリホに気が付いた
ロイドは棚から何かを取り出すと彼女の前に差し
出します。

「あ、これどうぞ」

「何でしきう……あ、いえ、何だいこれ？」

油紙に包まれた中身は生薬の香る粉が入つてい
ました。リホはそれを胃薬と察するとロイドに問
いかけます。

「……いいのか？」ちらつちやつてさ
その問いに、いつもの柔和な笑みを携えて口イ
ドは即答します。

「ハイ！ だつて友達じゃないですか」

「…………あん？ 友達？」

その友達という単語にリホは怪訝な表情をしました。元々彼女は傭兵であり付き合う人間は基本
ギブアンドテイク、便宜べんぎを図つてもらうということはあ
つても無償で何かをもらうことは今まで一
度もありません。ましてや試験会場で一度会つた
きりの自分に……そう考える彼女は色々と考え込
んでしまいます。

(友達つてことはアタシに利用価値があると踏ん
だ……一体なんだ？ 戦闘面は足元にも及ばない
し……まさか体目当て？)

彼女の友達の定義がギブアンドテイク、つまり
体という発想に至るのでした。

(こんな貧相な三白眼の義手女に……いや、まで！
そういうや最初話しかけられたよな、義手力ツコ
いいですか？？まさかそういう性的嗜好しこう？ 貧
乳好きか！)

そう思つたりホはちらりとロイドを見やると、
彼は包みを開かず固まるリホの顔を心配そうに覗
き込んでいるではありませんか。

（……そう考えてみると貧乳好きそうな顔に見え
てきた）

どんな顔だと小一時間問い合わせたいですね。
さあ、その裏のない慈愛に満ちた表情にリホは
そう考え始めました。まあ人間追いつめられると
正常な思考回路が飛んでいくことはよくあります
し。

（まさかこんな貧相な自分の体がアタシを救つ
てくれるとは！　ありがとうこんな体に生んだ両
親！　ありがとう貧乳の神様！）

さらにとんでもない偶像崇拜すら行い始める次
第でした。まあ人間追い詰められたら以下略。

そんな信者が無駄に結束の固そうな事案の塊の宗教を
信仰し始めるリホに対し、貧乳好き（笑）な顔を覗き込
ませロイドは心配します。

「ほ、ほんとに大丈夫ですか？」

「あ、ああ、大丈夫だ。今ちよつと両親と貧乳の
神様に感謝を捧げていたところだ。両方とも会つ
たことないけどな」

貧乳の神様という謎フレーズに若干引っかかる
ロイドですが、もう一つ気になる点を彼は聞いて
きました。

「ひん……あ、いえ。両親に会つたことないつ
て？」

「ああ、アタシ孤児なんだ」

しれつと言うリホに對して申し訳なさそうにロイドが頭を下げました。

「そ、そうですかすいません。変なこと聞いて」「あーいいのいいの。もう気にしてねー生きるので精一杯だからさ」

そんな気に留めてない彼女を見てロイドは心底よかつたといつた表情です。

「よかつた……でもなんとなくわかりましたリホさんにはシンパシー感じてたのが」

「うん？」

シンパシーという単語にリホは聞き返します。

ロイドは照れくさそうに答えました。

「あ、僕も両親いないんですよ。一緒にですね。それで故郷の村の人たちに拾われて育ちました」「……そ、そうなのかな？」

ロイドの表情に嘘はついていないのだろうと感じたりホは所在なげに頭を搔き始めました。

そしてすぐに自戒します。

(いやいやいや騙されるなりホ・フラビン！)白分と同じ境遇だつて言つて親近感を誘うのは詐欺じょうどうの常套手段だろう！ そうやつて簡単に人を信じてどうなつたか忘れたのか！)

無自覚痛。感覚のない義手の指先がズキリと痛

みます。

（冷静に考えろ、この小悪魔じみた無垢な笑顔、あどけない聲音、ぎゅっと抱きしめたくなる小動物的な体軀！　いきなり友達と言つて懐に入り込んでくる可愛らしさ！　すべて相手を油断させる擬態だ！　何よりこんな貧乳が好きそうな表情なんて一朝一夕でできやしない！）

疑心暗鬼に苛まれたりホは慎重に言葉を選んで対応します。とりあえず断つたら後が怖いと思い胃薬を受け取るに至りました。

「ありがとうございます！」本当にありがとうございます！」
五臓六腑に染みわたらせます！」

卒業証書を受け取るよう腰をくの字に曲げて両手で胃薬を受け取ります。その大仰な姿勢にロイドは勘違いをします。

「そんなに胃薬欲しかったんですね？」じゃあもつと持つてきますね。その薬、マリーさんお手製の胃薬だからよく効きますよ。ちょっと奥の部屋から取つてきます」

いそいそとロイドは奥の部屋へと向かいました。どつと汗の出るリホは椅子に全身を預け12ラウンド戦つたボクサーのように燃え尽きました。（……つたく……こんな化物と住んでる情報屋つてのは一体どんな面してるんだ……いやとにかく

情報引き出して逃げ出して……ロイド君編入させ
て恩を売つて……いや、触らぬ神に祟りなし、報
酬は自分のために使うのがベストか?)
すべての計画が頓挫(とんざ)したりホは今後の身の振り
方を思案しながら情報屋が来るのを待つことにし
ました。

しばらくするとリクエストに応えたかのように
マリーが帰つてきました。黒のローブとどんがり
帽子、高価そうなブローチに加えオリエンタルな
装飾で雰囲気たっぷり、ひと目で魔女という出で
立ちの女性です。

しかしその口から出る言葉は魔女というよりも、
は仕事帰りの女性会社員のような軽口でした。

「いやーまいつたまいつた全く成果なし。ま、そ
んな日もあるわねーっと。でもいいわ、今日もロ
イド君の作ってくれた料理が私を待ってるんだも
の。そんでこの前買つたエールを氷魔法でキンキ
ンに冷やして……くう！ 真昼間まつぴるまからエールなん
て魔女最高ーうん？」

……失礼、仕事帰りのおっさんですね。しかし
彼女が意気揚々と店に戻ると、そこには閉店中に
もかかわらず妙な来客が二名、椅子に座っていた
のですから目を丸くしてしまいます。

奥のほう、胸元の空いた色っぽい三白眼の瘦身女性は軽く会釈をします。そちらはいいのですが問題は手前に座る端正な顔立ちのブロンズ女性でした。

「スマセントジヤマシテマス」

「ブロンドの女性……セレンは無機質にそう言うと「クチイ」という音とともに無理やり口角を上げました。目は笑っています。むしろ淀よどんだ深い闇を携えています。

「え、あ、はい……」

えも言われぬ圧と底知れぬ闇に、マリーは家主なのに居心地が悪くなります。

「立ち話もなんですし……ドウゾオカケニナツテ
クダサイ」

立ちすぐむマリーに座るよう促すセレン、本当にどつちが家主かわからぬい状態です。

「あ、すいません」

全くもつて現状がよくわからぬいマリーはすごすごと椅子に座ろうとしました。

コキコキコキコキ……

マリーの動きに合わせセレンの首が機械のよう

に音立てて動きます。マリーは思わず短い悲鳴

を上げてしましました。

(え？ 私何かした？ 完全にターゲットロック
オンされている？)

身に覚えのない殺意か何かにマリーは「まさか、
偶然そう動いただけよね」と思い、試しに体を左
右に動かしてみます。

スッスッ
コキコキ

セレンの首がマリーの動きを完全にトレースし
ています。

（……いやいや！ 私なんにも恨まれるようなことしてないわよ！ これは何かの間違いよ！ たまたま私の動きに、たまたま首が左右に動いただけ！）

もう一度、偶然であることを願いながら、今度は全力で何度も体を左右に動かしてみます。

スツスツスツスツス……

「何なさつているんですか？ 早くお座りください

「あ、はい」

妙な動きをたしなめられマリーは即座に席に座ります。悪ふざけして怒^{ぬぐ}られている生徒よろしく、彼女が手汗をローブで拭いながら妙な空気にいたまれなくなつていていた。

「あ、マリーサンお帰りなさい」

ようやく知つた人間、ロイドが自室から現れます。「ロイド君！ た、ただいま！」

マイホームなのにアウエーの空気を感じまくつていったマリーはその見慣れた純朴な少年の登場につい嬉しくなつて駆け寄ろうとしました。

「座つてください」

「あ、はい」

そしてなぜか一層深くなるブロンズ女性の間に
マリーは怯え、俊敏に椅子に座ります。

妙な間が支配する空間、気を利かせたロイドは
共通の友人として二人の紹介を始めました。

「あ、こちらのほうは友達のリホさんとセレンさ
んです」

「えーとリホです」

リホは控えめに会釈します。マリーに対し值踏
みするような視線ですが……それより気になるの
はもう片方です。

「ドウモ、『友達』のセレンです」

セレンは友達と言われ乾いた聲音で自己紹介し

ました。こちらは值踏みどころか闇を抱えた視線です。

彼女の敵意や闇に疑問を抱きながら、マリーも自己紹介します。

「ど、どうもマリーです。イーストサイドの魔女なんて呼ばれています」

「なるほど、マリーさん death（死）ね」

「はいマリーです。セレンさん」

「そしてイーストサイドの魔女と呼ばれているの
death（死）ね」

「あのセレンさん、ちよくちよく『です』が別の意味に聞こえるんですけど、『死ね』的な意味の

に」

口元を歪めセレンは否定します。

「それは気のせいだと思ひますわ……」

「あ、そうですよね……気のせいですよね」

「ところで魔女裁判はいつ頃のご予定ですか？」

（気のせいじゃないつ！　はつきりわかつた！）

完全に殺意剥^むき出しだ！　え？　なんで？　もし

かして昼間から酒飲むのが逆鱗^{げきりん}に触れたの？）

困惑するマリーを見て話が進まないと感じたり
ホはセレンを制して仕切り直します。

「はいはい、そこまでだセレン嬢。あのな魔女さん、
アタシたちは上からの依頼で人探しをしていてさ、

ちよつとばかり情報を買いたいんですよ」

マリーはそう言わると徐々に落ち着きを取り戻していきます。

（上？ 情報？ そういうえば……）

セレンの闇に気圧されて気がつきませんでした
が、よくよく奥のリホを見ると着崩していますが
立派な士官候補生の軍服を着ています。そしてな
んで気が付かなかつたんだろうと思ふくらい無骨
で大きな義手が目に飛び込んできます。

「女傭兵のリホ・フラビンさんと……もしかして

呪いのベルト姫のセレン・ヘムアエンさん？」

「へえ、アタシらのフルネーム知つてんのか」

「このくらい情報屋じゃなくても知っているわ。メルトファ
ン大佐に声をかけられた子たちよね」

「そこまで知ってるなら情報屋として期待できそ
うだな」

リホと会話をしているうちに徐々に彼女の魔女
らしい仕草が戻つてきました。ほんのり仰々しい
仕事用のマリーになつていきます。

「色々気になる点はあるけれども、お客様なら話
が早いわ。ウチのロイド君の友達でもあるようだ
し……いいわ、用事も終わつたし今日は営業再開。
特別に導いてあげるわ」

「マジか！ ついてるぜ！」

リホの喜びをたしなめるかのようにもリホはいつも口上を述べ始めます。

「ただし、古来より魔女とは望みに応じた相応の対価を求めるものよ。この言葉を聞いてもなお求める情報は何かしら……後悔のないようにな」

「お、わかってるじゃないか。古来より情報料つてのはネタの活き次第で上下するつてもんだよな。ますます期待が持てるねえ」

「あ、うん」

魔女の脅し文句が交渉上手な情報屋の謳い文句みたいな扱いをされ、でも褒められているからなんも言えないといった複雑な表情のマリーにリホ

は胸元から一枚の写真を取り出します。

そこには幼き頃の王女——つまり十歳前後のマリーが描かれていました。

「この人を探してるんだけど」

「……」

マリーの顔から複雑な表情すら吹っ飛びました。

「あるのは『無』だけです。

「あの？ 魔女さん？」

「やっぱ今日は店じまいで」

無表情のまま逃げようとするマリーにリホは食つてかかります。

「ちよっとオイ！ なんだ勿体もつたいつけて特別云々言

つてただろうが」

「きょ、今日はあれよ！　いいネタが仕入れられなかつたのよ！　だから都合につき臨時休業なの！　気分がのらないの！」

頑固親父のラーメン屋の「今日のスープはイマイチだから店開けない」レベルの無茶な言い訳を押し通そうとするマリー、魔女らしい仕草は速攻消し飛びました。

そして彼女は見苦しさ満点の言い訳の後、すべてを理解し頭を抱えたのでした。

（わかつた！　このセレンって子がガン見してるのが！　完全にバレてるんだ！　そんでもつて最

近戦争を起こそうとしている王家の政治に憤りが
積もりに積もつて殺意になつてゐるのね！　しかも
国が大変なのに昼間つからエールをあおろうとし
てるんだもの！　（キレるわそりやー！）

無論セレンの脳内は政治スペース皆無で、ぎつ
しり薄皮あんぱんのアンコの如くロイドへの甘い
想いが詰まつています。

そしてリホの訝しげな視線を意に介さずマリー
は逡巡していました。

（流石に建国祭の前に……×デーを迎える前にバ
レるわけにはいかないわ！　まだ例の黒幕がはつ
きりわかつていないうのに！　自分の存在が

バレてしまつては！）

「そんな言い訳が通用……あのーマリーさん？」

呼びかけにも答えずマリーは逡巡しています。

（全力でごまかすしかない！　希望は捨てない！
私ならできる！　あの口リババアのもとで辛抱
してきたあの頃に比べたら……）

「もしもーし。いきなり頭抱えてどうしたんだ魔
女さんよお」

「大丈夫よ女傭兵さん、希望はまだ捨ててないか
ら」

「希望……まあいいや……とりあえず情報持つて
るかどうかくらいは教えてくださいよ」

マリーはメガネを直し息を整えると精一杯冷静な顔で答えます。

「残念ながら行方不明の王女の情報は扱っていないわ」

「……王女なんてひと言も言つてないんスけど」

希望は一瞬で雲散霧消しました。

机に顔を突っ伏すマリー、何かに感づいたりは軽く「ふーん」と唸ります。

そこにセレンが割つて入りました。

「まあリホさん、知らないって言つているならしようがないですわ」

「ちよ、セレン嬢……こんな露骨に——」

次の瞬間ギリギリと歯ぎしりしながらマリーを睨め付け始めます。血涙でも流さん勢いです。

「それよりも、私、マリーさんのことが非常に気になりますの。マリーさんの今の生活、家庭の事情とか……ホンニシノクチカラジキジキニ」

(バレてる！ 絶対に王女つてバレてる！ 家庭

の事情とか気になつてるもん！)

圧倒的な闇の圧力に一瞬でマリーの背筋が伸びました。そして気力を振り絞りなんとかごまかそ
うと手を揉み始めます。

「あ、あたしあじがないイーストサイドの魔女でゲス。そ

れ以上でもそれ以下でもないでゲス」

「いきなり露骨に語尾を変えましたよね……何か心当たりでも？　それとも……」

狼狽うろたえるマリーを横目にリホはニヤリ。

「もしかしてご本人様だとか？」

その時横からロイドが写真を覗き込み柔和な笑みで会話に入つてきました。

「うーん……似てるかもしだれませんが……この人、王女様なんですよね」

「あ、ああ。行方不明の王女様だ」

写真をまじまじと見つめるロイド、しかし納得いかないといつた表情です。

「言われてみたら似てるかも……でもマリーサン
が王女だなんて僕には思えないですよ」

「あらロイド君、私がそんなにガサツつてこと?
まったくもう失礼ねつ」

マリーは口でたしなめながら笑顔で両手の親指
を立てています。

「言葉と表情があつてないツスよ」

リホのツツコミの後ロイドはさらに続けます。

「ふふ、この前なんか酔つ払つて台所とお風呂間
違えそうになつてローブ脱ごうとしちゃうし、う
ちの村長に全力で土下座したり頻繁にコーヒーを
口や鼻から吹いたりしてるし……顔拭いてあげた

り掃除とか洗濯が大変なんですよ、そんな人が王女だなんて

「そ、そーよ、こんな私が王女だなんて」

「涙目ツスよ」

「……」
色々王女どころか女性らしからぬ悲しいエピソードトーグが繰り広げられましたが――

その話を聞けば聞くほどセレンの闇は深くなつていきました。彼女からしてみれば甘い生活のノロケ話を想い人の口からガツツリ聞かされたようなものです。

「随分と楽しい生活を送つてらつしやるようで

……ちなみに（ロイド様と）ここに住んで何年ですか？」

マリーの耳にはその言葉が「王家のくせに何年遊び呆^{ほう}けているんだ」という言葉に聞こえ、申し訳なさそうに答えます。

「に、二年です」

「二年！ 二年も！ そんな（新婚のよくなラブラブ）生活を！」

深い闇のようなセレンの目から涙が浮かび始め、これらえきれず台所へと飛び出していきました。その悲しげな表情にマリーはいたたまれない気持ちになります。

(「そうよね、行方不明になつて五年くらい、ここに住んで二年、民衆からしたら戦争を望む王家の間がのうのうとしているようなものだもんね……失望もあるわ……とても国想いの子なんでしょうね）

当然セレンはロイドに実害がなければ王政の失態なぞファミレスの店員のオーダーミス程度にしか思つていませんが。

さて、その様子眺めているリホは会話が噛み合つていなきことに気が付いていました。そして台所で顔を洗つているセレンに聞こえないようマリーに質問します。

「で、ロイド君はいつからここにご厄介になつて
んですか？」

「えっと軍の試験前……一ヶ月半くらいい……」

「やつぱそんな感じか……どういうご関係で？」

「甥^{おい}っ子みたいなもので……私の師匠^{ししょう}のお孫さん
のような……」

「甥……ありがとうございます」

リホはそれだけ聞くとロイドは本当に何も知ら
ないんだなと察します。ちょうどその会話が終わ
った頃にセレンは目を腫^はらしながら戻つてきまし
た。

「憎いです。あなたのことが……でも、はつきり

とあなたの口から本当のことを見たいんですの
⋮⋮正直にお答えください」

セレンの覚悟が伝わったのか、マリーも本当の
ことを打ち明けようと覚悟を決めました。

（民の声に正直に答える⋮⋮そして本当のことを
言えればあと数日黙つてもうえれば⋮⋮）

「お茶ウマイ」

一方リホはこの茶番早く終わんねーかなと思つ
ています。ロイドもよくわからずきよとんとして
いるだけです。

「わかつたわ、嘘偽りなく正直に答えます⋮⋮」

今までにない静謐^{せいひつ}な雰囲気を纏い出すマリー、

それに何かを感じるのか胸元をギュッと握り締め
セレンは眼差しを向けます。

「あなたは——」

「そう私は——」

「——ロイド様のお嫁さんですか？」

「おうじ——オウ？」

なんとも言えない空気が部屋中に漂いました。

外の喧騒だけがその場に流れます。

「あのセレンさん？ 何言つてるとかよくわから
ないのだけど？」

「このタイミングでとぼけるとはなんてドロボー猫つ！ 正直に話すと言つておきながら！ 私に謝るなら今のうちですわ！ そしてロイド様！」

「私は過ちを犯すなら今のうちですわ！」

「もはやなりふり構わぬセレンです。胸元のボタンをものすごい勢いで外していきます。

「さらっと何言つてんだセレン嬢！」

「略奪愛（笑）を実行せんと脱衣に勤^{いそ}しむセレンをリホが制します。その傍^{かたわ}らでロイドが小首をかしげました。

「え？ あやま？ エ？」

「あー聞き流してください！ なんでもあります

ん！」

「そうですか？　あ、そうだ！　お茶温め直して
きますね」

話が長引きそうと察したロイドは気を利かせ台所へと向かいました。大事な話をしている夫に気を使つて席を外す妻のような振る舞いのソレです。その背を見送った後、リホはセレンを慣れたようにな諭します。

「あのなあセレン嬢、この人はロイドの親戚みたいなもんだ」

「なんてこと！　親戚同士で！」

「違う違う、つまりここはロイドにとつて上京先

で厄介になつてゐる親戚の家だ

「でも二年つて」

「それはこのマリーさんがここに住んで二年だ！
ロイドは一か月前からだ！」

「でも！ それでも三十回以上もチャンスがあつ
て何もないなんて！」

「何のチャンスだ！」

「だつたらなんで自己紹介の時に過ちは犯してい
ませんと言つてくれなかつたんですか？」

「言うが！ お前だつて『どうもロイド様と一線を超えて

ないセレンです』つて言わないだろ」

リホの怒濤の説得にようやくセレンが落ち着き

始めました。

「そうですわね、一線を超えていたら『どうも口
イド様と一線超えた女、セレンです』って言いま
すもんね」

「うん、社会的も一線超えてるけどな、その自己
紹介」

徐々にセレンの目に光が戻ってきます。そして
彼女は申し訳なさそうにマリーに向くと精一杯の
謝罪をしました。

「誤解してしまい申し訳ありませんでした」

「あ、いやこちらこそ……なんかごめんね。
たいなもんだから、あの子」

甥おいみ

そして和解した二人は「フフフ」と笑い合います。
そしてその横でリホも「フフフ」といやらしい笑
みを浮かべてマリーの肩に手を乗せます。もう片
方の手で例の写真をヒラヒラさせながら……
「で、本題なんスけど、この人知つてますう？」
「……」

墓穴を掘るまで泳がせたりホ、墓穴を掘り倒し
てしまつたマリー、勝敗は決してしました。

「さつき『おうじ』まで言いましたよね。あと一
文字言つちゃつてもいいんじゃないですか？」
「……もしよろしかつたら手がかりだけでもいい
んですの」

セレンの真剣な（闇を携えていない）眼差しに
何かあるなどマリーは考えます。

「上の指示とはいえ、なんでもそこまで必死のかじり？ よ
かつたらわけを聞かせてちようだい」

「それを報告したらロイド様が士官学校に編入で
きるんです」

マリーはリホのほうを向きます。彼女は無言で
頷きました。

「嘘ではないのね……いい友達を持ったもんだわ」
「もちろん私は友達の枠にとどまるつもりなんて
毛頭ないですわ」

マリーが色んな意味でどうしたものかと考え出

したその時です。

「おじやましまーす！ 魔女いるか！」

入口からやけに横柄なチンピラが二人、ノックもせずに現れました。二人とも転んで怪我したよう肩や手に包帯を巻き付けています。

そう、ひと月前ロイドをカツアゲしようとして逆に返り討ちにあつたあのチンピラです。と言つても当の本人はケガを負わせたなんて欠片も思つていませんが。

マリーは怪訝な顔で対応します。

「薬を買いに来た……つて感じじゃないわね」

「あん？ いるじゃねーのよ！」

だつたら休業の

看板なんて出してんじゃないっての」

チンピラに聞こえるようにリホはマリーに話しかけます。

「薬なんて買うわけないじゃないですからさ
ん、バカに付ける薬はないんですから」

嘲笑^{ちようしょう}を向けられたチンピラは一瞬で激高^{しゃくこう}しますが、後ろの舍弟^{らしき}が兄貴^{きょうき}分を抑えます。

「兄貴！ 兄貴！ こいつアレですぜ！」 惡名高^{あくみょう}

い女傭兵のリホですぜ！ やべえ奴です」

「ああ！ だからどうしたつてんだ！」

「それにその横は……あの呪いのベルト姫ですぜ、サウスサイドやノースサイドで人探しと言ひなが

ら男のムダ毛をむしり取るつて噂の」

「ああ！ だからどうしたってんだ！ 逆に興奮

するわ！」

「俺もです兄貴！ 逆にやべえ奴ツス」

「な、セレン嬢、聞き込みの際はフツー毛をむし
らねーんだ、あーいうのがいるから」

「肝きもに銘めいじますわ」

なんともずれた会話にマリーは戸惑っています。
がチンピラはお構いなしにまくし立てます。
「とにかくよお情報もらいたいに来たんだよ！」

そしてチンピラは懐から一枚の写真を取り出します。そこには—

「「「え？」」

三人は驚きました。なぜならリホの手にあるものと全く同じ写真だつたからです。

チンピラもそのリホの手にある同じ物を見て、どうやら察したようです。

「へ、てめえらも奴から王女探しの依頼を受けたんだな。こいつは好都合だ！　お前らの知つてる分も洗いざらい喋つてもうつからな！」

どんどん盛り上がる兄貴分を舍弟が必死に抑えます。

「兄貴！ 無茶ですって！ 僕たちまだ完全に怪我治つてませんし！」

弱気な舍弟を兄貴分は叱咤しつたします。

「バツキヤロー！ 何ビビつてんだよ！ 僕たちはもつとヤベー奴に喧嘩けんか売つて生きてたじゃねーか！ 忘れたのかあの時のことをよー！」

「忘れねえっす！」

「ああ、あれはとんでもなかつた。恐ろしい奴だつた。人に怪我を負わせることをなんとも思つてないような顔だつた。忘れねえよ！ 恐怖つて一周すると神秘になるんだな！ 最初は何かと思つたぜあの感情はよー！」

「俺の肩も一周以上しましたしね……」

「でも生きてます！　俺たち！　生きてるんで

す！　つまりなにも怖くない！」

勝手に盛り上がるチンピラを前にして、マリーは劇団員の小芝居を見ている錯覚に陥ります。

ひとしきり盛り上がった後彼らは三人に向き直ると戦闘態勢に。

あくどい顔で懐からナイフを取り出しぴりびりとじり寄つて來るのでした。

「というわけだ、俺らはもう『あの子供』以外は怖くねえんだ！　はつきり聞き取りやすい口調で喋りやがれ！」

「そうだ！　おとなしく王女の情報を聞いてもい
ないのにベラベラ喋りやがれええ！」

その決意の雄叫びに誘われて、台所から『あの
子供』がお茶を温め直して現れました。

「あれ？　またお客様さんですか？」

ズサアアアアアアア

それはもう見事な土下座だつたそうです。

部屋の隅の板の間に、正座でチンピラが固まつ
ている姿を、お茶をすすりながら、セレンらは眺
めています。そんなセンスの欠片もないオブジェ
にリホが話しかけます。

「で、なんでお前らチンピラ風情が王女を探して
るんだ？ 奴つて何よ？」

「依頼をつ！ 顔を隠した男からつ！ 受けまし
たつ！」

「なんでもいいつ！ 見つけ次第、連れてこい！
死体でも構わないとつ！」

今度は聞いてもいないのに舍弟のほうから不穏
な単語が飛び出してセレンは顔色を変えます。

「死体でも……ですの？」

「はいっ！ 確かにつ！ それにそれだけじゃナ

いつす！」

「俺たち聞いたまつたんですつ！ 依頼を受けた直後つ！ 依頼人の独り言をつ！」

そしてチンピラたちはベラベラとその時の様子を小芝居を交えながら語り出しました。

「今王女に復帰されては困る、万全のため手は打つておかねば……」

その言葉を聞いてマリーの顔色が変わります。椅子から飛び上がりチンピラに詰め寄ります。

「他には何も言わなかつたの？ 見覚えのある男？ なんでもいいから気が付いたことを教えてちょうだい！」

「他には……うわごとのようと同じ言葉を繰り返してましたっ」

チンピラが「セーの」で声を揃えて言います。

「この国の平和のために」

「……それつて」

リホとセレンが言葉を失っている間、マリーはチンピラに帰るよう促します。

何度も何度も頭を下げながら出ていくチンピラを見送った後、言葉を失っている二人に向き直りました。

「今のチンピラに王女を殺してもかまわない」と依頼した奴に心当たりがあるのね」

「まあ……でもよアタシらは保護目的で依頼受け
てんだ。殺すなんて毛色が違いすぎる」
リホは焦りの表情を隠そうとしません。それは
セレンも同じでした。

狼狽える両名の前でマリーは顎に手を当て頭の中を整理するよう^{ひとりご}に独り言ちます。

「おそらくそいつが戦争を引き起こそうとしている張本人か……殺しても構わないのは王様を操つてている今、戦争反対派の象徴として利用させないため……開戦かいなか、事態は拮抗^{きつこう}しているようね……これはチャンスというべきか」

不穏な単語がつらつらと口から漏れるマリーに

他の人間は呆氣あつけにとられます。

「戦争反対派？　話が全く見えないんだけどよ　お

⋮⋮

「申し訳ないんだけどその人物を教えてほしいの。
是ぜが非ガフでも教えてもらうわ」

有無ウムを言わさぬ、その態度に気圧スルされながら
ホは負けじと顔を近づけます。

「つたく……人に物頼むんだつたらまず自分が何
なのかなはつきり言つてくださいよ」

「薄々うすうす気が付いているでしょ女傭兵さん……私の
正体」

リング中央のような睨み合いの中、場にそぐわ

ぬ弱気な声が二人にかけられます。

先ほどまで黙っていたロイドがおもむろに口を開いたのでした。

「ごめんなさいマリーさん。僕もマリーさんの正体に薄々気が付いていました」

「ロイド君？」

「もしやと思つていたんですが……今まで確証がなくて言い出せなかつたんです。マリーさん、いえー」

どことなく恐れ多いといつた態度のロイドにマリーは戦慄します。

(……まさかロイド君にも私が王女つて気付

かれた？）

写真に王女探し、そして戦争の話。この一連の流れではバレてしまつても致し方なし、頭でそう考えるマリーですが腹をくぐれないといました。

理由は単純です。この関係を保ちたい……身分がバレることでロイドの接し方が変わってしまうことが嫌なだけです。

「…………あのねロイド君」

身分の差はあれど今まで通りに接してほしい。そう告げようとしたマリーは——

「この国の英雄……救世主マリーさん」

「ダレソレ」

—斜め上の謎の単語に白目を剥きました。

予想外すぎて感情の乗らない片言のマリーに対し「ごまかさないでください」とロイドは一蹴し自身の迷推理を披露し始めた。

「隠さないでもわかるんです。大工さんもイーストサイドの救世主つて言つていましたしちゃ……」

（棟梁つ！ ややこしいことを！ コンチクシヨウ！）

頭の中に浮かんだ、あの笑顔で茶をすする好々爺（こうこうや）にマリーは悪態をつきます。

「それだけじゃないんです。最近買い出したがこの国の色んな所を回つて誰かがこの国のために陰で手を尽くしているつて噂を耳にしていました」

(それ大体君よね)

運河や街道を人知を超えた力で復旧させた話を直接本人から聞いたマリ一は半目で無自覚朴訥少^{ぼくとう}年を見つめるしかありませんでした。迷推理はな
おも続きます。

「確証を得られたのはモンスターの件です。なぜか僕の行く先々でモンスターが倒された跡が見つかっているんです。一度も襲われなかつたどころか見かけたこともなかつたのも、これはきっとマ

リ―さんが僕を助けるために毎回先回りしてくれていたんですね」

（それ完璧君よね）

そりやモンスターをモンスターと思わず害虫感覚で退治していたら、行く先々でそんな風になるでしょ。推理披露を終えたロイドは姿勢を正すと丁寧に頭を下げ協力を申し出ます。

「お願ひします！　僕マリーさんに助けてもらつた恩返しがしたいんです！　できることがならなんでもしますから！」

そしてマリーは頭を抱えます。「なんでも」に反応して後ろでセレンが鼻血を出していますが気に

してはいられません。

本当ならぎゅっと抱き締めてありがとうございます。アルカにたいマリーですが躊躇ためらつてしまします。アルカにガエルに変えられる恐怖もありますが……

(利用したらロイド君は村に連れて行かれてしまう。この子の夢が絶たれてしまう……いえ)

目をつぶり嘆息しながら自分の気持ちに正直になります。

(ロイド君と一緒にいたい……か)

そうです。一番の理由はロイドと離れたくないことでした。ほんのひと月程度の間柄ですがマリィは完全に情が移っています。

（どう説明したら納得してくれるかな。まず自分
が規格外に強いということを自覚させて、それを
利用しちゃダメとあの口リババアに恐喝きょうかつされてる
つて……今日中にできるかしら？）

と、途方もない苦労がいると察したマリーは苦
肉の策とも言えるある行動に出るのでした。

「バレてしまつたわね。そうよ、私が巷ちまたで噂の英

雄：：勇者マリーよ」

ある行動、それは説明など面倒事を一切放棄ほうきし
ロイドの勘違いに全力で乗っかることでした。

「その救世主な私の見立てでは……あなたは力不
足なの」

遠回しに諦めてほしいマリーに対し、ロイドは真摯に思いの丈をぶつけ出します。

「僕は確かに非力です。でも僕の目指すカッコいい軍人はこんなことを聞いて見過ごせない人だと思うんです！　何ができるかはわかりませんが！」

実際一緒にならお釣りが出るくらいなんだけどね、とマリーは胸中で苦笑いします。

なおも真剣な眼差しで助力を申し出るロイドです。かわいい視線がマリーの胸に突き刺さります。

巨乳のチラ見とか性的な意味ではないですよ。真摯な眼差しで見つめられる彼女は身勝手な自

分を嫌悪しながらも救世主を演じます。

「気持ちは嬉しいのだけど来てはダメ……あなたでは力不足よ。『イーストサイドの救世主』として忠告するわ」

「でも……こんな話聞いて何もできない自分が嫌なんです……わかってます！ 自分が何の役にも立たないつてことぐらい！ それでも——」

（全くわかつていなじやないの、役に立ちまくつているわよ馬鹿）

マリーは心の中でそう思いながらそのいら立ちを別の意味に置き換えてロイドを睨みます。ロイドもまた負けじと真摯な目でマリーを見据

え言葉を続けます。

「それに王都に来て僕はマリーサンに何度も助けられました！お世話になりました！そんな大切な人が困っている時に助けられないのは男として嫌なんです！」

（何言つてんのよ……助けられるのはこっちのほうよ……）

父を取り戻すため一人身を隠し機会をうかがつていたマリーサンにとって弟のようなロイドの存在は久しく忘れていた「家族のぬくもり」を思い出させてくれたのですから。

更には炊事^{すいじ}に掃除、洗濯といつた家事全般から

お金の管理までやつてくれていたことも……
(もう完全にヒモじゃない!)

胃袋と財布の紐を摑まれていることを実感した
マリーは両手で顔を覆い嘆きます。その嘆きを勘
違いしたのか、さらに語気を荒げてロイドは食い
下がります。

「なんでもします！　こんな時何もできないなん
て僕は……」

伝家の宝刀「なんでもします」の連呼にマリー
はとうとう怒った口調になりました。

「そういうことを言えばいいって思っているの？
なんでもあります。頑張りますで自分の意見が

通ると思つてゐるの？ そんなことばつか言つてたら悪い人間に色々されちゃうわよ！」

「私は悪い人間ではないから色々やつても問題ないですよよね」（セレン）

「悪いぞ、頭がな」（リホ）

ギリと奥歯を噛み締めマリーは心の底から吐き捨てる気持ちで言い放ちます。

それはロイドに対してもではなく。

（本当に……最低ね……）

マリー自身に対してでした。いつもの弱気を必

死になつて抑え込んで決意をあらわにするロイド、
彼の成長の芽を摘つむような行為だからです。

「……僕は」

「あなたに来られると私が迷惑なの……」
本当は来てほしいマリーの辛さを曲解したのか、ロイド
はうなだれ扉のほうへと歩いていきます。

「ロイド様？」

セレンの呼びかけにもロイドは目を伏せたまま
です。擦るほど重い足取りで店の入り口に歩いて
行きました。

「ごめんなさい、ちょっと頭冷やしてきます。本
当に……ごめんなさい」

いつもの柔和な雰囲気は影を潜め、ほの暗い冷たさすら感じる聲音でロイドは外へと出て行つてしましました。

「ばたりと寂しげな音を立て閉まる扉。マリーはそれを物憂げに見送った後、深呼吸して気持ちを切り替えます。

「で、申し訳ないんだけど色々と聞かれた以上あなたたちには協力してもらうわ。王家を利用し戦争を引き起こそうとする不逞の輩の排除ねー」

とんがり帽子を脱ぐマリー。そこには写真の少女の面影を残す人物が立っていました。

「アザミ王国の王女、マリア・アザミがお願ひす

るわ」

「王女様……ですの」

「この流れで気が付いてなかつたのかベルト姫
……まあいいや」

三白眼をひっさげリホはマリーに近寄ります。

「やつと正直に言ってくれたな王女様。でもよお
腑^ふに落ちねえ点が山ほどあるんだ。それ片付けな
きゃいくら王族でも協力はしないぜ」

「いいわ、まず戦争反対派や一連の一」

「んなの後回しだ！ なんでロイドの協力を断つ
た！ 嘘ついてこき下ろしてまで！ 目に涙浮か
べてたぜ！ 同居までしている人間があいつの強

さ知らないわけないだろ！」

「そうですわ王女様！　ロイド様がいれば百人
力！　しかもなんでもするなんてこんな素晴らしい
キヤンペーンを見逃すなんてそれでもあなた王
族ですの！」

「あーセレン嬢……怒るポイントが違うぜ……」
別べクトルの憤りのセレンにリホがツツコミま
す。

その光景を見てマリーはちよつと笑いました。

「悪名高いと聞いていたけど存外優しいのね……
ロイド君のために怒ってくれてありがとね」

自覚のあるリホは「なあっ！」と大げさに反応

してしまいます。

「色々あるのよ。一個一個教えていくわね……実は——」

沈痛な面持ちでマリーハロイドがコンロンの村の出身であることを一人に告げます。

険しい顔で聞いていた彼女らも面食らつた表情に早変わり、そしてその驚きの表情も彼の心当たりありすぎる人並み外れた素行にすぐさま得心した顔つきになりました。

「というわけで、彼を今回の件に関わらせたら私がエルにされちゃうのよね」

「別にガエルになつても問題ないではないですか。

むしろ水陸両用になれる、かつ皮膚呼吸、肺呼吸と選べるようになつて、さらには両生類として男女問わずより取り見取りとざつと六倍はお得になりますわ、だから今すぐロイド様を連れ戻しなんでもしてくれるのでなんでもについて一晩じつくり問い合わせたいのですが」

セレンはロイドのぶつ飛んだ出自については納得できても「なんでもします」のほうは納得いかないようです。気負つた新入社員の初めての企画会議が如く、カエルに対する熱いプレゼンを展開し始めました。

「あと、ばれたらロイド君は村に連れ戻されて会

えなくなつちやうけどいいの？」

「よく考えたらカエルは夏場なんか夜の窓に張り付いたりして気持ち悪いことこの上ないですわね、大問題ですわ。やつぱナシで」

そして手のひらの返しつぷりもまた、付和雷同な新入社員のようでした。

一方リホは複雑な表情でした——しまつた普通の田舎者いなかものだつたら素直に利用しとけばよかつた！
という感情ともう一つ、

「じやあ親がいなつて話は本当か……いや、あの優しさもこんなアタシを友達つて言つたことも全部罠でも芝居でもなく——」

——「シン・パシーを感じていた」、その言葉も嘘です。はなかつたことがなんとなく嬉しく思えたようですが、もちろんそんなことマリーにはわかりません。ちよつと嬉しそうな顔をしているリホが気にはなりますが先ずは本題と言わんばかりに協力を要請します。

「で、申し訳ないんだけど手伝ってくれるかしら？大事にしたら何をしでかすかわからぬいから少數精銳で上手く対処したいの」

「まあいいぜ王女様」

「やけにあつさり引き受けたけどいいの？」

「王族に貸し作るチャンスってのもあるけど……」

強いて言うならシンパシーを感じたつてやつよ。
あえて憎まれ役を買って出たあなたの気持ちも汲んでな」

一方セレンは落ち着いた様子で同意します。

「私も協力しますわ。この国のために軍属に籍を置く以上喜んで平和のために尽力します」

「……ありがとう」

「そして！ 事が済んだ暁には王女様の権力をもつてロイド様を士官学校に編入！ 寮で私と同じ部屋！ そしてロイド様のなんでもします券の発行を要求しますわ！」

明らかに後半のセリフの熱量が違いました。

「……前向きに善処します」

口リババアに匹敵する傾倒っぷりにデジヤヴ&めまいが生じ、政治家のような玉虫色の発言で切り抜けます。

マリーはめまいを振り切つて元のシリアルス顔に戻ると二人を見据えます。

「じゃ、早速当日の話をしましょう……事なきを得てまた笑顔である子を！」

後戻りはできない、マリーの眼差しは二人に伝搬し真摯な顔つきで頷くのでした。

夕日に赤く染まつたイーストサイドの雑貨屋。

二人が帰った後、マリーは疲れて重くなつた体を椅子に預けます。クロムの手引きも優秀な協力者も得たというのにどことなく気が重いのはおそらくロイドのことが引っかかっているからなのでしょ。

（気持ちを切り替えましょう、マリア。これで黒幕の邪魔を防いで父さんの呪いを解くことに集中できる……）レン文字は邪魔が入つてしまつたら私じや連発できないもんね……）

そしてまた頭の中では「ロイド君がいたら」と考へてしまひます。協力を得られたらどんだけ楽か、という気持ちだけではないのは十分に理解してい

ました。無意識のうちにもらつたブローチを握つてしまふのでした。

マリ一は脳裏に焼き付いたロイドの悲しげな表情を振り払うと、夕焼け映^はえる町並みを窓越しに眺めます。

（そう、明日決着がつく、父を解放し元の生活に戻れるかも知れない……でも……）

ため息一つと共にボソリと不安を口にします。

「死ぬかも知れない……か」

マリ一はそう考へると、この窓の風景すらも愛おしく思えてくるようです。目を細め薄汚れた通りを眺め初めてこの店を開いた日のことを思い出

します。粗野だけど優しい街の人、そして視界に飛び込んでくるびしょ濡れのアルカー

「つてなんでびしょ濡れの師匠がいるんですか！」

窓の外にいる予想外の姿をした師匠にマリーはたまらず大声を上げます。アルカはゆらりと歩き出し律儀に入口から店に入り、水を滴しだららせたまま椅子に腰をかけるのでした。

ビシヤつという音とともにアルカはマリーに話しあします。

「……話は聞かせてもらつた。ワシやロイドを巻き込まないという約束はなんとか果たせそうじゃの」

また面めん妖ような術で人の会話を聞いていたのだろうと察したマリーは申し訳なさそうにします。

「ご心配おかげしまして申し訳ございません。この事件はなんとか自力で解決してみせます……」「うむ、よくぞ踏みどどまつたの。人間同士の勢力争いにコンロンの村が関わつていてはキリがないし身が持たないし面倒くさい人は成長しないからのお」

アルカの本音混じりの言葉にもマリーはツッコムことなく頭を下げました。

「お気使いありがとうございます……私自らの手で決着つけますから」

殊勝なマリーにアルカは不満げな御様子です。

「うーむ調子狂うのう。これが魔王やら人知を超えた輩が関わつていたら手を貸すんじゃが、ま、気負うことなく頑張るんじゃよ、マリア王女」

「はい」

店内が重い空気になり始めた時、アルカは話題を変えます。

「……はてはて、それはさておき」

濡れたローブの裾を絞りながら、アルカは憎々しげに言い放ちます。まるでこれが本題かのような口ぶりでした。

「あの水晶が瞬間移動のゲートだと知つていな

がら、ナゼ井戸に沈めたのかの……マリ一ちやん？

「あ」

マリ一はついこの前の勢いに任せてやつた行為を思い出したのでした。

「年甲斐もなく驚いてしもうたよ……よくぞ踏みとどまつたとねぎらいにすつ飛んで来たら井戸の中だつたんじやからな」

「い、勢いに任せてやつてしましました。今は反

省しています」

謝罪のテンプレートに対しアルカは満面の笑みで答えます。

「……何を怯えておるのじゃ？　ワシは怒つてな

いぞマリー」

「し、師匠」

師匠の寛容な態度にホロリと涙がこぼれそうになるマリー。

「……もうすでに十回に一回の割合で語尾に『ニヤ』が付く呪いかけといったからもう怒つてないからのお」

「アンタ！　これから大事な決着つて時になんてことしてるんだニヤ！」

そしてマリーは自分の語尾に顔を赤くして身悶みもだえします。ホロリどころかマジ泣きです。

「うわあああ！ 年頃の娘に何させるんだニヤ！」

「あらら、十回に一回の割合なのに二回連続なんでお主はついとるぞ」

「ツイテナイ！ あんたに会つたことも含めてついていない！」

「ま、ロイドを悲しませた罰でもあるんじゃ、甘んじて受け入れるがいい」

身悶えするマリーをアルカは楽しげに眺めます。

「おおそろじや、お祭り当日のロイドはワシに任せなさい。ちゃんと面倒見ておくから安心して決着つけに行くんじゃよ。死んだら骨は拾つて燃えないゴミに出しておくからの」

そしてマリ」に「それ、お祭りの日にロイド君と遊びたいだけじゃ」と言う暇も与えず颯爽とアルカは水晶の中へと消えていつてしました。

「このオニロリババアアアアアアア！」

「うつすら星が見えてきた黄昏たそがれどき時に魔女の咆哮ほうこうが轟とどきいたそうです。